

川柳塔

昭和四十一年一月九日創刊
昭和六十一年一月二十五日印刷
昭和六十一年二月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年 通卷七〇五号



日川協加盟

No. 705

二月号

NEW FORMAL COLLECTION



泣いて笑って……
夜を通り過ぎたら
また陽がのぼっていた
男のロマンと
フォーマルと。

OSK JEFF
ORIGINAL DESIGN

株式会社 **大_エスケ_**

〒540 大阪市東区南新町1-13
☎ 06(941)8015

菊正宗

伝統の味を贈りものに……



料理がいきる 辛口の本格派

日本酒で乾杯!

神戸・灘
菊正宗酒造株式会社

朗報

西尾 栞

ここまできたかと思うと嬉しき限りである。因みに、日本川柳協会理事長の祝賀記念川柳大会は左記の通りである。塔社からも一人でも多く御祝いの川柳大会に出席しましょう。

一月九日放映のビデオとりに、旧臘十一日に東京のNHKに行った。早速「共白髪」という題で十句所望されて、とりあえず十句の員数を整えた。即席共白髪を左記に記して余白を埋める

日本川柳協会理事長 藤島茶六氏が、

勲五等双光旭日章の光栄に輝かれた。川柳界にとって、これほど心強いことはない。

しかも、官公署の何十年勤務という、通りいっぺんの受章でなく、川柳一本で受けられた洵に貴い勲章である。

今一つ、長崎川柳社の主宰池田可宵氏が藍綬褒章を受章された。可宵氏もまた川柳の功績によって受けられたことは洵に目出たいことで、正に川柳文学も、こ

日本川柳協会理事長

藤島茶六叙勲祝賀川柳大会

日時 昭和61年3月30日(日)一時間会

場所 東京都・皇居前半蔵門会館

兼題 勲章 山田 良行選

日本晴 野村 圭祐選

母 磯野いさむ選

元氣 西尾 栞選

最高 渡辺 蓮夫選

× × × × × × × ×

夫唱婦隨そんな古さの共白髪

ポーナスの入歯の順も共白髪

家裁までゆくべかりしを共白髪

明治大正昭和を生きて共白髪

共白髪竹を踏み竹を踏み

眼科歯科連れだつ今朝の共白髪

サラ金もギャンブルも知らぬ共白髪

五十年上手に負けて恙なし

僕が私に先に逝く話共白髪

この辺で折れておきます共白髪

座右の句

考えを直せばフツと出る笑い

(伍健)

私の句

生き場所がここにもあった屋根の草

米澤 暁明

川柳塔 二月号 目次

題字・中島生々庵／表紙・直原玉青

朗報	西尾 栞	(1)
年輪	本田恵二朗	(2)
川柳塔(同人吟)	西尾 栞選	(4)
自選集	東野 大八	(30)
■川柳太平記(93) 川柳の群像 福田山雨楼	阿達 義雄	(34)
■連載 誹風柳多留廿六篇研究(二十三―二十四丁)	黒川 紫香選	(36)
江戸川柳に現われた八百屋お七(七)	高橋 操子	(38)
水煙抄	辻 白溪子	(40)
秀句鑑賞	同人吟	(33)
「水煙抄」	白溪子	(59)
61年度二賞候補作品中間発表		(56)

年輪

本田恵二朗

年輪という文字の意味を広辞林に問うてみると次の通りの答があった。―樹木の材部に見られる層のこと―春の頃に生じた材部は秋の頃に生じた材部と著しく其の組織を異にするので秋材と春材との間に明瞭な境界線を生じる。かくして年毎に層を増すのでこれを年輪と称す。この年輪の数で樹木の年齢を知ることが出来るのである―人間の年齢の数とか、体験の数などを樹木の年輪にたとえて描写されることしばしばあることは誰も先刻ご存知のことである。私も愛用している文字であると同時に年輪の尊厳とか、値打ちとかを考えてみたり、噛みしめてみたりする癖が身についてしまっている。そして私自身の表裏を観察したり、その姿を描写してみたりすることしばしばである。私の年輪の数は現在七十八本目ということになっている。丸いやいびつなのや、いまにも途切れそうであやうく繋がっているのや、間伸びしたのや、下手な落書みたいなのやが層を作っている。考えみると多彩多様で面白い構図だなと思えぬ

愛染帖……………橋高薫風選……………(60)

近畿文字放送から「川柳教室」放映……………(63)

白岩文衛さんを悼む……………土居耕花……………(64)

文衛さんを偲ぶ……………田中正坊……………(65)

初歩教室……………阿萬萬的……………(66)

「家」……………弘津柳慶選……………(68)

一路集「のん気」……………中川幸一選……………(68)

「腹」……………吐田公一選……………(69)

柳界展望……………(70)

本社一月句会……………(71)

各地柳壇(佳句地10選/奥谷弘朗)……………(75)

■各地句会だより「川柳塔唐津支部」/久保正敏……………86

■2月各地区会案内……………87

■編集後記……………89

座右の句

おいしいと言わない人と妻さとの

(水客)

私の句

しあわせの味がわからぬままに生き

中田白李

こともない。これが私の人生の縮図だと思
えたりもする。

年輪のいびつなところにある値打ち

私の川柳年輪はどのあたりから始まったの
であらうかと観察すると、遠く大正末期で旧
制中学生の頃であることを確認して、われな
がら驚いている。井上剣花坊の句と谷脇素文
の漫画とを組み合せた所謂ボンチ絵川柳にい
たく興味を持ったのがその中学時代である。
歯科医学生になった昭和初期頃には作句の真
似事などして自己陶醉をしていたものだ。

戦時という空白を経過して、川柳界も目を
覚すに至り、遂に私の川柳人生は本物になっ
てしまった。故麻生路郎師の温い知遇を頂く
に及んで私の日常生活は川柳臭粉々となった。
故川上三太郎師の楽しい知遇を頂くに至って
一層に川柳臭い体臭を発散する状態になっ
てしまった。そこで私の川柳年輪は何点ぐらい
頂けるかなと思ってみると冷汗三斗の思いが
して、ひたすら恥じるばかりである。今から
でもおそくはないとわれとわが身に言い聞か
せて、七十九本目の年輪からは、いびつな
ながらも味と匂いと彩のある年輪を描き且つ磨き
をかけたいたいのだと念願している。殊勝な心
掛けねと老妻が笑うが、小言を聞くよりはよ
ほどましであると言いたげな顔に見えたりも
する。老川柳家のたわごとを聞かされて、ご
めいわくさまと多謝してペンを置く。



西尾 栞 選

岡山県 嘉数 兆代賀

肩書を捨てて焚火の輪がぬくい

すこしとぼけて相手の肚をよんでいる

尺取虫の歩幅を崩すまいとする

袖だたみ女に明日のある限り

馬鹿になろうバカになろうと米をとぐ

季は巡りめぐりて梅は白く咲く

今治市 越智 一水

娘婿酔わせて酔うて新春三日

恋をした浜へ孫つれひ孫つれ

白菜は寒さに勝って味がつき

ひと休みしないかと言うにわか雨

刑務所のま上で月が澄みわたり

わかっている嘘合いづちをうって聞き

和歌山市 西山 幸

絵馬に書く願いも悟れないままに

日めくりの格言からは眼をそらす

責任は持たぬ張り子の虎の首

つきまとう影の重さに立ち止まる

莫迦になることも覚えた箴の音

重ね着の一枚ずつの負け惜しみ

西宮市 林 はつ絵

十二月残念賞を撫でている

ポーナスの無いのに馴れて年を越す

おおらかに無名の土偶は咳をする

ライターがすぐに点かないわけがある

素顔なら少し言いわけ赦される

ふるさとは雪かきという泣き寝言

松原市 谷垣 史好

大あくびまだ一月の後遺症

自らに愧じるコートの前を立て

寒波続々油断のならぬゴルバチョフ

チエホフを読む小雪花チラチラ
そんな夜は寝る子に本を読んでやり
佗助を活ける魔性の花鋏

八尾市 高杉 鬼遊

建国祭まだ神さまはご存命

軍鑑マーチ黒い車を走らせる

割り算もできぬ議員の数でもめ

役人と坊主の喧嘩おもしろし

そのうちによくなくなるなどに見舞客

冬の雲ちりめんじゃこが干してある

桜井市 岩本 雀踊子

付合にくい友のひとりが五黄の寅

夢の様な話を女うれしがり

亡母の苦勞知っているので愛妻家

めし食えるだけ天職という仕事

カニシヤボテン大事に大事にして枯らし

冬を越す蠅にとしを問うたろか

松江市 恒松 叮紅

太りすぎです中年の皮ペルト

雪紛々世相は暗い十二月

故里に亡母祀る日の雲流る

思い出を語るに亡母のわさび漬

薬を編む農夫の背なに暮れる過疎

母性本能一と目一と目の愛を編む

倉敷市 小野 克枝

泣き虫を軸に廻っている平和

貰う身になつて小さい方を買う
障害の子に鉢巻きをしめてやり
実年へ足組みなおす父の膝

父が父である証明の帽子掛

日めくりを仏の父と共に繰る

兵庫県 遠山 可住

単身赴任の下宿で二等兵に還る

ものわかりのよい女にはなり切れぬ

一万円は高いが蟹のうまさかな

五分早く出たらと私もわかっている

定年になつても家に居てくれず

一つずつ年寄り病が棲みに来る

島根県 小砂 白汀

みの虫の位置豪雪を知っていた

敵が塩送ったような賀状くる

愛されていた女が爪を研ぐ

髪の香よわれに邪心はなけれども

寒椿肋の軋む音で咲く

表面へ出たがる奴は砂利ばかり

平田市 久家 代仕男

クリスマス済んで落ちつく卵の値

美も醜もチロリン村にある平和

逢い初めの日から狂うた独楽の芯

指切りを信じた頃はうぶでした

飽食と美食育児の乳も枯れ

自販機がいましめていいる小さい欲

岡山県 土居 耕花

みの虫に冬の暮らしを教わろう
二月二十九日の手形切つて置く
家計簿の中で男を泳がせる

中折れを冠つて偉い父になる
目印の夫の禿を追うて行く

ワープロにエッチな文字を入れておく

堺市 河内 天笑

C Tとやらに脳みそ輪切りされ
ふところの中まで見抜く握手なり

二次会に誘うてくれぬ免許証
椰子の實のくには裸のクリスマス

若うみて貰うた酒で酔い潰れ
門灯を消してやったと朝帰り

米子市 林 瑞枝

春を編む文箱に翔んできた小鳥
ひと言のお褒め耳朶から消えぬ

紙人形いつしか浮世絵のなかに
組板に乗せて叩いてきた民話

傷あとを秘めて女の葉が落ちる
引き際の虎の尾っぱは動かない

島根県 堀 江 正朗

雑煮餅見えてたころの亡母の顔
こんなとき見えたらまるく済むことも

言い返す自信を指先耐えている
冬ごもりご馳走できる音のなか

なにくそと言いたい時の眼が欲しい
懐しい雪おぼろ気に亡母の顔

竹原市 小島 蘭幸

ひとときの蒸発とするパチンコ屋
こころの逃避がはじまるブラックコーヒーよ

男ばかりで雨の京都もないものだ
単身赴任酒もタバコも止めました

コンクリートの上を歩いてくる他人
妻も子も眠り詩人となる男

八尾市 宮西 弥生

旧姓にもどつた訳の年賀状
一善の席ゆずり合う師走

あたたかい情が走る冬の橋
一ことの情がほしいコップ酒

救急の処置室覗く河内弁
寝に帰るだけの師走のすきま風

島根県 堀 江 芳子

白い杖清め今年も頼みます
いい児だと言いたい寝顔して古希路

爽やかな恋かも炬燵のんのんと
ワンマンの真底淋しがりやです

折りたたむ一日悔いもその中に
結論は笑いこけてる夫婦箸

富田林市 岩田 美代

信じたし袴が似合う男たり
情熱は程よいぬくさで持っている

仏像の目も乾いてる冬の古都

シャンデリア女は茶粥恋うている

色々とあつて師走の喫茶店

翔んで跳んだ十三日の金曜日

大阪市 津守柳伸

平静を装う冬の風ばかり

甘えたい欲を可憐に使いわけ

聞き流す特技へ愛の鐘が鳴る

白い歯の虜になった二三日

流される棹にすがつて見届ける

修羅いくつ越して大人になり切れぬ

堺市 河内月子

妻のカゼ男所帯をまごつかせ

塩昆布を夫が煮てる日曜日

禁煙がすこしは続く風邪のあと

その先は言わないことにしてお酒

冬の陽へしばらく背中干す夫婦

娘とふたり女同士のはなしなど

米子市 石垣花子

負けた日のスロービデオへ背を向ける

切れ味をためしたくなる人の性

人文字の中で謀反を考える

ネジ巻いた分だけ動く振り子時計

鳩を撃つ話は耳栓抜いて聞く

米子市 政岡日枝子

一期一会あなたは私の夫です

太陽は味方すつかり忘れてた

どの人の匂いも好きな鼻になる

昔むかしの話が好きな人ばかり

千羽鶴放つわがまま許されよ

夕ぐれになつてもやまない鬼ごっこ

豊中市 安藤寿美子

グローバルな視野で農夫は種を蒔く

冬すみれ何故かここに沁みてくる

つぶやいて掃く手を止めて冬すみれ

ここまではとどかぬ日射し冬すみれ

スカート一枚買えばおさまる腹立ちで

たこ焼とお刺身両手に時雨てる 松原市 玉置重人

よく聞けば老人ホームへ行くプラン

待つことも慣れてはかどる毛糸針

それなりのコネがあります皿洗い

終業ベルさてこれからが忙しい

ライバルの襟の白さが気にかかる

テレビばかり見ている雨の管理室

大阪市 西出楓楽

さかむけの指の先から昏れてゆく

真冬日へ痛むは抜いた親しらず

優しさの押し売りにあう風の街

喧嘩するエネルギーなら持っている

らりるれろとかく敬語はむずかしや

負けた日のポインセチアの朱を赦す

尼崎市 春城年代

野の仏あつい情けにほだされる

やさしさに溺れてならぬ花八つ手

亡母の忌にははと似てきた叔母の背な

水曜の卵売り来るオルゴール

リリヤンの帽子に残るあねいもと

冬はまだ序の口である今朝の霜

和歌山市 松原寿子

半熟な愛情だから明日がある

なお慕い刹那を炎えて砂時計

逢える日のはざま女の海ゆるる

夢を抱くはるの乳房よ黒髪よ

口紅の彩から答もれている

さだめゆえ距離を置きます赤い毬

大阪市 神夏磯道子

剪定の缺気楽な音がする

信じたらイミテーションが光り出す

苔むして石やわらかく見えてくる

つつがない今日を喜ぶうどんすき

あちこちの訃報を聞いている寒波

すばらしい今年を惜しむ除夜の鐘

和歌山市 福本英子

咳一つ震度3ほど気を遣い

老母の爪剪る伴せをまだくれる

仲直りこんな綺麗な陽が沈む

さしきわり無い言葉だけ置いてくる
サンマ焼くコンロ炭ごと貸してくれ
赤い羽根少し聖人ぶってみる

京都市 山本規不風

捨てる恋拾う恋さざんかの旅の宿

わたしだけに判る体罰受けている

冬の灯を透明にする香水瓶

風の私語聞かずに驕る寒椿

生れたら貰う仔犬につなぐ夢

冬の旅温い出会いを持ち帰る

尼崎市 春城 武庫坊

青い鳥周遊券で追いかける

キャンセルの切符を買って事故に遇い

流行の風邪が電車に乗ってくる

道真と同じコースで赴任する

主流から外れ影武者の親分に

菓子折の底で諭吉が苦笑い

唐津市 久保正敏

待ち人が来ると秒針早くなる

コーヒーはホットに限るツーピース

栄光の字幕の消えて行く早さ

止り木にしのおと書いた渡り鳥

デュポンの炎百円ライター負けていず

尾瀬巡り疲れた老妻の赤ズック

大和高田市 岸本豊平次

妻を撮り妻に撮らせて夫婦岩

子の便り帯に挟んだまま暮れる

年頃がいて家計簿が四苦八苦

朝の陽が通勤電車に出る冬至

時雨来ていい塩時にして帰る

語り部の如く貧しい日も語り

寝屋川市

岸野 あやめ

披露宴今宵会う人皆美人

おねだりをなさる筈ない阿弥陀様

ポックリさんお札参りは出来ません

再会に一抹の不安なしとせず

気忙しいうちの王様女王様

バーゲンの入り口でライバルに逢う

伊丹市

櫛谷 寿馬

湯どうふや妻と一年振り返る

熱爛と酔がきを通る暮の咽喉

突っぱって見たが募金へ向く心

中流に不向きな指で蟹を撰る

タレントも神も仏も十二月

弘前市

波多野 五楽庵

十二月帳簿が赤いまま沈む

カギ鼻で頑固で戦の好きな父

寒気団雪の深さがまぎれこみ

交番へ疲れた地図が聞きにくる

七人の敵が崩れる鼻ぐすり

変り映えない鞆の中の初春

熊本市 有働 芳仙

味噌汁の味で時差ボケ醒めかかり

アルバムの底へ沈んでゆく夕日

水割りの氷のとける独り言

ハレー彗星曰く地球よ汚れたなあ

倉敷市

野田 素身郎

棟上げを隣は冷たい目で眺め

歯の治療に合せ出張予定組み

道教えてあげただけのに気が晴れる

お互いの薬見せ合う老い二人

正月に備え胃薬歯の治療

大阪市

西森 花村

一枚の甲羅で万年亀は生き

形見分け樟脳付きで持つてゆく

胃の調子松茸食べてから狂い

初日の出今年は遅刻せぬように

紅白の白はずれの玉の色

京都市

都倉 求芽

壺の中に入れて治外法権とす

かまぼこのへりの傾斜を歩かされ

隠し球使うてからの狭い道

ライバルの訛りに負けたなと思ふ

筋壁は拝観停止の冬木立

倉吉市

奥谷 弘朗

雑然とちらした部屋があなたかい

この人と決めて握った手が温い
尾を振らず独立独歩守り抜く

生き残る為の握手がまだ疼き
あまりにも良心的で案じられ

柳井市

弘 津 柳 慶

うかつにも妻の誕生日を叱られる
検診へ医者言葉に引っかけ

ロボットにヒューズが切れて皆狂い
途中下車も出来ぬ飛行機の客となり

底辺を明るく生きるコップ酒

京都市

松 川 杜 的

歩道橋もいいな京はぐるり山

菊一輪京の老舗にある重み

代書屋が教えてくれた法の裏

ベートーベンの第九 竹を踏みながら
横顔は鼻の高さで値が決まり

笠岡市

松 本 忠 三

札付の悪と他人は言うけれど

言分けを聞いてやるのも母である

少々は酒も菜と言ったかな

人前で蓼食う虫がのぼせてる

横道で金に糸目はつけません

鳥取市

両 川 洋 々

恋の樹海で熟女出口を見失い

洗脳をしました尻に敷きました

千の道に千の出逢いがありおんな

ロボットに切られる首だ洗うまい

十字切る罪で汚れた手を洗い

肩書で呼ばれ男にある孤独

六文の手形へ血を売り汗を売り

枯葉一枚落ちてゆくあなたへの慕情

終章の余白は仏へ開けてある

男一匹愛の秤に載せられる

倉吉市

渡 辺 独 歩

肩書が外れて鬢に霜が降る

妻の留守貧乏ゆすりの紐弛み

実年のカエルコールに小さい嘘

あやまちはステンドグラスの絵の中に

サラファンを纏えばウオツカ炎えてくる

大阪市

河 井 庸 佑

静まっているのにわざわざかき回す

言いたくは無いが言いたいことを言う

発想の転換出来ず不覚取る

手回しの良さが却って気に入らず

退いた本当の訳が読み切れず

出雲市

原 独 仙

憂きことの話は止そう十二月

それぞれの轍残して人生路

東天を拝す明・大・昭を生き

今成金マッカーサーのお蔭です

ああ余生今日も感謝の陽が沈む

米子市

小 西 雄 々

終点へ貧乏ゆすりのままで着き

兵庫県

辻 文 平

誘惑の灯から聞こえる破調音

冥土までねたむ台詞を用意する

編棒をせかす大山雪だより

土壇場で妻の勇気をあてにする

倉敷市 稲田豊作

八十路なお大黒柱父の自負

この歳で金の生る木に未だ会えぬ

笑うのに税は要らぬと笑いこけ

老いはよし忘れていたで宥される

諦めただけを解脱と誉められて

仙台市 川村映輝

一万歩歩けば健康ついてくる

緊張のない人生は早く古い

燃えるものあって老妻うす化粧

頑固な子やっぱり親父の子だという

欲深いうちは美しく老いられず

大阪市 中川滋雀

凜として菊の白さをまといたし

あてのない散歩にひそかなあてがある

身に覚えのないと言えぬネガを焼く

鼻は鼻なりに黙って呼吸をする

乾し柿の故郷が届く雪便り

大田市 藤田軒太楼

捨て石の妙手そろそろ効いて来た

年忘れ酒が言わせた愚痴の数

仮名書の紙面に迷う老眼鏡

ワンテンポおくれ後味嚙まされる
出稼ぎの当なし過疎に雪積る

松江市 小林孤呂二

教育勅語知らぬ教諭の愛乏し

県境を跨いで政治の差を比べ

酔うほどに五情へつつまれゆく師走

大根がうまく煮えてる母の味

レントゲン撮られてところ細くなる

松江市 柳楽鶴丸

おらが春妻の香残る柚子の風呂

御先祖は大切にします無神論

嫌い好き女辺の天邪鬼

「お伴せですか」と北風窓を打つ

商談成立十三日金曜日

松江市 舟木友根一

普段着で来いと欲待されている

三食によるめきドラマ付いている

堪忍袋には母の血が流れ

平和とはこれいいのか週刊誌

六十路にも上りがあつて楽しけれ

鳥取県 清水一保

明日は散る花の言葉をしばし聞く

竹光と真剣勝負するかいな

下積みそのままと母は言わず古い

愛情というゲンコツは父のだけ

真直ぐに生きて神様とも口論

東大阪市 齊藤三十四

バーゲンへ少し無駄買いするもよし
定退の祝い妻の皺を見る
窓際に来てても会社の生字引

五黄寅もちよっぴり弱気七十坂
ふしくれの指から手彫の艶がでる

大阪市 江城修史

くりかえす無策へ初春の幕が開き
木枯しが孤高の老いは捨てと鳴る
どもる子のひげ目一言いいしふる

四面楚歌父の素顔が枯れてゆく
想い出にすがれば空しさだけ残り

東京都 増田次章

背のびしても働き蜂の遊び下手
サラリーマンだけが実年老けたがり
運は気まぐれふさわしくない奴に

『塞翁が馬』と左遷地からハガキ
媚びることできぬ報いの椅子でよし

名古屋市 越村枯梢

洗われて美男にかえる石地蔵
日銭数えて余りに軽い縄のれん
漫画文字娘は恋を知りはじめ

泣き癖のついてしまったパンの耳
好きな風で廻り出すのは風ぐるま

羽曳野市 塩満敏

不景気の庄助朝寝が出来ません

貸した傘返してほしいとふと思ひ
松喰い虫与作もついに転職し
娘の息でみがいたリングよく売れる
さげて来た筈の手鍋も風化する

堺市 高橋千万子

ちぎり絵のトラ出来上り春を待つ
ポーナスのない人二二が五の稼ぎ
ほめられる夫と暮してなせ淋し
人愛すゆとりもなくて今日を生き

来年から実行します十二月

和歌山市 内芝登志代

半分ずつ食べて絆温まる
お隣の奥様美人でもめている
気まま放題生きて不満抱いている
ひとり居へ小菊一輪尚さびし
人生は裏と表の使い分け

玉野市 小谷仙山

並木道浮気の虫が行き戻り
七転八起で神に計られる
久し振りつもる話が後や先

血も涙もないが人形の瞳がこわい
一年が早いと思う十二月

島根県 西村早苗

見送りに妻が知らない女がいる
初めての娘が住む遠い坂続き
届かない距離ハンカチを振りつつけ

黙って歩く不服があるらしい
クラス会次は誰かと無駄話

桜井市 河合茂雄

操りの糸にはぶら下がり度くはない

奈良県に噴火の山のない安堵

頂上で振る約束の旗をもち

実年に敗者復活の道を開け

テープ切るまでは勝負を諦めず

岡山市 川端柳子

ときめきが花では噂弾まない

先生はくすり効いたと上機嫌

ビル横になれば楽だろヌツと佇ち

思い出の陽溜りのあるさくら貝

海をみた丘でいつしかビルの波

寝屋川市 宮尾あいき

猫の手も借りたい極月風邪の床

ラーメン屋ののれんをくぐる師走風

風邪で寝た日から日めくりそのまんま

鏡さんたまにはゴマもするもんだ

もうそこに希望に輝く虎の新春

大阪市 本間満津子

一つずつ時が攫って行った夢

ボロ隠しだからコート脱がれない

家族皆A型突破口がない

頼るなと張子の虎が首を振る

コロンボのコートを軽く見てしまふ

保証印義理の重さよ悲しさよ

タイミングがずれて重たい鬼の首

返り血は浴びずほほえむ仕掛人

明日の日は所詮わからぬ結果論

涙もろい女と見えぬ形見分け

和歌山市 堀端三男

振り返ると亡父の面影追っただけ

まなうらに消せぬ面影抱いている

苦勞したことが笑える余裕でき

コントめく会話で通じ合う夫婦

玩具ごと口止め孫にバラされる

和歌山市 若宮武雄

一日の計こそ大事喜寿の坂

賽銭をどうするへりの初詣り

素晴らしい一日だったもう暮れる

わが道をゆく我が影に励まされ

恐縮はこちらそんなに謝まれ

町田市 竹内紫鏡

いい学校でしたいじめに少し遭い

回覧板まわす自適を知られつつ

N製鉄所見学(三句)

鉄つくる男のロマン人工島

重量感いずこぞきしる音がなし

ヘルメットいつか詩人になった技師

大阪市 黒田真砂

美祿市 安平次弘道

故里の風にもらった温いうそ
故里の駅は無人の葉鶏頭

うそ少し交せて熱かん妻が出す
夢一つ初春に持越す桜貝

三人の子が皆やさし老いの初春

呉市 林野甦光

掌の痺れ雪国そだちは朗らかで
筆足して冬の絵すこし暖かく

つまずいた石が節煙せよと言う

天職の匂いだなにおか憚らん

父の行く道に楔が打ってある

倉敷市 小幡里風

門松へ不埒小犬が足をあげ
列島は春です僕も仲間です

粗大ごみそうだと自分も領ける

メリットがあるから少し遠廻り

負けそうでつい父さんと呼んだ夢

竹原市 森井菁居

やるならやれ次の手は打ってある
運命線過信積木の城が落つ

抜け道が背後にあった四面楚歌

簡易保険全国代表者会議（郵政省）二句

本省に来て官服の重み知る

東京タワーのてっぺんに置く僕の虹

宇部市 平田実男

受付の笑顔淋しい日もあろう

厄介をかけ合い太くなる絆
税金を払う仕合わせ考えず

後添いへ犬も仲々なつかない
採算のとれる保険になる不幸

富田林市 藤田泰子

人柄が生成り木綿のようで好き

峠まで気付かなかった風の音

語らなくても母の苦勞は知っている

秋の夜がとても短い二人です

溺れてはならぬと思う春の海

富田林市 田形美緒

予定日は十三日の金曜日

家なくてしがらみだけはいってくる

散らかつて居心地の良い友の家

喧騒に安らぎがある街育ち

引き止めてほしい未練の氷雨降る

米子市 林荒介

ジント凍って風も無言わたしも無言

昼の月淋しい者が輪をつくる

地に還り来世も同じ藪椿

耳底の悪がだんだん芽を伸ばす

足並が揃えば白齒熱くなる

奈良市 森田カズエ

野良猫に雑炊作る妻がいる

ママよりもやさしいパパの参観日

日替りに恐いドラマをうむ地球

土砂降りだなんて砂だけ責められぬ
老衰で死去幸せな活字かも

大阪市 天正千梢

抱いたら負けるぐつとくいしはり

紅葉散る神の摂理に流されて

年忘れなどと盃かわかない

「罪を憎む」ときれいな事を言う

図書館が近くにありて安らぎぬ

東大阪市 森下愛論

結局はラーメンライスにするメニュー

屈託のないのが取得で使われる

主だぞ小言と愚痴で日が暮れる

雪やこんこん子供炬燵でマンガ読む

何がどう気に入らないか妻無言

岡山市 時末一灯

表札のゆがみ直して待っている

独り言まだ結論の出ぬ夜明け

潮引いて独り相撲の貝になる

寮歌祭破れた恋を追っている

派閥色濃淡分けて秋深し

寝屋川市 稲葉冬葉

違和感のないシナリオが出来すぎる

遠吠えを聞く開けたことない貸し金庫

風に乗る私語は偽り溜めている

片目ダルマに細い絆が付いていた

白いもの舞うて家出の犬帰る

浜田市 中川幸一
買ってやりたいけれどダイヤのゼロの数

大正にじんと応える枯すすき

たよりないあなたと添うた男運

大人の真似をすると非行と決めつける

泥舟の誘いに乗った欲の皮

寝屋川市 柴田英壬子

少年と少女に戻る柚子の候

事始め京舞の家に生きつづく

山茶花の朱に冷え込んだ背を恥じる

老妻の呼び名に一步近くなる

正月の空気を醸すみかん剥く

鳥取市 森田熊生

適当にだまされてやる芸が出来

私にも記念日がある日記書く

脇役に徹した芸が温かい

言い抜けたつもり冷めたい風と会う

もうみんな忘れる白い雪が降る

羽咋市 三宅ろ亭

村万雑納めた頃に村は雪

吹雪く日は肩寄せ合って過疎の家

新年から締めるぞ米国製ネクタイ

何となくほっと送金済ましてる

感激した記事老化防止かも

神戸市 山口美穂

枯葉が舞うそれだけのこと亡父思う

お隣の犬に来客知らされる
山茶花がはらはら散るよ霜の朝
ワイングラス時のたつのがはやすぎる
キャッシュカードが嫌いで窓口に並ぶ

岸和田市 清野こう

十一月十三日山形帰郷六日間雨続き(四句)

国訛りそこ此処に聞く上野駅
故里の板谷峠の力餅

冬構えまだ整わず氷雨降る

出稼ぎがそぼ降る雨の村を出る

再びはまみ得ぬ人よ村時雨

岸和田市 古野ひで

長生きもほどほどがよい老いの夢
古いひとり直ぐ暇人に仕立てられ

完全に煮つまるまでの落し蓋

ジョークひとつ言えぬ男のいかり肩

ひとひとり許して心軽くなり

松原市 佐藤藤子

意気込んで春になればと書く便り
標的は虎慎重に矢を番え

本買うて初恋にも似たところ抱く

劣等感自動ドアが開かない

父の死の記憶に春の雪しきり

河内長野市

井上喜醉

実年の敵か味方がダイエツト
建國へ触れず旗日は山登り

船頭が多い労組で先暗い
発想を練ると野心が口を開け
外遊の息子へ胃薬プレゼント

羽曳野市 榎本吐来

再職の窓の西日がものを問う

連休をひさぐブルーの朝を出る

手初めにネクタイの色赤くする

答まだ追う気の髭を撫でてみる

別れる気がない諍いがまだ続き

大阪市 北勝美

アロエにもビニール被せて待つ冬至

制服を着ると守衛さんみな美男

しょうむない事に神経すり減らし

当分はゆつくりしなはれ京の寺

その内に忙しくなります懐が

米子市 青戸田鶴

みつめるとまた遠くなる秋の道

昼下りテレビも模索しているな

少しずつ空気ゆすってみたい部屋

湯けむりへ明日の事など思うまい

今日のこの夕陽コピーしておこう

米子市 田中亜弥

引き返す道わだかまり消えていた

他言せぬ鳩を使いによこします

蟹の子は赤い柿まで嫌いぬく

生い立ちをつつむ訛はあたたかい

黒と白きめる夕べの道急ぐ

米子市 寺 沢 みどり

土ふまず持たない鳩で落ちつけぬ

階段の中ほどに置く鬼の面

冬の陽へ約束ごとが多過ぎる

夕暮れに放つやさしい花言葉

ふる里の道にむかしの幅がない

米子市 澤 田 千 春

つまずけば夕ぐれの灯がまぶしくて

旅に出て又も買います亡母の鈴

檜山のあたりの鬼に負けられぬ

照明はないがこつこつ石を積む

つり皮に今日の懺悔とゆれている

島根県 榎 みどり

秋深む一葉静かな水の渦

みぞれ降る命日噂で日が暮れる

一枚のカレンダー師走の風がふく

冬の窓うつすらはこりする絵具

虚勢はる後姿へ年の影

島根県 榊 原 秀 子

飲む友がきてわびしさから逃れ

やさしさを忘れた人のなかで泣き

発表会着せる服など気にかかり

赤い灯青い灯急ぐ家路へ遠くなり

思惑があるが素直に好意受け

島根県 錦 織 文 子

造花一輪貧しき胸を飾りけり

20パーセントの雨がぬらした日和下駄

墨絵画くたった独りの彩で画く

結局は豚のシッポもみとめられ

押している筈が押されてた五十年

今治市 矢 野 佳 雲

ご近所でどう言わりようと生きている

痛いところ突くとベツトも牙を剥き

月丈が見ている歩道橋渡る

手応えがいいと陳情から帰り

片道は行列でゆく渡りぞめ

榎原市 岩 井 本 蔭 棒

偉い人こないにたんと居る叙勲

表札を見ながら歩く他所の人

相性にこだわってまた年暮れる

容疑者の方が元気な民主主義

干し柿や喪中はがきの白さかな

新宮市 川 上 溪 水

出直すと決めた日記の字が生きる

よちよちが危い方へばかり行き

吉祥印ローンにばかり用があり

平凡という倅せが物足らず

保険屋の例えは恐いことばかり

和泉市 西 岡 洛 醉

太陽に素晴らしい事聞かそうか

妻が居て友が居て詩があり

薬草に頼る五十路の歯痒い日
小春日に愚痴を忘れた凡夫です
中流の本心ゆさぶる空っ風

守口市 野呂右近

助け合いに参加が出来る幸思う
御互いの為思い合う口喧嘩
明日は雪娘の居る空の子報聞く
御近所で硝子の割れる音寒し
持時間極度に減って行く余生

西条市 片上明水

重い日も軽い日もある暮れの靴
助太刀の刀の錆が気になって
一つ山一つ川越え耳の灸
ふるさとは好きリヤカーへ母を乗せ
歩いてくる足音だから信じよう

八尾市 山下みつる

ねずみとの戦に負けた穴をみる
知恵袋やばいと知るやさつと消え
兵器商世界へ火の粉裏でまき
立喰いのそば通天閣を見てたべる
割勘の原則今日もくずさない

西宮市 野呂鶴汀

真剣な話へさよかさよかとは
今日からは立飲みで酔う浮き沈み
菊を見る目付き女を見る目付き

君想う落葉カサコソ踏みながら
ルンペンが寝ていた場所が暖かい

羽曳野市 佐野白水

生前の愛身にしみる一周忌
今年から未亡人宛賀状出し
秋深し叙勲の旅の晴れ姿
後輩の励みになった勲六等
除夜の鐘心にしみる瑞宝章

豊中市 田中正坊

起承転結完全主義の父の文
いい人はいっぱいいるが人の妻
料理記事の切り抜きつくれたためしなし

宮参り(二句)

孫抱いて無事渡り切る太鼓橋
神妙に祝詞聞いている三世代

唐津市 仁部四郎

突然の辞令に胃散が切れている
おすそわけ結果としてののぞき趣味
観光地鳩も烏も同じ屋根
投票所ここで政府へ綱をかけ
一点の差で離合するお友達

唐津市 田口虹汀

蛍雪の苦勞を知らず通う塾
古里の水を慕うて戻る蛙
叩くのに雑作はないが冬の蠅

団參拒否に九段の母が泣いている
縦に這う蟹がそろそろ出て来そう

近江八幡市 前川 千賀子

雪吊りの冬が華麗な城下町

ミッキーマウスの電話で訃報など来まい
うどん煮て余所はポーナス出たと妻
サントへの希いが高いとは言えず
B型の恋で後ろを振り向かぬ

和歌山市 神平 狂虎

さよならは笑顔でしよう寒椿

山を越えたというのにやまが待っていた
朝になつても涙の止まらないこけし
食べるには蜜柑も柿も優しすぎ
小さいが確かに僕の影である

大阪市 藤田 頂留子

福豆がここにも一つ部屋のすみ

たあいなく義理チョコにする甘い顔
バス待ちのお宅もでつか医者がよい
一枚の皿でこと足るひとり住む
チャレンジへやつて駄目ならもともとや

鳥取県 中原 颯人

山脈の北から風の百叩き

霜を着て泣き虫あしたから強い
少年の瞳は樹の頂に向いている
神さまと歩く道あり冬の冷え

仁王の正面を誉め過ぎないだろうか

高知県 赤川 菊野

むしろ旗振れば物価が動き出す

花束を受けて戦の火ぶた切る
宿命と言うには悲し会者定離
一合の酒に夫の明日がある
落人の男能面の顔に逢う

東大阪市 崎山 美子

文化財工事現場で目をさます
骨董としての余生にあまんじる

年齢意識している弱気になっている
権力に負けぬ弱者の正義の輪
しきたりの輪が冒険の邪魔をする

西宮市 杉浦 婦美子

初詣で思案に迷う顔はなし
華やかな過去は語らぬ枯木房

脳死論神の思惑など知らず
騙されぬ女が球根埋めている
紙の鶴人の祈りが重すぎる

浜田市 佐々木 裕

通せんぼ赤んべえもう覚え
男気を誘うて膝に掌を置かれ

ポーナスの無い年金で餅をつき
罪と罰数えて四肢のつめを切る
ド根性粗食に耐えた歯が強い

出雲市 園山 多賀子

洛西を巡って(三句)

岸和田市 芳地 狸村

公孫樹並木裏門は未だ閉じたまま

一日一善そんな言葉もあつたつけ

髪洗う気になる夜は月満ちる

腰低くすれば聞える裏話

雪よりも白い御飯が恐ろしい

出雲市 吉岡 きみえ

寝化粧もなく実年ねむいだけ

湯上りの女化身となる匂い

これからの余生ふたりにあるせりふ

欠ける月自責の念にさいなまれ

冬バラの朱にくちづけけている女

和歌山市 福井 桂香

花と本買う木枯しの街に出て

熱爛がとつても好きな明太子

饒舌な女を唾う二日月

直線の出逢いにしよう氷雨降る

生きるのも死ぬにも揉めている脳死

寝屋川市 平松 かすみ

実年のロマンを探す試着室

これだけは無税大きな呼吸する

正直なことに酒好きたばこ好き

プロレスと政治と姑は風呂が好き

洋食と和食のような夫婦です

紅葉の衣裳まとして大原野

拝観も鐘が合図の花の寺

業平の名残りで生きている桜

山茶花が椿に見えている俳画

立喰いのうどんが好きで途中下車

尼崎市 角野 かず子

病室からは明日が見えない雪しぐれ

不足する分だけ笑顔見せておく

イミテーションを知らない胸が妥協する

要領がよすぎて愛を見失う

しっかり者の連れが重荷になつてくる

姫路市 人見 翠記

北陸の旅(三句)

加賀の秋友禅模様に染め分けて

兼六の雪吊の景冬に入る

落葉焚く煙と公園はなれけり

愛犬に見上げられたる寒さかな

我庭の紅葉掃かずに置く心

宝塚市 丸山 よし津

奥の間に老母が居るから波立たず

実年のきれいな嘘がうまくなる

公益社の俳句よんでいるラッシュ

手で削る鉛筆だからあたたかい

軟弱な季節はずれのトマトたち

姫路市

松浦輝月

椰子の実に父祖のルーツを聞く夕べ

もう消えた筈の種火が疼き出す

蔵出しの打掛孫に着せて春

実家の格責めた姑も墓の下

寅年のたおやめ我が家の心柱

大阪市

鈴木節子

精一ばい生きる六十路の予定表

束の間の冬陽を追うて干すふとん

お正月こんな食べなきやならないの

夫の風邪もろうて会社へ送り出す

ぶどう豆亡母のふところ想う味

八尾市

宮崎シマ子

三等星いつも私を見つめてる

雀歌う朝の光を撒きながら

忘れたいくせに日記に書いておく

箱枕母の秘密は語らない

半分しか母には言わぬつらい事

鳥取市

新家完司

徹夜した鬼がにつこり笑っている

泣き顔にひるんで鬼がつとまるか

うやむやを嫌う男が鈍を振る

はずれくじつかんで雨に濡れている

花の咲く樹を庭のまんやかに

高槻市 竹内花代子

眼の悪い老母が見つけた欠茶碗

一年の早さ呟くのも師走

老人会老母娘で入る会費かけ

炊事せぬ老母にもエプロンする権利

歳月の一節消えてゆく師走

西宮市

西口いわゑ

あの人ひとりはずれていてもこの空虚

思わくがはずればんやりテレビ見る

核心をすこしはずしているなさけ

静かなら静かでのぞく母の部屋

指切りをしてからすこし悔んでる

西宮市

奥田みつ子

九十一歳の天寿を全うした父に寄せて(四句)

御長命でしたと他人は言うけれど

今にして父の言葉の重々し

斎場の男の声のよく透り

シクラメンひときわ赤く父は亡し

頭だけ出してみの虫楽天家

倉敷市

藤井春日

孤に還り心の壁に突き当る

くだらない過去を見つめて物思う

インテリは女に非情な別れする

実年と呼ばれて恥じる生活向き

守口市

羽原静歩

たとう紙にひっそりかんと老いの冬
兄逝けばそろそろ順が近くなる
デスマスクその死毅然と生きている
神経痛業の深さを思い知る

島根県

大森孝華

ほんとうの涙は腹の底に落ち
母の詩甘えてみたい里心
読みかけの本が泣いてる秋がゆく
花活けてゆとりを分かつ友を呼び

岡山市

井上柳五郎

手作りとお早合点の菊をほめ
実年の列で日銭をまだ稼ぎ
十二月早いものだと老いの坂
消されないまだまだ夢を古稀の初春

岡山県

岩道博友

マイペース義理も少し播いておく
旧道に廻れば会いたい恩師あり
梅便り届いて女に春の私語
割引の値段に嘘も仕組まれる

神戸市

山片紀雄

渋柿も世を吹く風に甘くなる
積み上げた友好の上に建つ平和
コーヒーで今朝もたてがみ振ってみる
財積めば間口がだんだん狭くなる

大阪市

中西兼治郎

小説は先ずヒロインをよるめかせ
情熱が積木くずしを積みかえる
太陽より早起きをする職に生き
午後の陽で育つた裏の植木鉢

神戸市

仲 どんたく

小春日の旗手を孫に手を引かれ
風紋をととのえ砂丘は朝の顔
渡りゆく世に色をつけ歌をつけ
昇天の儀一族を招集し

寝屋川市

江口 度

明後日は雨か見事な飛行雲
石橋をたたいて渡る銀行員
母さんが笑うと家中はずみだす
恋人は車か独身まだつづく

諫早市

原田メイシユン

漢方薬あきらめられて効いてくる
一泊の旅へ女房のあれやこれ
天皇様が走れば路も良くなるうに
湯上りに満更でない女房見る

出雲市

板垣夢酔

育児所の一人が泣けばみんな泣き
来てくれぬ愛断ち切るように発車ベル
負け犬は野犬の群で修業する
ネジ一つ落としてロボット中気ぎみ

大阪市

坂口 公子

土たん場でやっとかかって来たエンジン

こつこつと夢を育てている自信

小さくてもあなたの影についていく

易の灯に凶星指された慌てよう

名古屋市 大林 曲ん手

おじぎ草つまんで悔いが一つある

絨毯を毛虫堂々這っており

張り枉の下駄は他人に触れさせぬ

平泳ぎ見せる油断のならぬ人

羽曳野市 中村 優

正論へやっぱり嫌な奴がいる

赴任してメニユーの初歩の目玉焼

紋付きの家紋気にせぬ核家族

積木くずし忘れた頃にいじめっ子

鳥取県 金川 満春

夜があり昼あり妻が居てくれる

世の流れいじめに離婚詐欺商法

父の船待つ夕暮れの子守唄

日日好日そんなムードの老い二人

鳥取県 林 露杖

無欲ではない諦めただけのこと

活火山胸に抱いてる動脈瘤

友逝きて羨ましさも少しあり

七十歳少し男が残る朝

大阪市 長谷川 春蘭

爺ちゃんにわからぬゲーム孫にうけ

退院で千羽の鶴も飛びたたん

独り居を心豊かに手糸針

ママパート今年のケーキ大きいぞ

唐津市 浜本 義美

耐えていた喉のつかえがやっとなれ

カラス啼く未だスランプは抜けきれぬ

紅葉が裾まで降りて山眠る

着ぶくれて豆腐がうまい老夫婦

唐津市 浜本 久仁於

君が代へ持って生れた血が騒ぎ

宝舟今年は子舟連れてこい

空つ風見せぬ男の懐手

紅葉を祖国の夢に孤児帰る

芦屋市 竹中 綾珠

ゆり鷗日に日に増えて寒くなる

公園の葉刈りがすんで風抜ける

菊華展審査の日には満開に

年末は第九を唄う集団増え

福岡県 横地 雅風

父さんの口だけ動いている晦日

バスの窓牛が話題の農夫の眼

熱心さ褒められ十年囲碁二段

娘が遅いことも男女の同権論

貝塚市 行天 千代

霜月や潤いのない町の顔
過ぎた年ふり返るまい明日がある
建前で本音かくして巨人入り
札束の魅力に帽子脱ぎました

岸和田市 原 さよ子

あざやかなもみじへ角度変えて見る
消えていく唱歌へじいんと迫るもの
暇出来たらといろんな夢を持つ夫婦
混浴へやっぱり私まだ女

和歌山市 山川 克子

経験がないから謙虚が通じない
安心をさせる嘘なら許せるか
免許証のどれも犯人めいた顔
明日があるケチな言い訳などしない

和泉市 岡 井 やすお

マイホーム売って老人ホームゆき
年末も年頭もない楽隠居
長寿国そろそろ医者を持って余し
法律で決めちゃゆっくり死ぬもせず

倉吉市 野 中 御 前

引き締めて師走の風にたち向かう
触れてほし憎い愛しいこの風よ
ふる里の川は細々生きていた
良妻と思ひこんでる悪妻で

倉吉市 淡 路 ゆり子

大根を洗う白さに満たされる
子を連れて生きるおんなに有る掟
トントンと薬打つ音の亡母に逢う
百修羅熟女の影の深い彫り

倉吉市 広 本 文 子

風の道をおんな一途に逢いにゆく
雲流れ人流れゆく水の面
標的を射るシンバルをひとつ打つ
夢売りが赤信号をぬってくる

大阪市 山 根 いつを

近よつて聞いて火傷をしてしまう
孝行が嫌いな奴に似ぬ息子
卒業をどうにかしたが山登り
ええお方どしたになアと淋しがり

寝屋川市 堀 江 光 子

怖いもの知らずが高所恐怖症
秋の日々ともに暮したばらが散る
リップトンをあくまで白いカップにし
すいすいと給仕はよそへ許り行き

島根県 藤 原 鈴 江

愛と憎握りつぶしたシワの掌よ
カーテンが静かな夕陽慰わせる
誇らかにシルバークレーを戴きぬ
反感をなだめすかしている美德

堺市 柿 花 紀 美 女

明日という日へもう一度賭けてみる
せわしげな足音暮れの自動ドア
バーゲンの暮れのラッシュに巻き込まれ
百人一首の姫は豊かな髪を持ち

倉吉市 渡辺 菩句

この世の冬の今日死にたく明日生きたく
蟹に言わずと真っ直ぐに歩いているよ

天に未練がまだある枯葉まだ散らぬ
ドタバタ喜劇終つても口ふさがらぬ

奈良県 宮川 古都路

神よりのさずかり物だ有精卵

二人まで生んで女に無精卵

恥知らず車中の愚痴に耳ふさぐ

聖職は知つても知らぬいじめっ子

松原市 小池 しげお

黄菊白菊ポックリ寺は花ざかり

糸菊の先は女の嫉妬かも

薬局が風邪をひいてた風邪薬

爪を噛むくせ仲良しが嫁ってから

姫路市 大原 葉香

足病んで晴耕雨読の日課積む

真直ぐな道を歩いて油断する

天気予報信じてならぬ午後の雨

表札はそのまま寡婦にある未練

豊中市 上田 登志実

立春の声きくだけで陽気めき
リビングにセントポリア咲き競う
チンドン屋の着るようなシャツがよく似合い
脳梗塞経験談をよく聞かれ

姫路市 丁坪 サワ子

古都税が善男善女の夢封じ
ポーナスの味も知らずに自営業
実年と呼ばれて隠居が出来難い
明暗を分けて孤児が帰国する

出雲市 石倉 芙佐子

むらさきの鹿の子で結うて初鏡

ひとり娘を嫁にはやらぬ鬼瓦

綿帽子かむれば優しい鬼瓦

ためらいも見せぬ与作の恋だとか

島根県 大屋 秋峰

万の一に信頼盗まれる

砂浜の足跡愛を信じきる

羽づくろう女もすでに脱け殻か

犯人が立つても素直な自動ドア

箕面市 坪田 紅葉

バスの旅にぎやか過ぎて落ちつかず

見栄はって生き通すのも芸の内

ただひとつ無償の愛がほしいもの

体力の限界を知る風邪ながし

高石市 浅野 房子

母から娘へゆずる料理の虎の巻
書齋兼リビング兼のワンルーム
書齋などなくても才女書いている
待ちぼうけ男のエゴを見てしまう

大阪市 大塚節子

朝まだきごみと眠りの繁華街
夜の道靴音びったりついて来る
連休の街に落葉の錦ふむ
マスコミに行事行事とあふられて

島根県 石田清泉

葉隠れの柚子にもあった荊に触れ
倒産を他人事に言うお隣さん
胸上げをされて実感湧いてくる
先代にすまぬ白蟻攻めにくる

島根県 松本文子

北風の真つすぐ来たり亡夫の墓
花を買うわたし一人の旅立ちへ
一日のリズム狂うて月欠ける
それからの手紙心の隅でもえ

島根県 松本はるみ

B面へ優しい声を入れておく
インテリの鴉が餌を食べ残し
フィルムを逆にまわした返り咲き
底辺を知らぬ世代が親になる

島根県 北川民子

玄関で蜂の余生が伸びている
残り菊乱れるさまは見せられぬ
通院を労わるように曼珠沙華
気象庁の小春日和に欺される

七尾市 松高秀峰

初貯金今年は虎の貯金箱
ひき臼の漬物石で母の味
気にかかる子が一人いて二度の職
札束で心の奥を見透かされ

和歌山県 天満三千代

七十の思索の中にある若さ
言訳の語尾のにごりを指摘する
ゲートボール若い歩幅を取りかえず
一人居の回顧笑顔と涙わく

和歌山県 寺田裕美

私を叩くわたしの緩い鞭
右左軍手個性を持ちはじめ
倅せな噂ばかりに突き当たり
西風吹いて引く大根がよく揃い

鳥取県 森山盛桜

嘲笑をさらりとかわす昼の月
一粒を儲けて蟻の気が晴れる
用心の盲点でしたほんのくぼ
倫理また小指あたりでボケて来る

鳥取県 中原みさ子

通りゃんせ赤い泪と赤い靴

つかみ取り握り拳が出てこない

さりげない握手にあつた落し穴

一日のネジは屋台でゆるみだす

鳥取県 中原 汲 香

心を洗う旅を見つけて一人出る

無病息災感謝かさねて干支変る

菜も芋も成仏させて生きてゐる

満ち足りて倅を探すのに苦労

西宮市 朝山 千世子

懸涯の菊王座を占めて園小春

チャリテイションー名曲を聴く年末の贅

ストレス解消得意の謡に声の張り

逝く秋に黄泉路をたどる趣味の友

西宮市 津山 冬子

8ミリを壁へ楽しい誕生日

百舌鳥の声もうつついてる実南天

お年玉パソコンの夢かけてる子

挨拶の顔また寒い愚痴を言い

尼崎市 奥山 美智子

線を引くわたしがわたしであるために

札幌の話にみんな寄ってくる

出稼ぎの父に手袋あんでゐる

頂上で乾いた空気吸っている

尼崎市 西村 かすみ

諦めの心になれず嫁姑

ひっそりと暮しペットの眠る膝

帯締めてからも女はまだ迷い

デジタルが女の暦消してゆく

弘前市 田中 叶

参観日これが父兄の脱いだ靴

助手席の母とワイパーかけながら

あきらめて販売機から帰る犬

あなりたい夫婦と出会う十二月

岡山市 行吉 照路

初霜の庭に一、二、三の父が居る

勝ち戦僕も私も乗ってくる

絶景にフィルム切れたカメラなり

どっかりと座れば晩酌だけの宴

境港市 細木 歳栄

嫁の機嫌までとるなと夫が言う

鬢りある顔がゆれてる水かがみ

碎け散るからこそ光る水の性

この酒にたゆとう心預けたい

川西市 松本 ただし

続編は年金だけで以下余白

初恋はみかんの皮を剥いたまま

身の程を知って押える影法師

地の人と話はずんだ露天風呂

大阪市 塩田 新一郎

日陰れば忽ち淋し紅葉狩り
天を焼き己が身も焼き散り紅葉
職場とは違う序列で釣り仲間
風泣くか梢が哭くか冬木立

大阪市 町田 達子

日溜りを追うてベンチを移動する
枯れ葉にもかすかに燃える紅の色
カンガルーが子育て放棄のニュース聞き
ティータイム茶の間の話題若返り

大阪市 古川 美津枝

福引いてポーナスもらった顔になり
遺産わけ無いから言える公平論
宇野千代に程遠けれど恋こよみ
歳末の収支は魔女にまかせなさい

大阪市 板東 倫子

正月はホテルで妻のスケジュール
お若いと言われた裏を考える
ジャンボくじも年賀葉書も買いそこね
信条の性善説を抱いて寝る

米子市 茂理 高代

幸せは静かにお湯のたぎる音
苦しいからほほ笑んでみる知恵もある
老いてゆく名残りに梅の香にひたる
弓を引く指に言訳教えとく

枚方市 二宮 山久

電話器を置いて心の乱れ知る
妻という強い味方がいる勇氣
糸切歯母はまだまだ達者なり

枚方市 稲葉 星斗

寮生に今年も届く伊予みかん
新しき入歯たのみて十二月
長い列年末ジャンボ宝くじ

大阪市 岡田 ふみ

自分史のブームに書くことない凡婦
秋日和電話の相手みんな留守
リトルトウキョウという町に来て味気なし

大阪市 北山 悟郎

振り出しに戻ってばかりする男
地下鉄の階段老いを試される
久し振り娘と歩く背が温い

大阪市 松尾 柳右子

木枯しにうま味倍増大根煮
今日は雨明日は雪だろ膝痛む
七人の敵に見せない涙壺

大阪市 吐田 公一

ポン友に楽しい弔辞頼んどく
征服のケルン積んでる山男
実年に暦の薄さ身にしみる

羽曳野市 田中 隆二

妥協癖ついて採点甘くなり

張り替えた障子に冬の影法師
二ん月は与作愛しや雪女

兵庫県 藤 後 実 男

エリート之列へ並んだ不吉な日
お開きになって本音を喋り出し
健康で働く服を高く干し

岡山県 直 原 七 面 山

風向きを見て動き
勝っていてタバコに火
プライドを捨てて生き

岡山県 二 宗 吟 平

念力のまだまだ足らん孫受験
役得のもう挨拶に社の車
郷土史を聞いてチョンマゲなつかしみ

鳥取県 土 橋 螢

生かされた六十年の晦日蕎麦
雪が降るから赤いシャツ着てみよう
一尺の雪に友あり情あり

松江市 竹 内 寿 美 子

人を恋うわたしが泣けば鳩も鳴く
オルゴール私の胸に灯がともり
恋成れり椿野からは椿くる

島根県 城 角 鶏 生

来秋の法事に母のもうさわぎ
お葬式他人同士の高話し

薬売り児等に風船ふくらまし

豊中市 奥 田 満 女

肥料過多ばらは黙って枯れて行く
木枯しが落葉吹きよせ少年院
焼諸屋特別風致地区に行く

吹田市 茂 見 よ 志 子

折からの遣らずの雨に袖ひかれ
口喧嘩ブザーの音で別の顔
日御崎燈台に立つ句碑に立つ

米子市 光 井 玲 子

も一つのチャンネル鈴が鳴り止まぬ
ここからは天に委せて渡る川
幾度か空気を入れた母の毯

交野市 山 本 テ ル ミ

ぬるま湯に浸る女のマイペース
平凡が幸せと知る年の暮
懐石のゆり根にあわい京の味

高知県 曾 我 部 裕

吊し柿みな食べ頃を知っていた
視線から外されまいとする努力
真中に座ると口が軽くなる

高知県 小 澤 幸 泉

共稼ぎ多忙多言の罪を負い
中年の生活いろどる地図さがし
女兒生れまたまた妻の強くなり

自選集

藤井明朗

市場没食子

春を待つプラン動きも急となる
大夕日明日の幸せうたがわす
心経を唱え一日荷をおろす
おでん屋の世相だんぎは的を射る
雪の下友情しばし疎遠にす

水粉千翁

八木千代

日本の横顔で袱紗捌かれる
ふり向いた道は語らず靴がちび
行くあてもなく木枯らしは話しかけ
目を閉じてあかりを入れる走馬灯
人知れぬ思いを汲んでいる素顔

菩提樹が行く先々に植えてある
残菊よ風の指にはつかまるな
風道にいつまで吊すざんげろく
裸木の一つが火柱に見えた
火打石落さぬようにお辞儀する

米澤暁明

小出智子

実年というもやもやの年賀来る
めざしても焼くか平和な老い二人
湯豆腐でよし親と子の血が通い
よこしまな心咎める白樺
割りこんだ実年いじめられそうな

二月の暦また急ぎ立てにやって来た
一人相撲の炬燵がいやに温かい
晩年を庇うてくれるバスタオル
炬燵の中でふくらんでゆく絵空事
他人だと思つてからはよく眠る

月原宵明

大人だけ躍起になつてゐるいじめ
叛逆をたくらんでいて酌ぎこぼし
大晦日道路工事の赤ランプ
格子戸の奥で大正琴が鳴り
ジヨギングで寡婦の邪念を捨ててゐる

金井文秋

長生きをしたい命だ勞ろう
花咲いたこともないのに実年か
文化とは生活に増えるカタカナ語
随時撤去するへ自転車こりもせず
他人事でない倒産のうわさ聞く

尼緑之助

政治屋の醜極まつて冬景色
神風の出番政治のタメ日本
傷口を晒して今日も赤字線
だがしかし手出しは出来ぬ冬帽子
飽食のレールに怖いじめつこ

藤村女

紫の滴を拾う花鉢
煩惱が滴っている指の先
中年の恋を残した落ち椿
おさな名で呼んで同窓なつかしい
年輪のみな無駄でない顔揃う

川口弘生

梅開く安産であれアメジスト
娘みな巣立ち孫六欲しくなる
三十年妻だんだんと重くなる
若い気で居るのに孫の数問われ
花嫁の父の涙は許される

正本水客

自然との対話が高いものにつく
落し蓋のような夫婦になつてゐる
耳よりの話を冗談めかしく
ほどほどにしとけと秋が去つてゆく
カラカラと木の葉が鳴つたら凄かろう

小林由多香

喪服脱ぎすてて今日から赤を着る
北風も坂も計算進路選る
団らんを母だけ抜けて皿洗う
信号の赤ライバルを見失ひ
倒産を師走の風にさらされる

黒川紫香

風上げを見ているだけの歳になり
垣根越し隣と話す小春日で
春近し友に誘いをかけてみる
人が悪うなりましてと膝を折り
話しかけると馬も相槌打つ仕草

市川鱗魚

若さとはいいな一筋きりの道
鬼灯の赤さ又大きく計のたより
落ちる手に残る尾をふるだけの知恵
人の痛みに少うし青いまだリンゴ
拝む物ばかりで母の背が丸い

本田恵二郎

鋭さも甘さも母のものである
卑怯者自分をごまかしながら生き
またしてもペーパープランに誤差ができ
中途半端な顔ばかりで埒あかず
空財布へ折よく里の母が来る

児島与呂志

土の色はじける芽をば知っている
育つ芽は誰かの支えを忘れまい
大勢は小勢を押えてもむなし
一声も無いまま電話切る無情
信じれば信じる程にむなしかり

工藤甲吉

ジュネーブで狐狸の化かし合い
明治大正昭和と人は軽くなり
大正の人に丸刈りほめられる
大凡の人は三から一が欠け

亡妻十三回忌（二月九日）

思いの出の上を歳月だけはしり

大矢十郎

チビブスとおんなじ大詔奉戴日
先ほどの穴埋めらしいアンパイヤ
才長けてうるわしゅうして嫁き遅れ
美しい声で無情のアナウンス
助けあい助けてばかり来た師走

野村太茂津

めしふろねるほかに不満は何もない
かさこそと落葉の道を闊歩する
古釘を矯めて錆止めしたいひと
瞑目で罪か罰かを訊いている
枯葉散りつくして開き直っている

長野文庫

そうでしようと思われてやるも策のうち
糖分を控えまだ未だ未練あり
複雑な気で聞く他郷で国訛り
明日のこと案じぬ若さ頼むしかなし
大ものの方言強き武器となる

山内静水

喪中に就きあまりの数の十二月
じいさんの代まで往き来した一系
しほうだいして苦しみも楽しみも
いずれはひとり仲よう暮さんか
奥さまの気くばり家内には言えぬ

— 同人吟 —

秀句鑑賞

— 前月号から —

高橋操子

罪の一つに齡よりずっと若く見え

谷垣史好

お若く見える上に姿もよい。史好さんあまり罪を作らないで下さい。

檀山が見えて心を入れ替える

遠山可住

同居している若夫婦の言動に突然檀山が見えたのである。安心していた老後、親とは悲しいものですねえ。

どん底で出逢った神は裏切らぬ

小野克枝

どん底におちると、一生懸命に立ち上がろうと努力する。その努力に神は手を差し延べて下さるというのです。

星の降る夜は民話を子におくる

恒松町紅

きれいな句ですねえ、むかしむかし私の小さい時、おばあさまに教えてもらいました。子供の時のいろんな事が思い出されて、甘い

涙が出て来ました。

男の優しさだけを求めている世代

恒松町紅

彼のどこが好きですか、女性の殆んどが、「彼優しいから」と答えます。優しさだけでよいのでしょうか。ハラハラさせられます。これも世代でしょうねえ。

あの頃はよかつた育ち盛りいて

古野ひで

同じ町内で住んでいましたので、ひでさんの事はよく知っています。

御主人は高校の教頭さんで男の子三人、女の子一人を残して、奥様が亡くなられた時、困り果てたご主人が教え子のひでさんを探ね

同情したひでさんが初婚の若い身空で、戦前戦後の食糧難の時代にも耐え、長男は実業家、次男は医者、三男は教育家、それにお嬢さんは商家に嫁していられます。みんなお母さん

思いで今はよいおばあさんです。この句のように立派な心を持って育てられたればこそ今の倅せがあるんだと感心しました。

退職の額を銀行見抜いてた

原さよ子

銀行屋さんとの対話が目に浮かんでくる、ゆかいな句です。

ママの留守長女に手綱握られる

有働芳仙

女の子はおませである。ママの事は知らぬ間に覚えてしまっている。手綱を握って得意満面としている事でしょう。

お正月沼板弾む子等帰る

清野こう

親も子も一番うれいしい時です。年賀状だけでつないでいる絆

一日の計を大事と思ふ喜寿

若宮武雄

ほんとうにそうですねえ、私もつくづくそう思いながら暮しています。

秋日和雜巾刺しているやすらぎよ

榎原秀子

主婦の一番倅せな時と思います。

泣いて来ぬ娘ですこしもの足らず

山根いつを

親心の深さを上手に表現していると思えます。

雁渡るその夜の月がきれい過ぎ

越智一水

絵を見ているような、うっとりとなる句、きれいですねえ。

海はやさし叱られて来た子を庇い

林野魁光

父の胸であり、母の懐である海はあたかもやさしく包んでしまってくれる。そして少年を少女を偉大な人間に育ててくれることでしょう。

ユーモアも混じえた法話になごむ旅

清野こう

法話も此の頃、三味線入りで聞いて来たとか、随分違って来たものである。

お正月沼板弾む子等帰る

有働芳仙

女の子はおませである。ママの事は知らぬ間に覚えてしまっている。手綱を握って得意満面としている事でしょう。

お正月沼板弾む子等帰る

清野こう

川柳太平記 (93)

川柳の群像

福田山雨楼

東野 大八

「川柳味とは人間親愛の華である笑いを中核とした川柳独得の表現力を指すのであるが三要素に限られたものでなく、洒落・機智・軽味・写実味・超越的感覚味をも豊かに包容するものである。この川柳の幅のある姿は、古川柳から伝承した俳諧の正系をうちたてたものである。川柳には俳句におけるような約束はなく、十七音定型の中であくまで自由奔放平談俗語に親しみ警拔な表現を上乘とする。川柳は人情の世界市井田園の俗っぽい社会行住臥座日常茶飯時の営み、勤労と余暇生活の真只中から人生の歡喜と苦惱を味わい、そこに素の風流、即ち俗の真を見出さんとするところに真骨頂が存するのである。

これに要約するに川柳を貫く精神はあくまで民主的なものであり、時代に即しユーモアを中核とした思想、生活感情を民衆の立場から自由犀利に表白するものである。新憲法の自由・真理・正義を盛りたてんとする根本精神と一脈相通するところがあり、文化国家として再建を期する我が国民大衆の手で伸びてゆく寛ろぎの文学である」(『番傘第37巻第1号』)

これは番傘川柳社が昭和22年にひろく一般から募集した「川柳の定義」の第一席(最優秀作品なし)に入選した福田山雨楼の論文の要約である。(応募総数百二十一篇)

岸本水府はこの論文をその著「川柳の書」に収録している。山雨楼は昭和29年2月川柳雑誌副主幹に推され、同誌に「川柳原論」等の論稿を長期掲載し注目されたが、「川柳の定義」はここから抽出されたものである。

福田山雨楼は本名福田義達。明治31年10月1日岡山市牟佐に生れた。川柳は大正14年から本田溪花坊の「大大阪」会員となり、山

雨楼の柳号の名付け親は溪花坊である。同誌が休刊した昭和はじめ「川柳雑誌」一辺倒で狂信的なまでに麻生路郎に傾倒していった。

職業は国鉄職員で大阪湊町の鉄道事務所の頃は川雜同人の多作家で知られ、その傍ら川柳関連の図書に打ち込み、その論稿を川雜はじめ各社に投稿し、その川柳への異常な迄の燃焼ぶりに注目した川上三太郎は「山雨楼君を川柳研究に譲って貰えないか」と麻生路郎に幾度も申し入れたほどだ。(麻生段乃書簡)

しかし山雨楼は多年肺結核の持病に悩まされており、晩年は国会図書館に勤めたものの数年をです病臥の生活に陥ってしまった。

—茶碗の丸さたのしみに満つ 山雨楼

—押入のついでに拭きたかつた肺 〃

—生理めの息苦しさを肺を病めば 〃

—寝て四年子規に劣らぬ痰一斗 〃

山雨楼独得の深遠な川柳理論の展開は、この病床生活によって一段と磨きがかかり、「川柳の子規」と富士野鞍馬は評価したほどだ。

「故陸軍中尉福田榮三郎君は、山雨楼さんの愛児であった。終戦の前の年十月ブーゲンビル島で散華された。(略)遺族から何千通となく依頼や陳情の手紙を受取ったが、山雨楼さんの手紙ほど要領よく書かれたものは見

たことがなかった。榮三郎君追悼のため出版された「偲び草」も送って頂いたが、これは単に親の愛情による記録というばかりでなく身分、死因、履歴等恩給法上審査の根拠となるに十分な立派な資料となった。

川柳に連載された川柳曆を見る度に、山雨楼さんが如何に丹念に克明に収集整理されているかに敬服したのであるが、それは川柳のみならず家庭のことも常に几帳面に記録整理されていたことが頷かれほとほと感服したのである（川雜福田山雨楼追悼号扉部十九平）

山雨楼はながい闘病生活の末、昭和30年6月16日横浜市で永眠した。享年五十七。

この死に先だつ三年前の昭和27年5月19日夜の記として、麻生路郎は同年の「川柳雑誌」6月号巻頭に「山雨楼居の二時間」と題しつぎのように書いている。（要約）

「静岡の大会がすんだ翌日、横浜市保土ヶ谷区岩崎町に闘病中の山雨楼君を親しくその病床に見舞った。かつては頑健そのものような山雨楼君であったが、遂に胸を病んでその一生を惜しみなく鉄道にささげたのであった。大阪の湊町の保線課から東京に転じてから既に十七年になり、関西における鉄道生活と半々たどきかされたが、私とはその後かかって十数年も会えなかつたのである。（略）

彼は私を出迎えて部屋に戻るなり、十数年会えなかつた感激が咳となって止らない。彼はマスクをはめ、静かに横になった。咳がおさまるとポツポツ話し出した。そして一冊の本を私に手渡した。それは一冊の古帖簿を利用したもので、背文字と表紙中央に「麻生路郎先生伝記資料」と達筆で記したなかなかの大部のものである。扉頁には私の肖像が一頁大に描かれ、次の文字が読まれる。

「路郎先生の伝記を編むことは一大事業である。須らく遠大な計画と周到なる用意を以ってかからねばならぬ。先生の足跡獅子吼はあらゆる方面に亘っているから、これを発掘し誤りなきを期することは実に容易なことではない。この資料は山雨楼がこころをこめて折にふれ、時に随って記録したもので先生の全貌に対しては九牛の一毛に過ぎぬが同志と共に漸を追って補って行きたいと思つ」

その次の頁には、あらゆる新聞・雑誌から模写された私の顔がある。またいろいろな雑誌から「麻生路郎論」も根気よく蒐集採集されているのに驚いた。私の一歳から数え六十五歳までの記事が年別に綴れている。（略）

私が果して伝記を遺すに足る人物であるかどうかは別として、山雨楼君がこんなに精神力を傾注して伝記資料を蒐集して居ようとは

私の夢想もしなかつたことであるが、こうして私の伝記資料をつきつつけられて見ると、私の勉強ぶりの不足をひしひしと感ずると同時に後進に対する責任を痛感したのである」

この伝記資料は筆者が、路郎の葭乃夫人から手渡されたのが昭和49年10月である。このことからいわずに筆者の「麻生路郎物語」を執筆するそもその導因となった。

「川柳雑誌」の昭和30年9月号は「山雨楼追悼号」であった。その巻頭で路郎は

「片腕を千切られた思いして焼香す 路郎
— 川柳仰蒼白き月に入りしか 〃 〃
— 才、山雨楼と呼べば一筋のけむり 〃

路郎は山雨楼を悼む右のような悼句を付して居りました。死ぬまで書きつづけるのだが口ぐせでありました」という山雨楼の清美夫人の書簡を中心に、痛哭の悼文を一頁にわたって記している。そしてこう結んでいる。

「氏は死期が迫ってもなおお宗教にすがろうとしなかつた。川柳による安楽死を希望し

— 何負けてたままるか目にも見えぬ菌
と最後まで菌と闘い続けられたが、遂に菌のために敗れたのであった。瞑せよ山雨楼合掌。」

★次回はい「三笠しづ子」

誹風柳多留廿六篇研究 (三十三丁〜二十四丁)

石田成佳・大屋六郎・八木敬一
鈴木 黄・石田晋一・南 得二
小野真孝・本多正範・多田 光

故岡田 甫

392 姫はじめ万才時分んはつれ也

石田成 本句「辞彙」の註に「時分外れに訪ひ来る」とある。大晦日から元日にかけて或いは新年早々は夜更かしをすることが多く、万才の鼓の音を聞く頃は、夜も明けて姫始にとりかかるには時もはづれ頃になるといった句か。

大屋 三河から来た万歳たちが、里に帰って女房と「姫始め」をするのは、正月一日または二日の「姫はじめ」の日からはるかに遅い時節はずれの頃だという意味だろうと考えます。

多田 ①万歳が江戸にいる間か、②三河に帰

つてのこと、かに分かれるようですが、私としては(1)で姫始めは二日夜なので、もう万歳はこの家へもだいたい回って来ている。そこで姫始めの頃は万歳の「時分はずれ」——終わった頃だ。——ととっていた。しかし、

淋しさは万歳村の松の内 ケイ五・23
才蔵が手にきさらぎの緞 ケイ五・26

などというのもあり、帰郷してからのこともよまれているので、主題句もそう取れないことはない。

岡田 万才の帰国後説に賛

二十四丁

393 名のしれぬ花て伊兵衛ハ呼出され

大屋 伊兵衛は染井の植木屋伊兵衛政武のこと。植物に非常にくわしかつたという。

本句は、阿蘭陀人が献上した舶来の樹の名がわからないので、植木屋伊兵衛が呼び出されて、この木は何という名かと聞かれたという意味。

あの花ハなんだに伊兵衛罷出る

明八鶴 1

冥加さハ伊兵へが花壇人払イ

四七・3

多田 賛鈴木倉之助氏の調査を紹介いたします。

その墓は豊島区駒込六―一―四「西福寺」にあり。当寺は藤堂家の藩士の祈願寺であつ

た。台石正面「伊藤氏」、正面「樹仙淨観信士」、両側に「宝曆七五年十月二日八十二才没」。

伊兵衛の家は西ヶ原無量寺の檀家で、墓は西福寺にある。明治中期まで続き、十一代で廃絶、その屋敷跡は浄土宗専修院になつてゐる。

岡田 記憶によると伊兵衛は藤堂家のお庭がかりの身分の低い者であつた。藤堂高虎の子高次は父に似て豪放、珍奇な植物を集めた。庭を廻つて倦きたり気に入らぬと、入手したものを容赦なく抜き捨てさせた。伊兵衛はもとも樹木が好きだったから、それを捨てずに保存しておき、染井に植えておき、見事な植物園にしたてたという。

394 花のまくそつと観て吼られる

大屋 花見の句 幕の中からにぎやかな笑いさざめきがきこえ、中に甲高い嬌声などが交つてゐると、つい覗いて見たくもなる。そつと中を覗くと「どなたじやな。人の幕のをぞいたりなさつて」と叱られることになる。
八木 「吼られる」は「叱られる」ではなく「ほえられる」でしょう。

南 八木説贊。

花の朝ちんもつれてと御意なされ

拾二・26

ほえるのは狎でしょう。

岡田 奥女中など女ばかりの嬌声のする幕を覗く。従つて吼えるのは狎です。

395 千金の色の見へない不自由さ

大屋 盲人が検校になるため、座頭金を貸しつけて高利を貪り、因業非道を重ねて、ようやく千両ためて検校になったものの、盲人の悲しさにそれが見えないというので、因業な盲人をあざけたもの。

くらやみの晴れ着千金出して染

三六・34

老本の杖千金の道具なり

八・23

鈴木 お説の通りだが、盲人から千両もの大金を吸い上げる制度を作つた徳川政権に眼を向けなければ盲人がかわいそうな氣もする。

多田 贊。「不自由さ」は同情か。

岡田 千金の制度はいつから出来たか。京都へ官金を収めるので幕府へではないと思つ。この点ハッキリわからず。

396 船頭は無雅でおしえる都鳥

大屋 謡曲「隅田川」によつた句。狂女とな

つた梅若丸の母に、全く風流心のない隅田川の船頭が、都鳥を教えている状況を詠んだ句である。

氣ちがいのよく知て居ルみやこ鳥

安元梅²

南 「隅田川」に限定すべきでしょうか。

多田 同右。土地の人が由来など知らないで発言することがよくあるようです。

岡田 「鴨立沢」の句にも、「明石」の句にも出て来た筈。また句はやはり謡曲からの知識でしょう。

397 きさらきのそのもち月に西へ行き

大屋 西行法師の入寂を詠んだ句。「きさらぎのそのもち月」は、二月十五日。「西へ行き」は西方浄土へ行く、すなわち入寂を意味するとともに、西行の「三よを詠み込んだもの。西行の辞世と伝えられる「ねかはくは花の下にて春死なむその二月のもち月の比」によつたもの。

北向きの武士やめて西へ行き 五五・6

多田 贊。謡曲には「初瀬西行」というのがあります。

岡田 贊。

江戸川柳に現われた八百屋お七

(七)終回

阿達義雄

(七) 火焙りの刑

お七の火刑が愈々今日行われることを、牢屋への差入れの飯の戻つたのによつて知つたお七の母の心情を、紀海音は、

「国土の内に何時迄も、火といふ物のなかれかし、世界の人の恨みにも、母には罰が当たるとも、娘一人が助からば、情なしとは思ふまじ、三年四年前よりも、媒人が来て、あちこち似合ひの縁もあつたけれど、人手に置くが氣遣ひさに、入婿取つて何時までも、石に根継のじやうあいが、過ぎての今の苦しみを、よく見覚えて世の中の、娘持つたる親御達、假令如何なる徒らをも、見通し置き給へ、我が身はこりて悔みても、歸らぬ事が浅ましや。」

と記し、更に火焙りの刑の準備の有様を、

——かゝる処へ人夫ども、桂を担^おげて口々に「何と不便に思はぬか、まことに醬へにいふ通り、花ならば初桜、月ならば二奴どり、饅頭のやうな手足をば、在所で団子焼く様に、火にくべるのは惜しい事。それに相手の若衆奴は何をしてけつかつて、今日が日まで尋ね来ぬ。因果はお七一人ぢや」と心なき身も哀れ知る。目を擦りてこそ通りけれ。夫婦は見上げ見下して、「世にひがいなす娘をば、あの柱へ縛り付け、四方から焼き立て、阿鼻焦熱の苦しみを、まじく」と見て居られうか。」

と記している。江戸川柳では、狂句的に小姓吉三の小姓と八百屋の胡椒とをかけた、

○こせうにはむせぬがお七煙にむせ

(六九・16)

と詠んでいる。

江戸時代の火焙りの刑は、礎柱の足の下へ台薪を積み、多くの薪や茅で四面を覆い、檢使の役人が点火を命ずると、非人は茅三把を一緒に持つて、風上から火を放ち、筵で煽る。薪が全部燃え切る迄燃やしたものでなく、罪人が焚死すれば燃え残りの薪や茅を取り除け、八百屋お七の場合は、更に鼻と乳房とを焼いて、それでもつて火刑が終つたことになる。なお、死骸は一般に、そのまま三日二夜さらして置いて、後に取り捨てられたものだという。

(八) 八百屋お七の墓と六地藏

○蛇を下げてお七が墓所聞き歩き

(二六・7)

本郷駒込にある富士権現の御山開は六月朔日で、その日は参詣人で随分雑踏したものらしい。この日の土産物としては、有名な妻薬細工の蛇があつた。参詣人の中には、その帰りに、お七の事を思い出して、此の附近にある苦の南縁山円乗寺を訪ねる者もあつたことであらう。

円乗寺は小石川指ヶ谷町浄心坂にあつたのであるが、右の句は江戸文芸によつて、吉祥寺を訪ねることを詠んだのかも知れない。

円乗寺は、元、日蓮宗であつたが、元禄の頃、谷中の感応寺などと共に改宗して、川柳の時代には天台宗の末寺になつていたのである。

お七の石碑は、後から建てられたもののよ

うである。戒名は秋月妙栄禪定尼とあり、日附は天和三年三月廿九日となっている。

○ゆふくくと吉三郎は往生し

(宝曆一三・鶴三)

右の吉三郎は前に述べた実説の無頼漢吉三郎ではなく、文芸に出てくる、お七の愛人小姓吉三のことを詠んだのである。

紀海音の浄瑠璃に於ては、愛人吉三はお七が火格りの刑にされようとする刹那に、刑場を駆けつけ、お七と言葉をかわした後、

——吉三も今は力なく、「生きて居られぬ我が命、いでや冥土の道連れに、我先だつて待つべし」と腹一文字に掻き切つて、露と消えゆく露の世や。

とあるが、西鶴の『好色五人女』には、お七の処刑の時には、之を知らず、お七を思ふ余り病床に臥して居り、処刑されてから百ヶ日目に当る日に、初めて枕を上げ杖竹を新翠に寺中を見廻つて居る中、ふと、お七の新卒塔婆を発見して、大いに驚き今はこれ迄と、自分も後を追つて死のうとしたが、母に妨げられ、出家となつて、お七の後を弔つている。それならば、先ず「悠々と往生し」と言われるであらう。

お七の眞の恋人たる小姓の山田左兵衛の名を、文芸作品に於て吉三郎と改めたのは井原西鶴が最初である。

西鶴は京阪地方に住んでいたために、實際、無頼漢の吉三郎という者があり、こいつがお

七の敵役であつたことを知らなかつたのであつたか。

この頃、京阪では、吉三郎という名は色男の代名詞みたいに思われていたのであつた。

西鶴の『男色大鑑』巻八の『執念は箱入の男』の中に、

「今宵の遊興常にあらず、有難き美形の集り給ふ中に、百体頭とて御姿の優れて拝まれ給ふは、竹中吉三郎、藤田吉三郎など神代このかた古今の稀者、にくい程の粧ひの見よげなり。」

とあるのが注意されるし、三田村鳶魚氏は、『方普念阿西運上人鉦』の箱書によつて、上人は幼名を吉三と号し、八百屋お七と関係して、後剃髪して西運と号し、この西運が山田左兵衛であつて、剃髪する前に一度仕官したことがあるので、文芸では実名を憚つたのであつたと言われている。

西運上人の歿したのは、元文二年十月四日七十三歳の時であり、生前には諸国修業をし、江戸の各地に六地藏を建て、お七の菩提を弔つたと言つ。川柳にも之を

○六地藏建立え美僧来る

○色男江戸へ仏を六つ建て

○妙栄の為に地藏が六つ出来

○六地藏お七が名には不足なり

妙栄はお七の戒名である。「六地藏」の六はお七の七に一つ不足。

○俗名に地藏は一つ足らぬ也

(二二・40)

この句も同じ趣向の句で、六地藏は妙栄の俗名お七に一つ足らないというのである。

○十八撫でむつとする六地藏

(二一八・29甲)

俗諺に「地藏の顔も三度」という。六つある地藏であるから三六の十八回撫でなければムツと怒ることが出来ないことになる。

次に、前述の六地藏建立の由来について、お七吉三話との関係を全く否定する記事が、『近世江都著聞集』巻一の中に見られる。すなわち、

「其後江府に、吉三道心と云ふ発心者の坊主有て、江戸六地藏を建立せしを、人誤て吉三道心をお七が密通の男にて、お七天和の御仕置後、小姓吉三郎道心して、お七が亡き跡弔ひの為に、六地藏建立せしと語る人あり。附会の説にて大きに笑ふべし。」

いかにも吉三と云ふ道心者、六地藏を建立せし也。是別人なり。仔細を詳にせんに、お七存生の節天和元年のころ、最早六地藏の二軀は出来せし事明かなり。此吉三道心は、お七、十五、六の節には六十歳ばかりの老僧といへり。」

斯うなると、真相が益々分らなくなるが、川柳は必ずしも史実に拠つて詠んでいるのではなく、面白い俗説は、反つて之を歓迎して句にしている場合も多いことを知るべきであらう。

(完)

水煙抄

黒川紫香選

岡山県 黒 住 美穂子

八尾市 高 杉 千 歩

我儘なわたしを変えた白い教珠

一言をひかえる女にある魅力

雪の日の寛ぎ農婦が知っている

女ひとり風にあなたの噂待つ

深い瞳の奥に住んでる天の邪鬼

名古屋市 藤 井 高 子

風花がちらちら過去を連れて来る

人肌の言葉が温い冬の街

その昔炎えた髪とか逸話聞く

灰皿に男の妬心けぶってる

チャラチャラと小判福笹おしゃべりで

藤井寺市 赤 木 和 子

遮断機がゆっくり降りて長い冬

こめかみに許せぬ人の名を記す

寒風を駈けてくるのは吉報か

血しぶきのごと噴水に夕陽落つ

子がくれた風邪がなかなか治らない

暮しの垢互いにとれて六十路春
ひたすらに生きてる証し絵具皿

童歌はずんで唄う雪の朝

約束を信じているから対の箸

なりゆきに任せ厨の灯は消さず

尼崎市 福 田 礼 子

投げられた小石が胸の隅にある

飾らない男で憎い事を言う

前の夜の温みが残る傘を乾す

人情の乾きを知らぬ路地に棲む

枯木立迷いはすでに捨てている

富山市 舟 渡 杏 花

悪口の反芻よそう十三夜

はじかれて起きぬダルマの休養日

文士顔して文学碑のうらおもて

たて板の水の行方を見きわめる

ロックして誰憚らぬ涙です

東予市 小山 悠 泉

初春へ構想を練る白い画布
息抜きの酒悪友と馬が合い
財布の紐少しゆるめる子の帰省
奥さんの目に友達はみな素敵
故里の噂運んで来いよ風

長岡京市 木本 如 洲

花言葉生涯知らぬ父の指
老いらくの恋派手に書く週刊誌
地図にない道から夫婦軽い旅
秋の灯を消して孤りの布団敷く
チャップリンの笑い八十路の坂にある

西宮市 紀市 郁 栄

血筋が違うとても相手にはできぬ
目がかたいこれは敵かも知れないぞ
雪の白さに気がつかぬ痴話げんか
年金のうすい老婦でよく笑う
校正ですごいタイトル思いつく

熊本市 黒田 緑

人生の色まで定年では変り
規格外らしい人柄面白い
面白うてやがて胸打つ十七字
知恵のない話盃からこぼれ
舞台いま大きく廻る春の色

滋賀県 久保 和 友
海の荒れ見えてきたからと蟹ぎらい

部屋割に夢千代という鍵をくれ

夢のある話へ一合だけの酒

レールはずす列車は走ったことがない

成田山にもある昼食時のピーク

久留米市 鶴久 百万両

あやまちを消す洗剤を買いにゆく

勝者になるためなら泥の舟も乗る

伴天連の悲話を奏でる春の海

十字架が怖くて樹海まで翔べぬ

冬の花火に俺の情事も燃えつきる

佐賀県 寺中 三枝子

ひとひらの雪に貰ったうす情け

雪おんな今も男は胸に抱く

羽振りよい男の好きな綱渡り

バラを買う男すこうしてレている

ちぎり絵に温いある夜の彩を秘め

今治市 野村 京子

背伸びの恋女つまさき冷えて来る

口下手の愛信じ切るレモンティー

泣き黒子ヒロインにする私小説

傷心の私を吊るす秋の風

七彩の星屑に会う野の仏

熊本市 宇野 昭 代

抜擢を知って社宅のよそよそし

父と子と草笛吹いてる土手の上
お茶こぼしてから緊張がはぐれ出し

洗濯をあきらめてから霧が晴れ
フエンス越し隣のバラが刺を出す

熊本市 永田俊子

吉相印持ってなぜか芽が出ない
それからの月日はわたしの色に染め

よもやまの話から入る金のこと

幸せがセーターの編目からぬけそうで

会者定離ならんで歩くよその人

熊本県 大川幸子

夫の手の中で風など知らずいる
肩に置く手が反応をたしかめる

それきりになつて話ふと思ひ

例外が一人たのしく座を荒らす

酒の酔いコピ―食品とは知らず

吹田市 井上照子

風邪の床みかんとテイシユの山ができ
街路灯愛の告白聞いている

香水を造花に偽善者かけている

天と地と人を素直に信じたい

ときめきを抱いて黄昏まちぼうけ

尼崎市 丹下玉子

通る度そつと見上げる窓がある
つまずいて虚飾が剥げた日の落日

耳の底に内緒話を沈ませる

梨の皮切らずにむいている未練

抵抗の力はまだある実年層

げんまんの小指が眠りから醒める
尼崎市 児玉歌子

笹舟に乗せて未練を走らせる

自己主張たんで隅に畏まる

墓石にきれいな涙置いてくる

尼崎市 尾宮弘治

故里に素直な心だけ飾り

灰になるまでついてくる影法師

節穴を覗いて姑の良さを知り

草臥れたタオルは父の好きな色

西宮市 松本一郎

休耕田みのりの秋に背を向ける

一泊の旅に土産を買いすぎる

亡母の部屋そのままにして一周忌

堺市 宮本かりん

午後からの約束がある割烹着
子守唄自分の唄でねむくなり

やましががあるのか返事はね返り

責任の重さは見せぬ軽い足

高槻市 笠嶋恵美子

墨染の衣よ乳房ゆれるのに
お隣のよしみも票につながらず

買物しても晴れない更年期

二三日寝させてくれた風邪の神

滋賀県 安田志津

立話ついでにことづけたのまれる
調律ずみのピアノ叩いて叱られる
まねごとの世話でも花は咲いてくれ
情熱をもやした過去がなつかしい

広島県

田村新造

迷い蛾を殺すにしのびず窓開ける
墓石に我が名も赤で刻みおく
逃げまわる孫の頭にシヤボンぬる
潮騒にふと目ざめけり伊勢の宿

岡山県

小林妻子

一人立ち子が漕いでいる瀬戸の内
落葉舞う様に信号かけ抜ける
三べんも忘年会だと名を変えて
師走だと言うに大人のみかん狩り

尼崎市

山田保蔵

賽銭の音で神さまこちら向く
アンケート答えにならぬ答えくる
作業服着たまま帰る朝帰り
肩書がなくとも負けぬ寒い風

和歌山市

桜井千秀

自動ドア力んで踏んでやつと開き
デザインが良過ぎて着心地今一つ
キザなこと罷り通っている若さ
行き迷う心は風の音ばかり

静岡市

渥美弧舟

ドラマめく話も秘めて古希に入る

なりゆきで啖呵を切つて悔まれる
やわらかい言葉で嘘が包まれる
とまどつた背中を風が押しして来る

大阪市

山田妙子

画廊には少しきどつてゆくつもり
にぎり飯母の期待も丸め込み
ワイキキでピンクの水着つけてみる
幸せよハワイの波に答えとく

唐津市

浜本ちよ

師の言葉かみしめ作句ままならず
仮面つけ母へ便りを書きましよう
淋しさに電話をすればむなし留守
川柳を知らず過した月日が憎い

羽曳野市

吉川寿美

迎春と書く幸せを温め合う
てにをはの謀反で思わぬ立くらみ
子のための火の粉被るを母と言う
背のびした積木ゆさぶる師走風

岡山県

山本玉恵

合掌へ亡き父恋し母恋し
風向を気にして女ひとり住む
嫁姑きれいな事では生きられぬ
赤い実を食べた小鳥を飼いならす

大阪市

工藤陽子

いたずらつ子の面影残る披露宴
老松にはげまされてる葛蔓

肚割って話せる友の温かさ
初恋の人と歩いた石畳

大阪市 上田柳影

テレビゲーム買うと何にも手につかず
老いたかな米のうまさが分りかけ
手話の娘はおしゃべりらしい手の動き
よっぽどの好き貝割菜で吞んでいる

大阪市 今西静子

誕生日祝うてくれる子が傍に
片手あげた合図へとんでくる彼女
たこ焼が少年の手をあたためる
湯豆腐に静かな愛の老いふたり

竹原市 信本博子

過去の紙濃いクレパスで塗ってみよう
ひとりいる部屋に射し込む月明り
トランプ占い吉と出るまで繰っている
水割の氷が光る愛揺れる

竹原市 石原淑子

もう一本おつけしましょう春はそこ
単身赴任夫の酒量が案じられ
水仙を活けて背筋をのばすなり
冬の陽にやきもちやきのシクラメン

大阪市 秋田茂

にくめない貧乏神と二人連れ
不景気でうちのサンタは風邪をひき
ほこらしげにふるさとの柿が着く

何が幸せなのか写真の僕は笑ってる

唐津市 山口高明

荒くれの胸より落ちた子の写真
壱千尺の地下で聴いてる浪花節
野心家の風に煽られ隅に居る
待たすだけ待たし院長留守と言う

鳥取県 さえきやえ

鬼がいる童話やっぱりおもしろい
垣根ごし椿が鬼と話してる
橋のない川もたしかに夕ぐれる
夕ぐれに笛を吹くのは枯葉かな

兵庫県 脇田米朝

口笛が鳴って二階が合図めき
どこを見てなはると妻が袖を引き
むしゃくしゃに蹴りたい石が見つからぬ
太陽を心に抱いた大らかさ

兵庫県 森脇和子

ローカルの駅長さんは花が好き
返信が届かず灯り消し惜しむ
だまされて騙してゆれるヤジロペー
丸ごとの魚が切れぬ二十妻

今治市 月原つくし

アングルを変えてチャンス待つ女
運のない手に馴染ませた軍手干す
指切りの痛みが消えぬ病むベッド
仕掛人だろろう花束届いてる

八尾市 驚見章

二次会を抜けて夜なべの灯に戻り

マネキンのつもり試着室ポーズする

地下鉄の風に改札一人居る

ジャンケンで福引に行く児が決まり

山口県 高崎雀声

傷口をいやす男のコップ酒

海と空国境はさみ同じ色

今年こそ結婚します初詣

汽車発車させて駅長菊手入れ

熊本市 北川一進

なぐさめのはずが電話のもらい泣き

豆いくつ食べたと鬼も輪をかこみ

マークには弱い高値を買わされる

宴会の踊り自慢が平社員

高槻市 河瀬芳子

付き添ってみて病院の夜の永さ(夫が入院)

お隣さんの果物籠の朱のリボン

検温へ美人のナースは国訛り

姦しい遠足の子と乗る不運

八尾市 松下蕉露

自動車で来場禁止のモーターショー

生字引生涯同じ課に勤め

抜擢を沙汰やみにする女癖

酒やめた父がボンボン食べている

高知市 北川竹萌

古里へ車で祭りの義理果す

うまく事納めたなどと二枚舌

寒いから今夜は湯豆腐にしよう

髭剃らぬままの応対落ちつかず

吹田市 栗谷春子

骨折で読書三昧ゆるされる

冷めたお茶気にもならない友という

夕刊の来る頃ふつと物思い

銘銘皿が今日は主役の栗きんとん

守口市 結城君子

誰かこの予定つぶしてくれないか

門限の僧に一礼塔撮す

兄危篤はじめて義姉の素顔みる

どちらから見ればよいのかサイン文字

尼崎市 鈴木良征

押しくらまんじゅうよい子の丸い背が伸びた

償いに戦さごつこの玩具買う

敗北の讃歌うたわぬ事にする

ロボットが病むやたら教えこまれて

米子市 門脇晶子

雨だれの今日の指揮者はだれですか

あばれ太鼓がしずかになって夕暮れる

灯をつけて昼の足跡かきつづる

箸老いてかなしみを知るきずのあと

嫁姑二人の仲は鳩ポツポ 鳥取県 土橋はるお

お線香の煙が好きぬ鳩もいる
丸出しの訛を箸でつついてる
中流の背が放電をしている

尼崎市 吉永 伊三郎

春の海年の始めに聞く平和
自信ないといいつつ聞き耳を立て
やむにやまれぬ答です二人半

長寿会幹事の友が先に逝き

貝塚市 池田 寿美子

定退にボーナスセールはわずらわし
風邪をひいていても艶っぽい女がいる

風花よ届かぬ想い乗せてほし
上醍醐脚の自信がついて来た

守口市 森川 まさお

臥したまま総合口座見てる妻
病む妻の手のつめたさを口にせず

見舞いがたら新妻つれてやってくる
プラットホーム端から端へ歩く癖

広島市 望月 はるひこ

だまされてばかり冷い眼が育つ
嘘つきが自分の嘘を信じ込む

考えが決して歩くことを止め
外された首輪へ野性とり戻す

島根県 津村 八重子

頑張って買って粗品と書きそえる
真正面に祖父の座家族むつまじい

雪男信じる児等の瞳がまるい
汚染した田舎の川に雑魚がいる

熊本県 高野 宵草

賀状リスト幾十年の名を削る
日常は急須が詰まるお茶を飲み
井の中の蛙にもある自己主張

尼崎市 木下 よしつぐ

待つ人がとうとう来ないみぞれ雪
気の晴れる話を母が持つて来る
先方が黙ると催促言い出せず

河内長野市 大西 文次

CMに妻のへそくり狙われる
退屈を庭から猫に覗かれる
こっそりと帰って来てたランドセル

米子市 小村 てい子

限りなく惹かれる赤に女住む
そこ迄は一緒に歩こう北の風
午後の庭お喋り好きと聞き上手

鳥取県 福田 あや子

りんご挽ぐ日を指折っている男
スパイスを替えて女が熟れてくる
ライバルの毬は即座によく弾み

鳥取県 羽津川 公乃

アメリカに小さな義理のレモン買う
用心深い夫に従い疑わず

陽当りの良い部屋嫁に貰う幸

出雲市 小玉満江

山合いを静かに静かに雪が降る

気くばりを欠いた言葉が突きささり
友達は軍歌になって活気づき

堺市 桜沢あかり

雨旅行バスから次々傘の花
淋しさは踊りつかれたピエロだけ

岡山市 河野青銅

鈴とれば野性に戻る猫の貌

奇を衒うこともなかった昼の月
神さまの鈴を鳴らしてよく眠り
照る日あり曇る日もある聴診器

榎原市 西本保夫

お菓子屋と齒科医ができた埋立地
下宿屋の隣さんまが匂うて来

京都市 森川春子

紙将棋おやつの時間とうに過ぎ

花言葉妻の小皿に盛っておく
ここで日記は一線を引きマンガ画く

尼崎市 的場十四郎

孫の電話さすがに兄は兄らしく
お詣りをすませて紅葉押し花に

弘前市 真喜内實

雨もよし雪もまたよしお元日

名案を出して拍手の中に居る
あれからは背中合せの夜が続き
越前で蟹に見とれて横歩き

呉市 蔵重成人

風と歌う小道具素敵な人が先

大阪府 榊本落児

ポケットの穴つくろえば愛こもる

敵よりも怖い味方が中に居る
まだ色を残す銀杏を本に入れ
風邪薬眠いと思う効いてくる

大阪市 渡部さと美

末世かな京では仏も拝ませぬ
妻が風邪俺はなんにもしてやれぬ
職人と言われ孤独に生きている

米子市 川上より子

風花がおいでおいでをしています

両替機お札にアイロン掛けて来な
うちの子も皇太子のお子も二十歳
ひとり言出るのはあなたが居てるから

高槻市 芦田静江

ふる里はひな人形と父と母
がまんして首をのぼして鶴あるく

可愛気を欠いた自覚に寒の冷え
好き勝手何処ふく風の一人膳

静岡市 青柳金吾

脱ぐ靴に親の躰が察せられ

ピンクのドレス夢を広げるダイエット

静岡市 青柳金吾

設計図竣工日迄決めて書き

唐津市 相葉 あき

手に負えぬ鉄を母に預けられ

よく馬が合って金魚の糞になり

富田林市 田原 久子

ひょいと来る男待つてる黒ラベル

病窓に四季の詩あり風の音

大正の男パソコンに泣かされる

西宮市 秋元 てる

ためらう人の切符も予約してしまふ

息子等が老後うんぬん寝るとする

一人だけ味方の部長左遷され

岡山県 矢内 寿恵子

茶柱に明けの悪夢が消えていく

古日記白い頁にある記憶

鍵っ子にあしたは父母がいる強気

兵庫県 東浦 砥代

愛された朝の鏡が炎えている

やりくりは嫁に任せた賞め言葉

母さんの手紙にいつも叱られる

川西市 野村 静雄

帰省した子と帰省せぬ子の話

よく分りましたと女言っただけ

恵子と言う名で内孫が一人増え

唐津市 筒井 朴竜

凶兆と恐ごわ覗く箒星

国鉄の神経を切る無神経
望遠鏡据える干場は天文台

伊丹市 山崎 君子

人形の眼が一つだけうるんでる

酒のんで秋の夜ながのひとり言

気まぐれな寒さが豆腐鍋にする

尼崎市 森安 夢之助

パート帰り袋の中に葱もある

民宿の栗めしこれも旅の味

道聞けば行き過ぎらしい口と指

豊中市 小畑 よし子

塗り替えた塀に紅梅咲きこぼれ

弟の会社に平のままでいる

単純な儲け話に寄ってくる

新発田市 上鈴木 春枝

肩書きのランクのままに選る歳暮

歩道橋見られたくない涙ふく

片言で笑いの種をまき散らし

旭川市 朝倉 大柏

高いから高級品と思ひ込み

言うことのある日は飲んで黙っとく

向う岸届かないから痛罵する

田辺市 染道 佳明

家が欲しい家が欲しいと子供まで

ガン宣告受けた私を考える

不倫の恋家で子供が待っている

芦屋市 上田佳秋
師走から逃げて屋台のコップ酒

反抗するのは決して次男坊
川底の小石が悲恋知っている

愛媛県 石手武

寝るだけの独りに広い四畳半
念仏を唱えて罪を軽くする
代筆は齒の浮くようなラブレター

出雲市 小白金房子

感激の素顔を濡らす表彰台
チャイムで渡る確かな白い杖
交換車雨のやみまに声を聞く

奈良県 和田萬里

病得て夫のやさしき確認す
一日中寝ていたいのに主婦の業
友逝って星空冴える年の暮

高槻市 笠松高子

冷戦中猫も病の床につき
すりへった靴が明日を夢見てる
春めいてバキュームカーも昼やすみ

富田林市 松本今日子

離婚したいきさつ聞いている午前二時
陽は西へ十三日の金曜日
順番を待ってたように風邪を引き

新潟県 高野不二

収入は別です私が世帯主

寄付貰う為を集める酒が出る
コマージュのポリウムに目が覚める

竹原市 岩本笑子

山茶花の首をかしげてこぼれけり
年賀状明日逢う人にも出しておく
足跡がどうのと恐竜掘り出され

鳴門市 八木芳水

馬鹿に徹したら戻って見せる橋
叩かれて叩き返した意地っ張り
ポケットベル今日は休めよ旅に出る

岡山県 伏見すみれ

太陽が笑うと洗濯したくなり
煮ころがしうまく掴めた赤い箸
エプロンをつければシャンとする母で

青森県 波ただお

今朝もまた二羽の雀がジャレに来る
揚げられた魚は海の方を向く
十二月後から吹雪追って来る

茨木市 堀良江

針供養だいこ炊きから来る師走
風邪に臥して師走の音を聞いている
年の暮十大ニュースに事欠かぬ

岡山県 牧野秀香

一片の雲が邪魔した十三夜
平凡に生きた余生に趣味の友
甘酒と漬物自慢の今日の幸

山茶花と寒さを語る霜の声
荒波が浜に放り出す那智の石
第九と何処で繋る年の暮れ

大阪市 川原章久

孫の留守チャンネル権を妻が取り
言訳のりハーサルして夜の汽車
泣いて出た子には子の意地夕餉時

佐賀県 米倉彩女

美しい夢があるのに慙もある
裏切りを忘れて上げた友が逝き
漁火が忘れた過去を呼び戻す

大阪市 亀井円女

どん底を歩いた道が長かった
心根が未だ分らない橋渡る
胡麻すった分だけ実入り殖えて来る

寝屋川市 立床晴風

居酒屋で吞まねばならぬ父の顔
秋時雨ここは若狭の一の宮
ある夜ふと里芋の味思ひ出す

大阪市 堀口欣一

このあたりみんな知ってる大銀杏
頼られて頼って今日も無事昏れる

島根県 森山英子

孫娘結婚
フラッシュを浴びて島田が浮きあがり

唐津市 浜本治幸

湯の花を入れて旅情を懐しみ
宝くじ皮算用が先に立ち
秋時雨ひねもす今日の留守居役

富田林市 片岡智恵子

プレッシャー昔はビビルと言っていた
筋道を通し心に残る悔い
二度の職そんな背すじのばさずに

岡山県 千原理恵

箱入りの娘で指がきれいすぎ
母親の知恵が身につき母となる
花芯まで奪って去ったつむじ風

岡山県 後安ふさえ

思いきり泣いて心ははれました
せせらぎに影を流して川柳
弓削の句碑メモして昇る夫婦杖

青森県 福士トキ

かたくなに老人クラブを拒んでる
カニを煮る女心を鬼にして
やさしい人に上げたくてりんごもぐ

益田市 里本たかし

半分は種を明かさぬ白髪染め
再会のイメージ変えるベレー帽
敬老の日へ白い花が咲き揃う

泉佐野市 大工静子

お隣の児の名も書いた老いのメモ
水と米共々流れいら立つ日

二段階落とし古茶碗割れず

出雲市 竹 治 ちかし

責任がないから強い拍手する

本炬燵などは知らない長い足

子の影を包んで余る母の影

弘前市 齋 藤 嘉

セリ市にりんご出してみかん買う

また一つ花束増えたカーブ道

番台の女漫画を読んでおり

尼崎市 佐 藤 美代子

パソコンで友の心を計る子に

我が輩は猫を小脇に一人旅

首洗うせめて明日の戦いに

大阪市 横 山 為 子

阿弥陀仏守るに仁王草履ばき

鉄骨のビルの谷間に犬と住む

骨のある言葉に蓋する二枚貝

大阪市 朝 田 晃 世

庶民知恵猫のひたいに家が建つ

落葉でみわたす山は冬の色

のん気でもけじめ忘れぬお人柄

八尾市 椎 尾 公 子

愛犬のつぶらなまなこに見透かされ

駅弁のあれききこれきき迷い出し

愛媛県 八 塚 三五島

晩婚の切らねばならぬ糸がある

道連れになろう人生めぐり逢い

それ以上言うて男を捨てますか

鳥取県 太 田 幸 枝

雲つかむ話に落し穴がある

黒髪を洗い一泊旅に出る

子の親となつてめつきり強くなる

鳥取県 乾 喜 与 志

御仏の慈悲も及ばず暮れの古都

悪人になれず善人とも言えず

我がものでない札束に疲れ果て

鳥取県 西 川 和 子

挑戦をする時女紅を引く

内職の部屋にも花を活けましょう

ロボットがいつも同じご挨拶

豊中市 一 瀬 福 一

渦中に立つて仮面が外せない

親切な傘に遠慮の肩が濡れ

言論は自由番茶が冷えてくる

泉佐野市 真 崎 浪 速 子

這い這いで湯殿迄初孫ついてくる

伝い歩きの初孫に茶碗が狙われる

重うなった初孫の目方を知る寢息

大阪府 平 井 露 芳

税務署が恐いというほど儲けたい
あわだち草冬だやっばり枯れて来た

白虎を写すに檻が邪魔になり

鳥取県 乾 隆 風

繋ぎ舟になって女が揺れてきた

鳥取県 田 村 きみ子

マヨネーズが嫌いになっている別居

鳥取県 田 村 きみ子

母の座を守る貫禄だけは持ち

鳥取県 岩 田 三 和

ユーモアがある人だけに若く見え

鳥取県 岩 田 三 和

百人のコーラスここに春迎え

藤井寺市 菊 地 繁 男

督促状握って晩の目刺し焼く

指宿市 渡 邊 伊 津 志

算盤で確かな計算出す明治

指宿市 渡 邊 伊 津 志

主張せぬ奥に女の強さ秘め

島根県 堀 江 百 代

信じ合う夫婦が蒔いた花の種

島根県 堀 江 百 代

朝の挨拶からはぐるま廻り出し

岡山県 池 田 半 仙

旅の宿みんな幸せそうな顔

岡山県 池 田 半 仙

嫁取りの近い隣は畳替え

桜井市 前 山 美 恵 子

陽当りの縁側蠅も寄って来る

大阪府 田 中 節 子

一時の夢に酔いますファッションショー

喫茶店のホットミルクが高すぎる

岡山県 中 嶋 千 恵 子

逢うて来た余韻を残す洗い顔

岡山県 松 本 元 江

礼心あって無心も聞いてやり

岡山県 松 本 元 江

荒れた日の濁り沈めて冬の川

吹田市 山 田 里 子

窓外に舞い散る激しきぼたん雪

吹田市 山 田 里 子

夫病んで暮しのリズム重くなる

吹田市 山 田 里 子

ふつうの子ふつうの親で夢もあり

吹田市 山 田 里 子

日溜りへ寄って奥さま閑らしい

島根県 難 波 節 江

久し振り電話してみる外は雨

島根県 難 波 節 江

気に入らぬ地味な洋服勧められ

堺市 小 西 小 雪

色褪せた紙人形にある愁い

堺市 小 西 小 雪

手鏡に一喜一憂語りかけ

岡山県 杉 本 伊 久 栄

古傷はさけて対話の話題変え

岡山県 杉 本 伊 久 栄

宝くじ当らぬ先に使い道

唐津市 児 野 今 子

目覚しのベルが鳴っても止めて寝る

唐津市 児 野 今 子

背伸びしたぶんだけ多忙の冬の風

岡山県 福 原 悦 子

旅帰り熱い番茶でなごまされ

岡山県 福 原 悦 子

島根県 小田川 智重子

読み終えたページ探して眠くなり
春風へ心の窓を開けましょう

尼崎市 古川 幸次郎

肩組んでタラップ降りるハネムーン
直ぐ来いと電話の声に不安あり

大阪市 井上 白峰

セールスにつけこまれてる虚栄心
胃腸薬ポケットにあり忘年会

島根県 菅田 かつ子

ふふふんと鼻で笑ってくれました
聞きたくもないのに口止めまでされる

愛媛県 西山 えつ美

朝昼晩同じニュースを見てすわり
みかん摘むハサミの音のリズミカル

泉南市 坂根 流水

成人の孫にもそれぞれお年玉
連華寺で銀杏の落葉ただみほれ

兵庫県 奥野 テル

コロッケの匂い師走の風に乗
他人ごとと思えぬ師走の救急車

高槻市 大池 好古

一年の手塩の大輪切るハサミ
職深しのん気に見えて日も暮れる

兵庫県 野々口 ゆう也

美しく訣れて余韻揺れている

二十一世紀へ命をつなぐ夢つなぐ

鳥取県 若林 一止

貧しくも野菊を摘んで幸生ける
大陸孤児菓をもつかむ痣をみせ

大阪市 大倉 圭介

年賀状書かねば越せぬ十二月
のん気でも嫁の気持が分かる父

大阪市 高森 文子

つまみ食いすれど体重増えもせず
人の肩を借りて居眠るのん気者

島根県 坂本 雪路

形のないものを求めつつ日を追うている
ネクタイを土産に母の旅帰り

島根県 喜島 ノブ

焦点が合わず一日寝て暮す
外は雪蠅が一匹部屋の中

和歌山県 森 三枝子

旅カバン持病の薬持ち歩き
落城の歴史を偲ぶ石畳

兵庫県 円増 貞子

雨降りの昼を灯して書く便り
バス過ぎた後に風鳴る冬之道

吹田市 西岡 豊

お役所の返事に骨がありません
エンジンをふかせば妻が念をおす

守口市 若林 市郎

古くても便利でかわれぬ家になり
定年後の人気にしたのも二、三日

岡山県 戸田種子

多趣多芸負けず嫌いの忙しき
十二月財布の中も空になり

羽曳野市 麻野幽玄

還歴に祝われし赤着て照れる
折角の銘菓へ粗品ののしを掛け

堺市 安西カネ

流れゆく女の歴史旅のあと
人形の家の外には水雨降る

八戸市 島田昭治

スーパーで腕が抜けそう持たされる
向い風僕の闘志をかきたてる

島根県 園山世似

餌やれば野良猫さえも甘えだし
雪がくる予感もぐらが動きだし

大阪市 北脇清治

千歳飴大事に持って背で眠る
ボーナスの実感どこへクレジツト

唐津市 中山ふじ枝

も一つの自分がささやく夢芝居
窓際に勿体つけて使い捨て

藤井寺市 福元みのる

子供部屋掃除するにも許可が入り
ドラフトに裏も逆転劇もある

新宮市 田中国彰
雑魚一びき釣れぬ日もある鯛雲

トラのスタンブ巨人ファンが売って居る

倉吉市 田中八太朗

カラオケの下手なところが愛される
お化粧の割に玄関乱れてる

豊中市 額田明吉

イブの街底冷え叫ぶ社会鍋
忘年会カードで払い梯子酒

大阪市 末永芙久枝

大売出しくじ引きたさに買漁り
歯を入れて益々元氣空いばり

河内長野市 植村喜代

今日電話ストレス皆んなもって行く
河合寺イッキに登る娘に追われ

岡山県 後安江山

人形に投げキッスして部屋の留守
旅の宿やっぱりに電話掛け

大阪市 富岡温子

我が儘が通せる朝の温い床
一家団欒夕餉の席の高笑い

岡山県 富坂志重

天国と地獄の中程何が有る
思い切り泣いて一人歩きのネジを巻き

米子市 宮本佳女男

物忘れ意識し過ぎるボケ恐怖

童心に還れば解決出来るのに

兵庫県 市川 亀 男

孫生れお年玉は予算外

マイホーム抽選洩れてまた借家

大阪府 宇 久 はる子

気分だけ貴族でいたい十二月

ユニークに九〇年を生きた父

奈良県 山 村 有 佳

日だまりに顔並べてるのん気者

年賀状売り始めから年の暮

大和郡山市 岡 田 寿美礼

山芋掘り苦労かけての白い肌

目覚しの時計コチコチ年の暮

広島市 花 田 繁 子

妻入院大邸宅に唯一人

今の世は老人天国有難し

大阪市 山 本 炉 斉

木枯しやすずめも来ない冬景色

のん気には構えて居れない師走です

茨木市 井 上 盛 雄

行く末は書かれていない道標

躓いた石で鍛えた肝っ玉

和歌山県 北 山 凡 太

宅配のメニューで済ます妻の留守

惨敗の候補者側に出る違反

和歌山市 三 谷 周 三

案山子にもユニホーム着せ阪神狂

上品に食欲見せず客帰る

愛媛県 二 宮 沢 子

のみすぎて妻の顔色見て入る

古里を心にえがき便り書く

米子市 大 田 繁 子

うろおぼえ老父と老母とのものがたり

友情を湖畔の宿で温め合い

兵庫県 山 崎 敏 子

妙薬ときけば飲ませる母の愛

古都税で仏さまにはお気の毒

新宮市 船 越 正

夏を待つ蟬もいたはず開拓地

結婚後年月重ね妻に染まり

大阪市 喜 多 佐津乃

おじいさんのトンビナウイと見直され

用事ごと布団に入って思い出す

ジュニアの部

枚方市 二 宮 撰 子

友達に二人だけのひみつだゾ

茶柱が立ってるうちはいいいけれど

枚方市 二 宮 正 彦

ピカピカときれいに光るお星様

もう冬だ風君活やくガンバッテ

路郎賞

川柳塔賞

候補作品中間発表

自昭和60年9月号

至昭和60年12月号

路郎賞候補作品

(到着順)

正本水客

追いぬいた分だけ敵が多くなる

鈴振れば社に深い水の音

雨宿り本尊さんに尻を向け

街角にポストがあつて落着ける

猫に膝とられ落着く友の家

モナリザの眠る姿が見たくなる

終戦の日から自伝を書きだそう

夏帽子川に流れて嬉しそう

いくばくの血をちちははに受け継ぎし

ふところ手竜馬がすれば絵にもなり

赤川 菊野

ボタン一つ取れたぐらいの人が好き

鈴木 節子

宮西 弥生

福本 英子

松川 杜的

菅井とも子

竹内花代子

小西 雄々

堀端 三男

落合 正江

高杉 鬼遊

赤川 菊野

鈴木 節子

野村 太茂津

理想とはまるで違った今の幸

許せない影法師だが連れてゆく

掌の痛みわかつてくれるまで叩く

眼帯腹帯丁字帯くすりの臭いつきまとう

釘のない梓でなかなかはずせない

悲しいがひとり芝居の台詞だよ

することがなくて寝ている訳でない

妻の手に夢も命もまかせきる

人間が怖いと思う流れ星

坂口 公子

岩本雀踊子

高杉 鬼遊

牛尾 緑良

神平 狂虎

本間満津子

春木 年代

寺田 裕美

森田カズエ

坂口 公子

岩本雀踊子

高杉 鬼遊

牛尾 緑良

神平 狂虎

ジョークひとつあたたためている無一物

初恋の女を忘れるほどに呆け

ロボットのように天皇歩かれる

受け流すための台詞がととのわぬ

ひよつとしてひよつとして夫見えたなら

泣き笑い笑いの方が悲しくて

仰山な本屋の本に酔って出る

ピンセット傷の深さに触れたがり

街角にポストがあつて落着ける

公園のベンチで示談まだ続き

モナリザの向いの席にいる苦痛

本物の笑いを幼児からもらう

熱の夢赤鬼青鬼追いかける

小島 蘭幸

原 独仙

土居 耕花

西山 幸

堀江 芳子

福本 英子

有働 芳仙

中川 滋雀

菅井とも子

久家代仕男

林 はつ絵

西口いわゑ

落合 正江

きょう口をきいたは集金人とだけ

谷垣 史好

影もまたヨボヨボ私に似て来たな

西森 花村

困らせる手紙ばかりを書いている

柳原 秀子

困つたら来いと言つたら留守ばかり

川上 溪水

ボタン一つ取れたぐらいの人が好き

鈴木 節子

受け流すための台詞がととのわぬ

西山 幸

いい答出るまでカード切っている

西川 景子

ふるさとのリンゴの幹に吊るラジオ

田中 叶

西田 柳宏子

蟻の列一匹逆に歩くのは俺

有働 芳仙

耳疼く不協和音を聴きすぎて

西山 幸

満月にほっと自分を取り戻す

津守 柳伸

漫画読む夫の横で妻安堵

山下みつる

耐えるなど言わずに妻がついてくる

牛尾 緑良

仏にも鬼にもなれず米をとぐ
土握るこぶしの中に今日がある
猫が笑うと犬も笑うてくる家族
自然との握手へ余生満ちてくる
空振りもある人生が楽しゆうて

赤川 菊野
大屋 秋峰
小島 蘭幸
遠山 可住
小野 克枝

気配りが上手くカラオケまで歌い

岩道 博友

花泥棒へせつせと花を咲かせます

奥田 満女

薬一本もらつて祈り深くなる

岩本雀踊子

老いの眸に慈母観音のおわします

林 はつ絵

土曜日はギョーザが好きなき様さ

小池しげお

橘高 薫風

砂利船の闘志吃水すれすれに

羽原 静歩

口紅が冴えて柩の中にいる

大屋 秋峰

レントゲン我が酒ガメの偉なるかな

工藤 甲吉

良い顔で干し物の山たんでる

本間満津子

夾竹桃戦鬨帽が征つた道

恒松 叮紅

愕然と白髪みつめる下半身

波多野五楽庵

仕事ではない顔モデル横になり

西森 花村

旦那のお尻たたくに手頃のしゃもじ買つ

宮尾あいき

(宮島)
突然にお会いできるも此の世なり

佐藤 藤子

川柳塔賞候補作品

小出 智子

鎮守の森にとり残されたわらべ唄

田中 晴子

断りの返事をつつむオブラート

松下 蕉露

返事せぬ妻とその上の暑さ

田中 叶

徹夜して二倍生きてる訳でなし

福田 礼子

入れ墨の男と薬の順を待ち

森川 春子

後姿へあかんべーして気を晴らし

桜井 千秀

子や妻にシートベルトを促され

服部 頼一

老眼鏡北のどかに置き忘れ

森川まさお

手離した土地へでっかいビルが建ち

西山えつ美

けじめとは少し淋しい時もある

信本 博子

正直に話せばこわれそうな夢

東浦 砥代

娘が寮に帰ればつくつくぼうし鳴き

船越 正

谷垣 史好

肩書ははずした夫と昼を出る

田中 節子

重箱と一緒にのこる母の味

野村 八重

出世して落し穴を埋めにゆく

稲本 凡子

小石なら跳び越えられるほどの鬱

赤木 和子

私の話聞いてきいてと水中花

野村 京子

解決になつてはいない一人の死
酸欠で不平分子の中にいる
年金で小さなラッパ吹いている
ロッキングチェアの知恵は宙にうっく

田中 叶
八塚三五島
吉永伊三郎

心底は読めず靴音よくひびき
泡のないビールに似てる正義感
河鹿鳴くと男は離婚考える
お天気の良い日も蟹は泡を吹く
地下茎は誰も気付かぬ出来心
家並みまだ続き別れが言にくい

結城 君子
藤井 高子
新井川青舟
鶴久百万両
森川まさお
福田あや子

真実一路ざくろは割れて見せ
冬火花まさかの時を話し合っ
弁解をしながら遊ぶ戦中派

高杉 鬼遊

夜の川真暗がりの音を立て
一人になった時の二人のはなし
ならば今狂気の沙汰を見せましよう

植村 喜代
高尾よし子
赤木 和子
高杉 千歩
田中 晴子
川上より子

夫婦絵図妻はいつでも鉦つけ
六十の恋は外野がうるさくて
十二時を誰の時計も打った通夜
言う事はそれだけですかと蚊を叩く

狙われる事は覚悟の美人秘書
徹夜して二倍生きてる訳でなし
千円を毎朝貰う下級武士

丹下 玉子
福田 礼子
山田 保蔵

源氏蛸も平家蛸もやがて死ぬ
お芝居の中で私はよく笑う
喜びも悲しみも又菊の花
紙ヒコウキに乗せてもらった仮りの妻

土橋 蛸
清水 康恵
安田 志津
寺中三枝子
古川美津枝

河内 天笑

愛のムチなどと本当は腹を立て
げんまんの好きな小指をもてあます

朝倉 大柏
大西 文次
田原 久子
佐藤 令子
藤井 高子
伏見すみれ

清貧の抵抗鍋を光らせる
少しずつ外野に回る父の椅子
閻魔はんよう順番を間違える
倅せの入る隙間を開けておき
情熱をかけたピアノが邪魔になり

木村貴代子
清水 康恵
森川まさお
田中 叶
山本 半銭
福田 礼子

投げられぬ小石をひとつ持ち歩く
病む妻と夏の終りをうとんすき
頰杖を組むと埴輪の目となりぬ
浪曲が好きやなんてと酌いでくれ

妻の手が温くて旅に出られない
十二月おんなじとこでけつまずく

年金の首に手頃なルーブタイ
スーパーで逢う先生はママの顔

田中 晴子
吉永伊三郎
灘尾 民子

板尾 岳人

自画自賛出口は一つ開けておく
裏切った言葉が憎い雪つぶて
半生は似た者夫婦の数え唄
にげ道にまったをかけた風の詩
ロボットにお伽斬を教えとく
引き金をひくのはいつも女たち
知恵袋普通サイズを持つている
死後のことながなが語る昼の月
紫の雲に届かぬ縄ばしこ
追伸に旨く小骨が抜いてある
浅はかな計画だった泥の舟
投げられぬ小石をひとつ持ち歩く
湖水からぬつと顔出すろくでなし

吉川 寿美
木本 如洲
矢内寿恵子
河原恵美子
森脇 和子
野村 京子
山崎 君子
高杉 千歩
田中 晴子
藤井 高子
伏見すみれ
清水 康恵

消ゴムが小さくなってゆく不安
おとし穴きれいな雪をのせておく

お知らせ

2月刊行予定の「菊澤小松園遺句集」は都合により6月刊行となります。お約束より遅れますこと、お詫びいたします。ご了承ください。

菊澤小松園遺句集発行委員会

— 水煙抄 —

秀句鑑賞

— 前月号から —

辻 白溪子

タコ焼きの指にダイヤのあった過去

森 三枝子

ダイヤをはめてた指、女として最高に恵まれた過去があったのに、今はタコ焼きがびつたりの境遇、そして指にはダイヤはもう無い。

シャツターへ背伸びしている貸衣装

上鈴木 春枝

主役の新郎、新婦のポーズを細かく注文しているシャツターへ、貸衣装の親戚が、目立つようと背伸びしている光景は、滑稽としか言えない。

喪が明けて弱い女を脱ぎ捨てる

福田 札子

いつ迄も悲しんで居られない夫の死と、残された責任と決意を、弱い女を脱ぎ捨てるといふ表現で心強く描かれている。

時効にはしない女の記憶力

田原 久子

ちよつとした浮気、男はとくに忘れて仕

舞っているのに、妻は仕合せとは別に忘れようとしてない。恐ろしい記憶力は迷惑である。フルムーン誰が妬くのか雨続く

松本 一郎

定年後のフルムーンか仲のよい夫婦をよく見受ける。折角の楽しい旅を止まぬ雨、誰かに妬かれていると感じるのも仕合せだからこそ、本当は天が妬いているのである。

本当の話へ誰も寄つて来ず

高杉 千歩

お喋りの話題は、何といったも噂話、それは真実でないから好奇心も手伝って面白いのである。本当の事なら誰も興味を湧かないし聞く気がしないと思ふ。

食べ頃と風にこびてる吊し柿

古田 鈍舟

吊り下げた時には重かった柿も、日が経つにつれ、こじんまり締まり白い粉が吹き甘味がついてくる。そんなほのぼのとした情景が風にこびてると感じさせる。

裏の無い男で少し物足りぬ

笠 鳴 恵美子

平凡な社員、別に強意見を言う訳でなく、ただ黙々と働くそんな真面目な存在でも、それなりに役立っている苦、例えばそれが夫でも、物足りぬとは気の毒である。

なに不足ないが夫のきれいい好き

田中 晴子

夫に小まめに動かれると、かえって息が詰るらしいが、綺麗好きなのも迷惑かも知れない。そこが不足だとはいえない話である。

マニユアルで出来ぬ職人芸の自負

高野 宵草

最近のカメラは殆んどがマニユアル機構で失敗がないから、素人には受けがよいが、ある程度経験を積み技術がつくと物足りないものである。職人気質も同じである。

釣り池に暇もあます顔もあり

井上 照子

私は犬の散歩で、よく池のそばを通ります。毎日必ず釣りをしていている人に会いませぬ。勿論好きで欠かさないものと思っておりますが、こんな人も居たのです。

食欲の秋にそむいて病んでいる

松川 芳子

流行の風邪ひきか食欲の秋に病気になるとは大変残念である。早く治って味覚を十分楽しみたいもの、秋にそむいてという表現に共感した。

分らせる授業に並ぶ色子ヨーク

齋藤 彦

赤子ヨークで黒板に線を引いて、丁寧に説明してくれた教師を思い出した。色を替えるだけの気配りで、案外効果が出るものらしい。

ささやかな儲けを割いて宝くじ

乾 喜与志

誰もにこんな心境がありますね。でもいつも夢だけで終ってしまうものです。

ジュニアの部

秋もいい家でゴロゴロ本を読み

二宮 正彦

愛染帖

橘高薫風選

開発課自分の家も路となる

富田林市 藤田 泰子

三角に折る鶴でなし騙し舟

吹田市 井上 照子

働哭の中に芽吹いた思慕の種

大阪市 朝倉 利義

わかれ道やはり花咲く方へ行く

和歌山市 神平 狂虎

入院の妻の泣きごと聞きに行く

高根県 小砂 白汀

手術衣の妻が他人の顔になる

高根県 小砂 白汀

回想の亡父は雨から雲になる

笠岡市 笠岡 忠三

泥酔がしたくて本を買ってくる

那賀郡 大屋 秋峰

ブランコが発止と地軸指して昏れ

吹田市 後藤 火鳥

寒月の蒼さが好きな不眠症

岸野 あやめ

妻の語気二言目には知りません

長髪の僧のお経を軽く聞く

指宿市 渡辺 伊津志

はばかりぬ愛なら陽の下で逢おう

草笛を吹く老齡を親しめり

牡丹散る触れ合うものを光らせて

伊丹市 榎谷 寿馬

葉ボタンは花の系図を羨ます

乾杯に炎えるルーヂュと赤ワイン

満ち足りて水音ポトリ聞くコタツ

慎重でガラス隔てた夜の恋

かたつむりころんと涙隠してる

ままならぬ子は成長と信じよう

左遷だとわかる祝辞のむつかしさ
酒癖が定年までを平社員
八尾市 松下 蕉露
他人はみな仕合わせに見え夫は病む
高槻市 河瀬 芳子
手術前入歯はずした夫の顔
高根県 堀江 芳子
盲人の感覚刃物の鋭利さも
唐津市 浜本 義美
手離れのしない幸かも夫といる
唐津市 相葉 あき
廃車にはなりたくはなし医者通い
「サヨナラ」へ涙なみだの孤児哀れ
唐津市 相葉 あき
ひと癖もふた癖もある馬と会い
唐津市 相葉 あき
預かった母の鉢は手に負えぬ
尼崎市 西村 かすみ
誕生日コレクトコールで祝われる
ニ崎市 西村 かすみ
ムンクの絵見ると写経がしたくなる
和歌山市 福本 英子
勤の良い娘が乗ってくる騙し舟
弘前市 波多野 五楽庵
皮ジャンで寒空へ恋捨てにゆく

栗のようだ芋のようだとほめて食い
寝たきりの飽かぬ手鏡ほどの空
寝たきりの会いたいひとは今日も来ず
青森市 工藤 甲吉
幻の魚も眠って白い湖
過激派のゲリラ無茶苦茶どこでなし
岡山県 土居 耕花
金婚がおちよくり乍ら祝われる
岩田美代
弁当の目玉焼きから睨まれる
富田林市 岩田 美代
見つめると眺めているのちがいない
ブランドを着て古椅子をなぐさめる
米子市 八木 千代
秋の菜の歯ざわりよ生かされている
うしろすがたも気になりだした雪だるま
大阪府 小出 智子
友達と御座候がある炬燵
考えてかながえ抜いて無に還す
東大阪府 津雲 一
岩木山凍れば津軽みな凍る

この辺にこぼれた種の雪囲い

御遍路さんバターの匂いして若し

笑いたくなる悲しみが有ると知り

一本松に縄を吊るせば首が欲し

虎マーク付けたら売れた売れ残り

宮様は成年式で中国孤児

十二月孤児に八日の氷雨降る

純血を守り通した鳩の白

あの人の口笛に似た風が吹く

ロボットが肩を叩きにやってくる

落葉焼き風のいたみに火のいたみ

殺虫剤やさしい父も母も撒く

募金箱私も年金生活者

嘘を聞くとても心地のよい言葉

点数を言わず皆自動慢する

栓閉めるふたたび恋をせぬように

過疎の里柿実るまま落ちるまま

実年の呼び名に恥じる平机

紅葉のトンネル続く神の道

処女航海シーツの色は鳥の色

紫の色で染まった夢の跡

かすみ草引き立てばかりしていない

戦さには耐えたが寒さ愚痴ってる

残り火でゆっくり煮たい鍋がある

マッサージするよっ心に歌を持ち

人なみに空気を吸うてまだ独り

経読めど経を解せぬ僧の増え

外科室は鬼手仏心の額掲げ

風邪癒えず視野の煙突風真横

御所の庭ピンクの似合う老婦人

空気のようにになった夫婦のもの忘れ

兵庫 野々口 ゆう也

橋本 岸本 木魚

岸和田 芳地 狸村

鳥取 新家 完司

岡山 松本 元江

河内 植村 喜代

尼崎 春城 武庫坊

和歌山 西山 幸

今治 越智 一水

平田 久家 代仕男

大阪 榎本 落児

和歌山 北山 凡太

大阪 上田 かつみ

西宮 奥田 みつ子

高根 榎原 秀子

島根 榎原 秀子

福井 榎原 秀子

それほどのこともないのに胸の灯よ

近道をぬけようとして鬼に逢い

み仏に通じたらしい灯がゆれる

看護婦はマスクのままて笑み返す

山茶花にうらみ言言う待ちぼうけ

すぐ転ぶ独楽よひとりで遊ぶなよ

長生きをすれば阪神だつて勝ち

意地はつた時から向い風ばかり

味噌汁のうまい嫁さんだと聞いた

夢広くもちたい老いの三面鏡

瓢の笛吹いて故里憶はるる

老骨に鞭うつなんて愚かです

サフランの花をさがしに誕生日

苦勞してきたの苦勞させたくないの

育児書に消されたくない子の個性

歌えない飲めないそれでも席が有り

米子 沢田 千春

堺市 宮本 かりん

守口市 森川 まさお

高石市 浅野 房子

米子市 林 荒介

大阪 西森 花村

和歌山 山口 三千子

鳥取 乾 隆風

兵庫 北川 とみ子

唐津 中山 ふじ枝

豊中 上田 登志実

高知 小沢 幸泉

鳥取 土橋 螢

新発田市 上鈴木 春枝

羽曳野市 麻野 幽玄

福井 榎原 秀子

吹田市 栗谷 春子
散ったばかりの落葉は残す竹箒

今治市 月原 宵明
群衆の一人となった無責任

和歌山市 桜井 千秀
あれ程のことで泣けてお幸せ

弘前市 真喜内 實
からす啼き雀も来たぞお元日

米子市 光井 玲子
手品師にそうそう鳩も付き合えぬ

島根県 土橋 はるお
何とはなしに熟女の鏡余韻がある

宝塚市 丸山 よし津
パソコンで化石のロマンス語れまい

羽曳野市 吉川 寿美
諦めは静けき中において無言

倉吉市 田中 八太郎
癌じゃない聞いて突然腹が減る

島根県 堀江 正朗
空想も風に消された雪世界

西宮市 松本 一郎
尻尾振る犬を味方と思わない

唐津市 久保 正敏
信じての言葉信する他はなし

唐津市 山口 高明
不景気の風に取巻き何時か消え

唐津市 浜本 ちよ
威を借らぬ張り子の虎で行くとする

高槻市 笠嶋 恵美子
最後には笑う積りの歩が一つ
和泉市 西岡 洛醉

十二月母・妻・女として走る
名古屋市 藤井 高子

名古屋市 原 さよ子
逡巡の私に影が二つある

唐津市 仁部 四郎
どじょう掬い旅の土産に習ろてくる

唐津市 筒井 朴竜
一瞬の沈黙客が皆帰る

唐津市 福田 あや子
どん底で乞食坊主のくむ胡坐

島取県 赤川 菊野
弾みすぎる毬抱いている女です

高知県 田中正坊
花束を受けて姑の顔になり

豊中市 渡部 さと美
地に還る枯葉カラカラ鳴る輪廻

大阪市 岡井 やすお
眼裏に春のきざしが見えはじめ

和泉市 西岡 豊
また一つ年賀欠札来る寒さ

吹田市 田中 亜弥
バス揺れてカラオケ衆が浮かれた

吹田市 堀江 光子
大胆な蟻がわたしの部屋のぞく

寝屋川市 林 瑞枝
再開の島へ袖先が波を切る

鳥取県 守口市 羽原 静歩
夕ぐれの風がおんなの喪にささる

堺市 高橋 千乃子
寂聴の心静かに春を待つ
無味無臭そんな女も母なれば

島根県 板垣 夢酔
良心を落して闇の中捜す

米子市 茂理 高代
七癖が一つずつ消え古稀がくる

今治市 月原 つくし
逆転を待つて無策のふところ手

米子市 小西 雄々
裏切りの皿は落とすとすぐ割れる

米子市 青戸 田鶴
一匹の鬼と夜な夜な語りあう

兵庫県 東浦 砥代
ゆっくりと豆煮る妻の持つ反旗

豊中市 額田 明吉
仕合せを年越そばでふりかえる

豊中市 中桜塚三丁目13-15
* 橋高薫風宛(ハガキに3句)

NHK川柳募集

課題 「風 呂」 選者 森中恵美子

締切 2月10日

(ハガキに三句以内)

投句先 大阪市東区馬場町3-43 NHK

大阪放送局「さわやか広場」係

発表 2月23日(日)ラジオ第一放送
午前11時5分から

近畿文字放送から

「川柳教室」放映

昨年12月16日に開局、放映を開始したテレビ近畿「近畿文字放送」に川柳が登場、橘高薫風氏が解説を担当した。

新幹線隣は何をする人ぞ

西尾 栗

万国旗思い風に揺れ

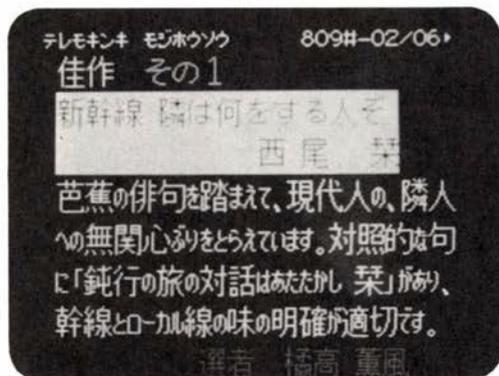
神前 朋義

ご近所のさながら歳暮預り所

傍島 静馬

の三句を皮切りに、歳末、新年には小松原爽介、福島郁三、西出楓楽、朝山千世子諸氏の作品が時季に応じて取り上げられた。

〔注〕文字放送とは、テレビ電波の一部（近畿文字放送の場合はNHK総合テレビの電波）の走査線を利用して文字・図形信号を送り、専用アプタウで任意に必要な情報をテレビ画面に映し出すシステム。国際的にはテレテキストと呼ばれ、最新の情報をもいつでも自由に見られる、まったく新しいタイプの「第3の放送」と言える。



近畿文字放送作品集

題 「雪」 3句

締切 2月10日

ハガキに明記の上、左記へご投函下さい。

〒540 大阪市東区谷町2丁目36番地

大手前ウサミビル3階

近畿文字放送 川柳係



白岩文衛さんを悼む

土居 耕花

この老齢で、あの頑丈だった白岩文衛さんの追悼文を書くなんて、全く夢でタイムトンネルの中に嵌ったような気がしてならぬ。

自覚症状が生じてから二カ月、そして術後の十数日、ひたすら呢懇の主治医を信じ切つて苦痛に堪えるご主人の胃や肝臓を蝕んで行く癌と言う病名を最後まで秘め続けられた奥さんの胸中はどんなであつたらうか、お慰めする言葉がない。

昭和五十四年一月、文衛さんを主幹に迎えて大原川柳もあの温厚な指導と弛まない御努力で今日、句報百部近く発行する程に成長したことは全く有難い事である。その間、地元婦人会のリクリエーションとして始まった川柳会、タルマ倶楽部の育成とグループの成長を記録した句集『川柳バス』や『ひまわり日記』の刊行等、多くの功績を残された。また対外的にもあの溢れる如き温情を慕う知己の

多い事は有名で、この事は昭和五十七年三月発刊の句文集『出会い』を読んでもよく分かる。いい人であつた。

去る日、栗先生から一番好きな句「牛の瞳に人間何をあわてとる」の短冊を頂戴したと言つて悦に入つておられた顔や、栗先生の金婚祝賀の会へ行くのに「田中正坊さん宅へ泊つて来る」と言つて嬉しそつた顔、顔々々の優しい童顔が幻のように眼に浮かんでくる。

文衛さんの恐らく最後の句と思われる川柳塔新年号の「私の一句」の中の句「パレットにまだ赤があり青があり、この何かまだ満ち足らぬ想いの句、果して何を物語つているのであろうか。まだ色彩の固定せぬ柳社を憂えるの事か、又は「むつかしい、むつかしい」と言いながら週一回岡山まで習いに行つておられたインドネシア語の事か。最近、頓に寡

第35回

西大寺 会陽川柳大会

日時 昭和61年2月23日(日)9時開場

場所 西大寺市民会館(観音院北隣)

兼題 続く 大森風来子選

鐘 小松原爽介選

一挙両得 桶高 薫風選

点 時実 新子選

内緒 中尾 藻介選

震う 水粉 千翁選

カロリー 浜野 奇童選

席題 当日二題 特別席題一題

各題2句・兼題締切11時

席題締切11時半・13時開会

会費 千五百円(記念品・発表誌・昼食皇)

投句の方は35cm×18cmの句箋に一句

ずつ書き、裏面に雅号記入。投句料

同封、2月20日必着で左記へ。

〒704 岡山市西大寺中2丁目7-8

宮川 陽仙宛

主催 西大寺川柳社

作であつた中のこの一句、この謎はもう聞く術も、解くすべも無い。とまれ文衛さんの近作数句挙げて悼記を終ります。

お父さまと呼ばれ嬉しい父である

独りから逃げる机のヘッドホン

お点前に武骨な膝が狩り出され

素晴らしい仲間と思ふ句報読む

文衛さんを偲ぶ

田中正坊

1月4日、岡山県英田郡大原町宮本の自宅で、川柳塔同人・参事の白岩文衛さんの葬儀が神式によりおごそかに行われた。昨年11月に津山市の岡病院に入院、12月18日に開腹手術を受けられたが、肝臓がガンに侵されており、1月1日午後5時33分、家族に見守られて永遠の眠りについた。64歳であつた

昨年9月29日の葉先生喜寿金婚記念川柳大会で会い、同夜、私宅に泊っておそくまで語り合つたのが、最後の別れとなつた。私たち

の仲間の誰よりも元気だつた彼が、こんなにもあつてなく死ぬとは思ひもかけず、一度も病床を訪れることができなかった自責の念でいっぱいである。文衛君、許してください。

思えば君と僕とは、昭和15年に大阪外国語学校に入学した時からの親友で、若い頃の君は熱血漢であり、ロマンチストでもあつた。お互いに将来への夢を語り合つたものだが、君は乞われて故郷の中学校に職を奉じ、32年間にわたつてひたすら教師としての道を行く。そして縁あつて川柳の道に入り、岡山の川柳界にその人ありと知られ、昭和57年春、教職を退くにあつて句文集『出会ひ』を刊行した。このことがまた、あらためて君と僕とが川柳という太いきずなで結ばれる契機となつた。

君のかつての情熱は、故山のまるい里の中で円熟し、当時、病床にあつた妻と僕とは、あたたかさときびしさがにじみ出た君の句に魅せられた。僕たち夫婦は、療養と看護の毎日を川柳であけくれ、少しまとまと君に送つた。そして時折訪れてくれる君に添削と指導をうけるのが大きな励みとなつた。君の紹介で薫風先生にもお見知りいただいたが、君は僕たちを川柳にみちびいてくれた恩人であり、かつ最初の師でもあつた。

昭和58年4月、妻が亡くなつた時、君は友人を代表して弔辞をよんでくれたし、遺句集『はねぶとん』の刊行にあつては、親味に相談のつてくれた。それからいっしょに北海道に行つたし、一昨年の中国旅行にも参加したね。ともしればくすおれそうになる僕の心が、君と語り合うことによつて、どれだけ慰められたか知れない。

その君がいつに逝つてしまつた。奥さんと二人の子息、年老いたお母さんを後に残し、この世でもつとつとしたいことが、いっぱいあつたに違いない。僕には君の18年間にわたる句業についてあれこれ語る資格はないが、僕の好きな句を掲げてありし日の君を偲びたい。君よ、安らかに眠りたまえ。

夢捨てた男の窓に四季のうた
人はみなひとり生きる鱗雲
天職と思ふチョークの染みだ服
白百合の白さこころの紋とみる
誠実という文字君のためにあり
もう後へ戻れぬ石を積んでゆく
まだなびく旗あり還暦おもしろし
パレットにまだ赤があり青があり
雲の峰に書けばでっかい僕の句碑

初歩教室

題 — 石 —

阿 萬 萬 的

「日本人の心の隅にはいつも石の地蔵さんの柔和なお顔を求めているのでしょ、うか、石仏の句が圧倒的に多かつたようです。」

石仏の顔によく似た孫の顔

石仏の柔和な顔に孫の顔

(石地藏孫によく似た目鼻だち)

人の目につきにくい石仏の顔やさし

石仏が黙して並ぶ念仏寺

石仏がそれぞれの顔で暮れて行く

(石仏へ夕陽やさしい影つくる)

水掛け不動苔の衣が重くなり

苔むした石仏雪に笑み続け

野仏を包み込んでる里の雪

(遠尾根の雪見てござる道祖神)

石仏に会いたくなくて旅に出る

(さいはての風に耐えてる石仏)

石仏の里をたずねる一人旅

(石仏の里にポツと木守柿)

埋もれて落葉と遊ぶ石の私語

石仏へ真赤な紅葉一葉散り

温子 高代 金子 倫子 輝月 達子 昭子 千鶴夫 保夫 陽子 麻黄

石仏の歴史のドラマみな見てる
水争いの歴史も知ってる石仏)
大野川見下す秋の磨崖仏
(大野川の秋を見下す磨崖仏)
排気ガス昔はよかつた道祖神
故郷の道迷うなと石仏
(Uターンの心へやさし石仏)
石仏の次に多いのは庭の句でした。
一つ一つにも表裏があり顔があるようです。
庭石も表も裏もある置場
庭師にははつきり石の裏表
あの庭は立派な石で生きている
石一つ置いてどうやら庭になり
(石一つ庭のころを引きしめる)
打ち水で虹が輝く庭の石
(打ち水で色よみがえる庭の石)
庭園のとび石に落葉の赤黄色
叡山を借景にする石の庭
これは円通寺のことですかね。
幽玄を秘めて石庭人を知る
思い出は石灯笼が知っている
石灯笼小さな庭に格をつけ
(深編笠に似た灯笼も武家の庭)
石は何にも言わなないが。
注連縄で飾れば石も有難し
拝まされる石も蹴られる石もある
石さえも可愛い石や憎い石
だが石はいつも何かを教えてください。
何日迄も路傍の石でない男

みの子 仙吉郎 サワ子 久留美 庭の石 実男 八太郎 千代女 やすお 孤舟 登美子 千鶴男 陽子 カネよ ちよ 新造 新造 せいでし 悟郎

水枯れて愛を反芻してる石
グイヤモンドグイヤの粉で磨かれる
踏まれても小石無言で耐えている
気まずさを底に沈めて石になる
石けってやはり視線の中にある
やるせない思い小石を投げてみる
末座から投げた小石は無視される
石一つ投げた波紋を聞いて見る
(石投げた波紋にみじめな僕と知る)
荒波に耐えてまあるい愛の石
渓谷の石の丸みに教えられ
そして石橋を叩く句も教訓めいています。
石橋を叩く癖あり出世無理
石橋を叩いて渡る世に疲れ
石橋を叩いてあつさり欺される
石橋を叩いて見たが音たてず
石橋を叩けば浮世渡れない
(石橋を叩いて世間に遅れがち)
石橋が出たついでに石畳の句を拾ってみよう。
石畳と雨と恋と長崎、これでは歌の文句で、私達に訴える力が弱いのでは。
初恋の人と歩いた石畳
征つた日も雨に濡れてた石畳
石畳に雨がよく合う旅の空
だが信心深い方の句も見せてもらいました。
恐んにて

和友 義男 昭治 房子 博子 愛子 春枝 義男 博子 達子 周三 高代 姿洋 仙吉郎 白峰 陽子 草生 円女 松子 温子 輝月

石畳おけら詣りの白い息 章久

石畳一步ふみしめ二步感謝 文子

(お百度一步一歩にある願い) として石畳はそれぞれ四季を感じています

ね 石畳だんだん歴史の道となる 昭子

(秋を知ってる歴史の道の石畳) かさこそと落葉集める石畳 国彰

(落葉カサコソ石畳の道冬になる) 飛び石に歩き慣れない宿の庭 悦子

下五宿の庭を宿の下駄としては如何。 石垣もまた色々感情を誘ってくれます。

小さきは小さきままに穴太積み てる

豊臣の栄枯を語る濠の石 里子

大阪城巨石の裏に隙見つけ 露芳

観光ブーム城の石垣積みなおす 喜与志

石垣の割れ目にささも草の意地 愛子

怨念の混じる積らる城の石 勝美

(怨念も混ぜて積まれる城の石) 停退へ自立の石を積み上げる 実男

石投げ石蹴りは幼い夢につながります。 石蹴りに飽きて夕陽に背を向ける 颯云児

石けりのお下げ揺れてる故郷の夢 麻黄

石蹴りをすれば横町日が暮れる 新造

石蹴って夕焼け小焼けご飯だよ 静子

(石蹴って帰ろう夕焼けきれいだ) 幼な友と石けりもしたこの道で 登美子

(想い出は虹色石けりした小道) 石けりも忘れて塾に居る子供 よし津

(石と遊ぶころに遠く塾通い) 石投げて遊んだ川が消えた故郷 里子

(小石投げた川原今ではダムの底) 此頃見かけられなくなりましたが、漬け物

石は母さんの匂いがするものですね 片隅で漬物石のひとりごと

漬物の石にするにも適不適 歳とりて漬物石もままならず

漬物の石の重みに亡母想う 房子

母の味漬け物が忘れない 悟郎

漬物の石はたしかな母の詩 山久

歴史をさかのぼると必ず石に当るのです。 石器から古代文化の謎をとく

以前には上られていた石舞台 保夫

腰据えた巨石しっかり見守られ ちよ

飛鳥路に神か仏か謎の石 勝美

石はまた人間の不満の固まりかもね。 学歴が喧嘩に石を持たせない

腕白のポツクの石は捨てられぬ 兼治郎

泣かぬ子の涙にぬれて小石の掌 克子

(泣かぬ子の手の中の石濡れていた) 浮かぶ顔も未だ捨てていぬ石礫

身を守る小石を一つ持っている たち

老いの身を路傍の石のように置く 倫子

倦怠期路傍の石を蹴るとばし 白峰

石ではないが石頭の匂もありました。 石頭二代つづいて平和です。 カネ

石頭ながらカラオケ名調子 久留美

石頭財増やしめせず目減りして 洋子

(石頭の老後へ年金目減りして) 石にもいろいろありましてETC。 海岸で拾った石に恋があり

本片手石を相手に留守番日 石段で女性三人かしましく

ライターも所詮昭和の火打石 すりへった軽石今も風呂呂棚に

胆石症見舞い石まで見て帰り 二股の大根うまく石を避け

愛情をかけたら割れた石の口 宇宙の謎秘めて隕石降って来た

褪せて来た墓石の朱色が呼んでいる 落石に注意へどどと雨と風

(落石注意紅葉の溪へつづく道) すり切れたつづ掛け踵に石が入り

懐石の百合根にあわい京の味 せせらろでやまめの恋を誘う石

清流の石も私も春を待つ 南海のロマンを秘めた那智の石

火の中もいとわぬ愛の石を積み 大理石心冷たくなるばかり

寶石の持つ魔力に石榴塾れんとす 宝の持つ魔力に石榴塾れんとす

「花」 2月10日締切(4月号発表) ハガキに5句以内

「技」 3月10日締切(5月号発表) 宛先 〒598

泉佐野市中庄一〇八一九九 阿萬 萬的

家

弘津柳慶選

皮算用ばかりで夢の家を建て
 此の家は歴史が重い鬼瓦
 一つ家に皆別々の城を持ち
 菓子司家紋が語る城下町
 旅疲れとつぶり我が家の湯に浸る
 新しい道新らしい家が建ち
 のら猫が家の美人を誘う夜
 入浴に順番という家風あり
 代替ることに名家の先細り
 家柄を言つてうちに臺が立ち
 赴任して吾が家の茶づけ恋しが
 鍵つ子の母待つ家の灯が点る
 遠からぬとこで新婚別居させ
 2DKせまいながらも一城主
 ふる里の面影消えて家が建ち
 訪問着家に帰って食べ直す
 行割で御殿のような家が建ち
 観光バス停る豪邸歌手の家
 建て込んだ家に海山さえきられ
 家路急ぐ一日無事に終えた足
 嫁が来て家風を若く塗り替える
 住めばそこが家となる身の山頭火

智恵子 重人 満津子 カズエ 克子 元江 理恵 宵明 あやめ やすお 優 主介 義男 敏子 テルミ 正敏 あき 高明 實 軒太郎 雅子

妾宅の社長へ会社から電話
 悪役も家へ帰れば甘いパパ
 しがらみに縛られ家を捨て切れず
 へべれけの足でわが家を間違わず
 濁流に家ごと呑まれる地獄絵図
 味噌汁の匂いわが家の朝が明け
 どことをどう来たか我が家へ帰りつき
 家という格式自由を縛りあげ
 家々にぬくい灯メリークリスマス
 住みなれた家でときどき蹴つますき
 古里に家あり水も澄んで居る
 小さくても我が家東を向いて建ち
 家庭の灯を暗くし痴呆症すむ
 家柄に反旗をふつた子が一人
 ライオンと虎が我が家で待っている
 廃坑の炭住の灯が二つ三つ
 家の灯を全部ともしてめでたい日

七面山 幸一 新造 本蔭棒 多賀子 大柏 久仁於 市朗 どんたく 佳雲 玉恵 弘朗 雄々 成人 みつる 新一郎 明水 よし津 みどり テル 婦美子 たず子 八太郎 雀踊子 悠泉

のん気

軸
 天災へ家のもろさと無力さと

中川幸一選

のん気だが何故か淋しい核家族
 あくびしてきてこれからのながいこと
 姑ののんきに嫁のかるい肩
 大将の器のん気に腰を据え
 こげつかす鍋にのん気な長話
 十二月のん気そうなるベレー帽
 剪定の缺のん気な音がする
 成人式やっぱり父に似たのん気
 長男ののん気へ欲しい渡世術
 気が付けば男盛りはとうに過ぎ
 ぶらり出てぶらりと戻るベレー帽
 鍋洗うのん気な妻のしげさ節
 口あけてのん気に見える里の母
 隠居部屋のん気に見えて淋しいよ
 礼服を脱いでのん気なうちのお茶
 ネットタイの要らぬくらしになって肥え
 三十は過ぎたのん気な一人傘
 のん気にはなれぬ師走に枯葉舞う
 町内の火事も知らずに遠い耳
 生徒から見れば先生のん気そう

志子 静雄 婦美子 可住 圭介 薫風 道子 里風 雄々 裕 宵明 芳子 秀峰 京子 克子 落児 きみえ 規不風 虹汀

腹

吐田公一選

半年でのん気な嫁と認められ
 洪滞で妻のんびりと昼寝する
 よくやったあとはのん気にやりましょう
 軒太楼

公一

湯殿から父の御機嫌のん気です
 みつる

旅の宿みんなの御機嫌のん気節
 テル

警察の報らせがあつて知る空巢
 明水

無雑作に笑えるのん気な俺でいい
 秋峰

年金に命あずけてのんきな日
 どんたく

日溜りで鼻毛抜いてる日曜日
 素身郎

十二月猫のあくびの長いこと
 久仁於

苦労性のん気になれぬ皺の数
 多賀子

定年後のん気が過ぎて早く惚け
 ちかし

知らぬ間に周囲を敵が取り囲み
 七面山

慌ツんな今更愚痴てん仕様がなか
 朴竜

のん気そんな散歩も腰の万歩計
 三五島

これ以上のん気にすれば生き過ぎる
 枯梢

核のこと何とかなるとのん気節
 三和

子のロマンのん気な父も知りたがり
 ふじ枝

外れてもどうとことない予報
 本蔭棒

公園のベンチ呑気に見えますか
 佳雲

窓際でのん気に聞いた社の人事
 優

監督をやめてのん気に解説者
 やすお

のん気には見えて切ない旅役者
 軸

子の寝顔離婚の腹を決めかねる
 腹決めてかかれれば女強くなり
 ゆずらない正論腹にもつている
 結局は腹案が落ちとなる仕掛け
 ロボットに腹を仕組んではならぬ
 まっすぐに来る盃が腹さぐる
 それからの話は腹に納めとく
 ふところの辞表に腹はきめてある
 満腹になれて謀叛を考える
 腹立てた方は借りてた方と知り
 生むと腹決めて女は強くなる
 女には勿体ないよな太っ腹
 親と子で桁の違った腹づもり
 何かある腹と盃見抜いてる

久子
 柳影
 テル
 明水
 与呂志
 どんたく
 テルミ
 鶴汀
 義男

ちかし
 多駄子
 陽子
 七面山
 規不風

山久
 勝美
 秋峰
 雀踊子
 正坊

綾珠
 右近

孤舟
 宵明
 重人
 雀踊子
 紀美女

雄々

ちよ

露児

美穂子

芳子

大柏

千秀

里風

博子

きみえ

本蔭棒

砥代

千恵子

軸

単身赴任賛成して妻の腹

天

煮え返える腹をしずめる妻の酌

地

腹いせに女の見栄を買いあさり

天

軸

単身赴任賛成して妻の腹

柳界展望

集録・板尾岳人

〒956新津局私書箱15号柳都
川柳社

★61年度 花久忌

日・2月11日(祝) PM13時

処・東岳寺(東京都足立区)

営団地下鉄日比谷線・

竹の塚駅西口下車北)

宿題

家 箱守 五柳選

内気 吉田鱗太郎選

喜ぶ 松井 清志選

(投句拝辞)

主催 川柳人協会

★本社同人・参事白岩文衛

氏(岡山県) 1月1日肝臓

癌のため死去。64歳。4日

告別式が行われた。謹悼。

★旧臘12月21日、奈良の稱

念寺において故村上春巳氏

(同人)の三回忌法要と句

会が催され、紫香、雀踊子

笛生、凡九郎、♀女、鬼遊

が参列した。

▽お便り△

■西尾 采主幹祝賀記念大

会特集号を贈って頂きあの

豪華な会は私の生涯に初め

ての終りとなる事でしよう。

(原 独仙)

■とても立派で美しい句宴
だったことを鮮やかに想い
起して、私もそんなときが
来たらと思ったりします。

(去来川巨城)

■記念大会特集号をありが
とうございました。当日の

ご盛会を思い出しています。

(古川 一高)

■記念大会のビデオも拝見

させてもらいたい思い出も新た

に喜んで居ります。

(菅井とも子)

■気力さえ持っていれば：

などと、フル回転していま

したら、その驕りを叱られ

たのか年賀状も書いていな

いううちから発熱がつづきま

した

(八木 千代)

■太田亀甲氏(同人)の句

碑除幕が10月24日横田町運

動公園の入口であり晴天に

恵まれごく内輪ということ

でしたが、喜びを分かちあい

ました。

船通山の稲妻おろち吐く

火と見

亀甲

(西村 早苗)

寒中お見舞い申し上げます

川柳展望

主宰・時実新子

雑詠出句十句

誌代 一年 四、八〇〇円(送料共)

〒563-01 大阪府豊能郡とよの町ときわ台三〇四一七
天根夢草方 川柳展望事務局

電話 〇七二七―三八―一八四五

振替 神戸五一四九七二〇

▽訂正△

■1月号35P「同人吟秀句

鑑賞」下段「美人だったな

あ高かったなあと「日酔」

の作者は山川克子でした。

お詫びして訂正します。

また兼題「太陽」の項、

日照権裁判に勝ち陽は射さ

の「私の一句」を次のとお

り訂正します。
「立ち消えの線路が錆びた
まますく」

追補いたします。

本社 一月句会

一月七日(火) 午後六時

メンズファツションセンター

新春早々、白岩文衛氏の計報届く。また一人かけがえのない人をなくした。黙禱を捧げご冥福を祈る。

一年最初のおはなしは阿萬萬の氏。テーマは「庭」。日本における庭園のはじまりは飛鳥時代に遡り、以来、それぞれの時代に仏教思想の影響等を受けて多くの名園が作られた。西洋と比較して日本の庭の特徴は、庭を作るという作為が見えないところにある。

「枯山水」というのは、もと「仮山水」と言つたらしい。水があれば影を映し、水には音があり修行の邪魔になる、深山の雰囲気で修行するため水を排した、という。また大徳寺、南禅寺、竜安寺の三名園の配置にも政略が考慮されていたというのも興味深かった。

呼名賞は小西幹齊、田中隆二、奥田みつ子の三氏。

月間賞は梅原憲祐氏が獲得。
(進行：天笑) (受付：年代・冬葉)

(記録：射月芳・健司・山久)

出席者：鬼遊・笛生・紫香・凡九郎・武庫坊・年代・重人・薫風・紀雄・庸佑・三男・池田寿美子・季柳・一郎・勝晴・白浜子・杜的・喜風・隆二・千代三・水客・小路・射月芳・勝美・冬葉・章久・春蘭・三十四・三郎みつ子・照子・はつ絵・作二郎・蕉露・英王子・柳影・幸・太茂津・狸村・みつる・狂虎正坊・メ女・たつお・幹齊・萬的・吐来・安藤寿美子・月子・天笑・山久・愛論・甘平・柳宏子・栞・形水・東雲・白兔・悦郎・敏・史好・泰子・文秋・寿美・吸江・規不風・晴風・あいき・度・楓楽・憲祐・一二三・美幸柳伸・健司・智子・頂留子・岳人・雀踊子・猪突・元紀・寿子・美代子

席題「夢」

高橋白兔選

手も足もふるえて夢の続きかな
かなわぬがせめて夢にはいい女
夢幾つ見ればあなたに会えますか
夢を描く余白を少し空けておく
夢の中間も男は背を向ける
きつといい夢を見ている子の寝顔
妻に言えぬ夢もたんまにはよし
夢語るいよいよ青い空の色
逆夢にしよう惚れられる事がない
夢のような言葉にすぐ騙される
人妻とすこし危ない夢を見る

健司 美代子 隆二 智子 鬼遊 笛生 杜的 頂留子 雀踊子 千代三 たつお

内ポケットに札束のある夢で酔い
夢ばかり書かれて絵馬が風にゆれ
初夢に妻が俺より五ツ上
夢のない話を聞いているオーム
なまじ夢なんか見るから気が重い
夢の通りに歩いて行った落し穴
夢の中鬼と喧嘩をして別れ
夢走る北風の空まっすぐに
夢にしてくれとはむこい事を言う
夢はいけずでいつも奈落でさまされる
王様の夢はおでんを食べている
少し気障っぽい男が夢を売りに来る
男と女の夢が折り合う置炬燵
マゼランの夢が地図から消えている
初夢に太鼓を買って来た男
マア夢やけどナアそれからのはなし
牽制球らしい亡妻が時々夢に出る
男のくせに夢をぐもっているという
智恵遅れの子が追う夢は風の色
夢捨てた女ひとりの皿を盛る
夢一つ抱いて真冬の風の中
時代屋のランプも夢を見るだろう
夢のつづきに切ってみる虎のヒゲ
悪夢は妻を貫つてから続き
夢ばかり追つて鏡は閉じたまま
おかがみの白さにでかい夢がある
夢は夢とはつきり知っている男
單身赴任枕一つの寒い夢
たてがみが寒い卑弥呼の夢を見る

小路 健司 小路 月子 美代子 太茂津 岳人 美幸 雀踊子 度 幹齊 年代 憲祐 元紀 岳人 凡九郎 三男 安藤寿美子 萬的 正坊 月子 作二郎 健司 千代三 月子 天笑 吐来 憲祐 作一郎

奇数になつて夫婦の独楽が軋みだす
 齢の数わたしを利口にしてくれぬ
 万分の一にも足りぬ赦す数
 キリストの弟子は数えぬ方がよい
 失恋の数は忘れたこととする
 ゼロの数読むと寒さが身にしみる
 ひっきりなしに氷河へ走る貨車の数
 得意不得手が居つてフランスとれる数
 員数外だから言いたいことが言え
 数々のつぼみが耐える氷点下
 四捨五入その四を溜めて春遠し
 女を泣かせた罪の数は忘れとく
 物の数やないんやとは思つけど
 口数が少なくなつて冬の雨
 賛成をする破目になる多数決
 今年来る数が気になる渡り鳥
 十二弟子の逃げたひとりにユダがいた
 善人が必死に生きた嘘の数
 海に降る雪島に殉死の墓いくつ
 年賀状の数が少しずつ増える
 愛の礫は数限りなし冬の旅
 数ならぬ身の盃を返しとく
 善人の一人を泣かす多数決
 恋をした数がおんなの艶になる
 数の中に入れて貰へぬ部下になる
 多数派の一人となつてよく眠り
 からす瓜数のひとつは喋りすぎ
 皿の数ときに男を試される
 年の数だけ上手に石が積めるかな

悦 幸 楓 幸 元 紀 美 津 太 楓 白 文 三 英 是 雀 凡 隆 美 鬼 幹 吐 作 智 太 水 鬼 滋 史 作 鬼 幸
 郎 幸 紀 津 楽 幸 幸 秋 王 子 踊 九 二 代 遊 齊 来 一 子 茂 客 遊 雀 好 郎 遊

兼題「緑」

里 小路選

限らない緑へ軽くベダル踏む
 緑いっぱい自然が選つてきたしらせ
 ほつとする位置に緑が置いてある
 心から緑が消えてゆく焦り
 寒風をじつところらえている緑地
 開発の波故郷の緑消す
 故里の緑は今もあたたかい
 天と地の恵みへ緑の四季がある
 歴史めく石燈籠の緑苔
 緑が亡ぶと困るので土を耕やす
 鮮やかな茶筌にまつたり出る緑
 地球儀の緑の消える日を案じ
 松の木の緑毅然と冬の庭
 豪邸の緑の中で病んでいる
 歌麿の絵になる緑の髪に会う
 アラビヤに緑を誇る人がいる
 カラスの森の緑に彩がかけている
 寝転んでみたい芝生にあるみどり
 アフリカの緑に葉の詩がある
 目覚めさわやか葉緑素が匂う
 大阪に緑が足りぬ鳥瞰図
 路端の緑が春を主張する
 野仏は黙し新緑の里に座す
 メルヘンの緑に安らぎを貰う
 風みどり忘れた人を連れてくる
 マンションのみどり五階の風に慣れ
 昨日は緑だった男とおんな

白 柳 智 三 武 庸 柳 秋 博 白 形 照 隆 幹 照 池 幹 紫 甘 史 猪 紀 秋 杜 隆 元 健
 漢 宏 子 男 庫 佑 影 峰 子 兔 水 子 二 齊 美 香 香 好 平 突 雄 峰 的 二 紀 司

兼題「盛る」

笠原吸江選

セザンヌの緑は冬に黄昏る
 消えてゆく緑に地球病んでいる
 すっぽんぼんになって緑の風を待つ
 エメラルド母の好んだ色を抱く
 銀世界麦の緑はもう息吹れぬ
 地球から緑が消えるかも知れぬ
 七草の箸が懐古を繰り返す
 緑一杯の視野に飛び出せない過保護
 フレームの中で緑が欺される
 ベランダへ精一杯に置く緑
 造成のカンバス緑の地図が無い
 ビニールの緑に騙されまいとする
 みどりの好きな人から枯れない和を貰う
 ほつとする緑があつてうちが好き

元 柳 妻 美 子 美 柳 萬 的 耕 健 小 智 どん 滋 雀 路
 紀 影 客 子 子 伸 的 花 司 路

『夜市川柳』募集

第9回 「嫁」 田中好啓選 締切 2月28日

第10回 「自分」 大坂形水選 締切 3月31日

投句先 〒593 堺市場上緑町二一九一

河内天笑方

堺川柳会

老地神壇

締切毎月25日。必ず原稿用紙使用のこと。
作品は雅号も含めて20字まで。

担当・清水健司

打吹川柳会

奥谷

弘明報

垣植への茶つみした日を思い出し
除口も茶漬けさらさら受け流し
一服のお茶にもこもる真心よ
茶柱が立つて縁起を又かつぎ
温い風お茶一杯でまねき込む
粗茶だがと寒い夕の般若湯
茶話会で昔話に咲いた花
琴の音が流れ植木屋茶をよばれ
心配を飲み込むように茶をすすり
古い二人生きるあかしの茶をすする
母が摘んだ番茶が一番口に合う
六十路来てやっと夫婦のお茶の味
長話二番煎じのお茶のみ
やるだけはやっつて和やかな茶としよう
人知れず折る茶断ちを胸で決め
茶をすすりいざ出陣の鎧着る
茶をにこし急場をかばう妻の知恵
湯ききる愛を潤す茶を入れる
茶の道は一期一会と教えられ

打吹川柳会

奥谷

弘明報

犯人の身元洗いに遠慮なく
耕耘機洗う手許が弱く見え
人並に顔を洗った二日酔
麻雀の手だけ洗わず足洗え
洗うほど手織りの値うち粘り
核ボタン押した汚れは洗えない
神詣心身共に洗われ
岩清水こころの中まで洗われる
握手し洗うに惜しい温もりよ
停年か首を洗って覚悟する
足の泥洗って検束から逃れ
やくざから足を洗って真人間
歎は手で洗えといった父徳び
帰らない過去は洗えぬしみばかり
追いはぎの様にぬがせて洗うてくれ
叙歎沙汰その前歴が洗われる
思惑を洗い落して妥協する
今日生きて今日一日の手を洗う
しみじみと心を洗うお人柄

城北川柳会

神夏磯道子報

高代 孝美 菊枝 文子 美智子 寿満湖 道子 早苗 吉朗 紫映 亮二 柳風 善政 佳女 弘生 規仔 弘朗 静歩 静美 寿美礼 晃世 悟郎 倫子 悠子 芙久枝 満津子 正之

産湯使う赤子に神をふと思つ
溢れ湯が山峡の街川面にも
秋日和電話の相手皆んな留守
薬風呂湯の香はのはの身もさやか
でかい灸病のつらさに此の我慢
薄謝と書いて重たい義理包む
我慢した涙は人に見せず拭く
名工の焼いた湯呑は客用に
半生の我慢に耐えて老いの辛
新婚へこっちも負けぬフルムーン
親子の対話はずんで居る湯舟
又出ると思いがらも取る白髪
一泊の旅に名残りの湯の煙
好きな酒家族の為に我慢する
我慢した涙蛇口に盗まれる
誇大チラシ裏は店主の長い舌
トラフイバー湯気立っている外野席
惚れて居た心を月に覗かれる
湯煙の音から朝が動き出す
冬近く甚平縫う手のもどかしさ
妻の持つ射程距離は守っとく
青春の過去に浸るも独り酒
ぬるま湯の中で決断下せない
カメラ狂子の成長を見落とさず
次の世を託す宝の妊婦服
道問えば向うも同じ寺社めぐり
我慢して今年も松茸いっだけ
全山紅葉走るに惜しいいろは坂
川柳サークル卵の花 辻

千世子 白峰 ふみ 悦子 八重 婦美子 右近 綾珠 繁子 公一 山久 佐津乃 新一郎 午郎 テルミ 頼一 温生 弘風 泰世 カネ 喜代子 道子 圭介 登志代 星斗 亀男 仙吉郎 白溪子報 悦子 良太

税務署が来て口下手の肩がこる
 手の触れた肩から慕情よみがえる
 肩章が戦友会に生きている
 年老いて母のさみしくうすい肩
 人柄が肩書の無い名刺持つ
 担当医と妻の気になる立話
 国訛り懐しく聞く立話
 立話犬の鎖にまきつつかれ
 人事異動気になる廊下の立話
 お刺身の鮮度気になる立話
 立話では済ませられ頼み事
 立話から知ったあそこの夫婦仲
 聞き上手荷物が重い立話
 立話落葉を掃いている筈
 立話きのう離婚をした女
 立話ねこが死んだの生まれたの
 ビーポーが停って夜警あわててる
 般若経思わず唱えている夜警
 鍵の音させて夜警が戻つて来
 巡回を済ませ蜜柑をむく夜警
 だらしない女と夜警すれ違い
 夜警まだ馴れないままに着ぶくれる
 千鳥足夜警にひよいとお辞儀する
 夜警まず金庫の無事をたしかめる
 お月様と夜警はとても仲がよい
 万両の実が赤くなり冬の天
 座布団につまずく様な齢になり
 木枯らしが日課にさせる落葉掃き
 欠点がないので嫁に貰わない

勝一年代 一 杜的 享子 志津 逸 松川芳子 風云児 佐代子 明子 暢子 勢鬼 如淵 和友 鬼遊 求芽 スミ子 陽露子 とおる 眉水 房江 静江 秀男 白浜子 森中恵美子 高子 梅風 よ志子 紫香

秋の蝶吹かるるままも今日一日
 拝観料ややこしおすなあ京の秋
 恐いもの見たさに開ける釜の蓋
 戒名で拜めば夫も他人めき
 さだまきし遠い渚の音になる
 もぐら叩きへ叩かれ上手な首のバネ
 西宮北口川柳会 奥田みつ子報
 正月に帰ると壁に話しかけ
 志功描く壁に飽食の女がいる
 壁一重向こうで恐いこと起きる
 も一人の私を責める白い壁
 壁ばかりにらんで彼を待っている
 壁の落書き漫画の好きな子が育ち
 壁の向こうにくつついて鬼の耳
 銀行の数えた札を読み直し
 良心を売る札束に責められる
 改札機黙ってスリは通り抜け
 免許証へたたくて入れてあるお札
 札束を抱くと無口になりたがる
 人間になじめばお札もしわがより
 胎動をたしかに受けてふとん縫う
 発育の手足がぬつと出るふとん
 うたた寝を誘う童話のこたつ掛け
 居眠りへ布団を敷くと目をさます
 紫のふとんで米寿の母祝う
 宿ぶとん肌になじまず空白む
 羽ぶとん明治の母に軽すぎる
 瘦せても重い布団がいいと老母
 接点にいっぱい溜めである想い
 いっぱいの酔いがおくれ毛かき上げる
 窓いっぱい蛸乾してある海の家

春蘭 鼓城 笠嶋恵美子 花代子 水客 河瀬芳子 保蔵 和友 はつ絵 君子 千世子 武庫坊 白浜子 園歩 しげお 静子 郁栄 め女 いわゑ 寿馬 幽香 春子 好江 よし津 一郎 求芽 美智子 杜的

太陽にかしわ手老父の朝が明け
 団地族夕餉の匂いに軽い見栄
 女酔う部屋いっぱいをバラにして
 母の忌に集う障子が陽がいっぱい
 吊るし柿いっぱい思ふ紙吹雪
 くす玉に詰まった夢の紙吹雪
 双方の風邪のはなしをひとしきり
 出稼ぎの靴子の夢つめてある
 風やんでからは人間らしくなる
 七色の若さいっぱいレオタード
 木の葉まで札に見えます十二月
 土蔵の壁はいつも暗くて泣きに来る
 伎芸天冬の情けを抱いている
 書き上げて部屋いっぱい年賀状
 掛け声の中から漏れる老いの詩
 壁を背に立たされ強くなる私
 ドアチェーンそして女の物思い
 ふる里へ心が踊る年の暮れ
 札束を鍵に裏門こし開ける
 札束で人のいのちを買いにくる
 兄嫁に借りるとぬくいぬくい金
 つややかな肌が気になる僕の妻
 札束を握ると旅に出たくなる
 紙切れのように札とぶ兜町
 春の芽を残し悔いなく散る落葉
 札束を拾うところで目が覚める
 札束の静けさにある黒い霧
 この愛は月の光で育てます
 らくがきの無い白壁はよそよそし
 ふる里に造り酒屋の壁がある

光代 紀雄 正一 てる 照子 礼子 年代 冬子 嘉矩 伊三郎 水声 正坊 歌子 百合子 千秀 米朝 右近 枯梢 山久 山手 良征 靖子 志津 新造 静江 博子 まさお 紫香 岸和田川柳会 植山 武助報

あんさんも好きでつしやろと出す小指
 姑の好きな和菓子京みやげ
 おばあちゃん好きといわせるお年玉
 長かったクラフが語る闘病史
 裏紅葉柳生の里に名残り惜し
 出稼ぎがそは降る雨の村を出る
 消され行く唱歌へじんと迫るもの
 コーラスに出掛ける妻のあでやかさ
 犬好きで犬を飼わない犬の墓
 木枯しに必死にすがる柿の赤
 裏街のネオン一文字欠けたまま
 寡婦の意地涙は他人に見せられぬ
 肖像画の父へ答えのほしい夜
 偽物の方がきれいな浮世絵で
 正論を吐くとき赤い血が流れ
 やけ酒の味は知らない凡夫です
 結婚の二人揃いの赤いシャツ

岸和田川柳会

植山

相打ちのする正体がかまれず
 正体はおきつね様をまつる森
 正体を知って友情遠くなる
 無影灯すべては神にまかせてる
 落ちのない落語のような夫婦です
 その穴を覗いて見たい列に入る
 托鉢の素足にこもる無のころろ
 背を丸め私一人の詩がある
 愚痴貯める穴は大きく掘っておく
 粒よりの栗ころろと秋を食べ
 粒選りのクラスにもいたいじめつこ
 一粒の種が根強く明日に生き
 包丁研いでこいさんに首つたけ

火の様な女一押し待っている
 判一つ押しして窓際夕暮れる
 離婚印押ししてと妻にせがまれる
 北風に押されて許り寡婦の日々
 大粒の涙で少女抗議する
 うみなり川柳会
 健康美びちびち若い血がたぎる
 逆風をわかせる人だから慕う
 美しき過去アルバムに伏せておき
 追憶の手折らぬ花が美しい
 肉親を慕う故国に応答なし
 白の空間流れる墨の美しさ
 ここはもう男に任す風のむき
 足元の花に素朴な美をもらう
 慕う児も逆らう児もない草に付つ
 有終の美はまっ白に塗り替える
 家計簿を任せ嫁の座強くなり
 面影を臉の裏に酔うている
 美しい言葉の裏に針を秘め
 汗をした男の肌が美しい
 息ビタリ合って華麗な技が熟れ
 青空へ園児素直な美をえがく
 酒下げて恩師と云うて慕いくる
 灯明をつけて亡夫と語り合い
 おそ咲きの花へ蝶々が乱舞する
 のろまだが亀の歩幅に任せるとき
 叩きあげ任せれるが苦手です
 お遍路に慕われ春の仏たち
 美しい嘘が重たい金メッキ
 若き日の大阪慕うた土根性
 日めくりのめくらぬ月日美しい

甘平 射月芳 操子 幸代
 熊生報 八重子 はるお くに穂 一穂 英治 蜜
 日枝子 宣子 おさむ 草人 希満子 舟宏 銀嶺 天人 雅女 華子 一止 芳泉 富美湖 雄雀 天雀 豊生 静生 貞山 葉士人

見栄捨てて働く汗が美しい
 東大阪川柳同好会 斉藤三十四報
 霜柱踏んで声高登校道
 吐く息も弾みジョギング霜を踏み
 霜やけのつらさも知ったアルバイト
 霜の朝真すぐ昇っている煙
 文化論素焼きの壺を撫でながら
 文化人自負頭髪の伸びるまま
 文化とは盛り沢山のゴミの山
 土師須恵器古墳文化をしゃべりだす
 文化論たなきあつてるなわのれん
 内の粗文化包丁より知らず
 文化賞授けて友から遠ざかり
 ささやかな文化心の詩を残し
 熊生 雅風 良京 美子 勝美 曲ん手 右近 山久 度 頂留子 眉水 覚然坊 喜風

佳句地10選 (前月号から)

奥谷弘朗選

駅に来て男の方が煮え切らず 月子
 機の熱すまでは腰など上げぬボス 柳宏子
 にんげんに疲れた細い影法師 幸
 陸橋を渡り慣れたる街の犬 鬼遊
 豊かさに溺れてならぬ子を訓し 芳子
 浮き沈み人生双六泣き笑い 千恵子
 見抜いても開けてはならぬ玉手箱 俊平
 菊が咲く育てた人を偲べとや 薫風
 生きざまを包まず話す声の張り みつ子
 ある時の影が味方の顔をする 女

文化人らしく本屋の虫となり
ばろを着て花街を歩く文化人
文化財となると想像眺められ
ロケットに職を取ら像という文化
野次馬が掘り出して来た文化財
文化勲章貰うてやりたい馬の足
京文化税金の泥かぶせられ
風船が割れてちいさな悔いとなる

駒つなぎ川柳会 里

小路報

看護人の風邪病人の舌借りる
雲行きへ予感鋭い風見鶏
あきらめて帰れば路地の灯がぬくい
合奏の琴から繰れば持ち込まれ
さあそこがそうそうそれが油断なの
宿の膳秋の味覚が盛つてある
くもゆきの悪い課長を見ぬように
初恋だけれど経済力が無い
同居せぬひとり娘を持つ悩み
達人は風の音にも油断せず
ゆつくりと味覚に浸るフルムーン
くもゆきの儘に動いてミスばかり
あきらめた愛が鏡の中にある
娘も居ることだ深酒慎しもう
王様も油断足元から崩れ
宅急便秋の味覚は母の手で
くもゆきを見てあいまいな返事する
あきらめて母はひとり灯を点す
近所からマークされてる娘が一人
油断なり妻が叛旗を翻す
出たものは残さず食べて味音痴
くもゆきが変つたポケットベルが鳴る

春 蘭
滋 啓
弘 生
雀 踊子
三十四
柳 宏子
みつ子
湖 風
松 生
柳 影
覺 然坊
凡 九郎
素 斗
雀 踊子
外 吉
曲 ん手
頂 留子
真 砂
国 公
文 秋
喜 風
美 津枝
天 笑
寿 美
智 子
翠 公
壯 之助
重 人

あきらめた日から日記は白いまま
よく嫁が娘は親の手に余り
油断から勝利の女神向えを変え
食へる物皆おいしくて鱈雲
くもゆきはどうかあろうとも正義感
あきらめたその夜の長いひとり言
糸はんのデート取り持つ攻橋
思春期の森に油断が置いてある
値を聞いて味覚どころか手も出せず
雲ゆきをじつとつかう秋桜
娘を抜ける影を母親選つてい
間の抜けた顔で油断のない男
君となら鱈も鯛の味がする
あきらめて寝る子へぬくいぬいぐるみ
あきらめて次の彼女を探そうか
眼に入れて痛くない娘にそむかれる
くもゆきに下手なユーモア捨てて寝る
にた川柳会 西村 早苗報

千代三
幸 治
庸 佑
柳 右子
花 仔
美 代
善 信
白 兔
柳 宏子
あ おい
月 子
甘 平
浩 一郎
信 治
恒 明
柳 伸
小 路
登 美也
寿 美子
孝 華
独 仙
千 草
龜 甲
多 賀子
幸 一
景 子
夢 醉
裕 子

鍋を選る日がついに来た午後の冷え
辛抱と努力が実る今日の幸
止り木で味方にしたい説開く
真白な嘘が盛られたケーキ皿
小春日が続いた後が気にかかる
七五三祝いの服が大きすぎ
モデル地区防犯ベルが欠伸する
誘われて踊る女の背が高い
川柳わかやま 堀端 三男報

紫 叻
弘 朗
雄 々
雀 踊子
愚 童
雪 子
鉄 花人
早 苗
正 香
紫 香
太 茂津
桂 幸
武 雄
綠 良
公 子
萬 的
紀 久子
康 勝
克 勝
登 志代
忠 代
稚 代
栄 美子
寿 子
三 千代
千 代
紀 美女
柳 宏子
信 秋

穏やかな君の苦勞を知っている
押し入れへつめた苦勞を捨て切れず
お陰様苦勞に感謝出来ませるか
顔色に出さぬ苦勞を母が持つ
苦勞したねと心の丸さ計られる
忘れたと笑う顔から苦勞読む
ただ生きるだけの苦勞へ風が鳴る
早起きの苦勞が庭で咲いている
買つてする苦勞で人の幅ができ

川柳高知

川竹

松風報

去る者は日々疎くなる秋の雲
にやにやと来た悪友へ妻の勤
小半日粘つて女柄を選び
珍客が忘れた過去をつれてくる
中継を設けてわが家へ重い足
身の程を知つて気楽に世を過ごし
親のエゴ箱入りにして背かれる
行員に街の景氣を聞いてみる
銀行もやはり弱者を斬り捨てる
銀行のカメラわたしを覗んでる
真実の笑顔ダルマの目が二つ
戻れない道を歩いている吐息
家計簿に記入はしない赤い羽根
幸せは今飲んでいる酒の味

堺川柳会

河内

月子報

久子
きみ
凡九郎
ゞ女
千寿子
光代
狂虎
照子
三男
みどり
千鳥
菊野
幸泉
登舟
弘生
竹萌
佳風
三吉
朱坊
かず子
松功
松風
天風
半銭
あかり
かりん
五月
小雪

どたん場で彼の値打が試される
よい夢の続きを見よう寅の春
まだ彼に相談出来ぬ事もある
カレンダー逢う日はつちり二重丸
除夜の鐘ご苦勞でしたカレンダー
カレンダー覗く間もない年の暮
さざんかへ淋しがり屋の父帰る
四十七士の勤が冴えてた山と川
元旦の寝込みを襲うお年玉
地に足がつかずときめくカレンダー
一本の傘で帰つて来た夫婦
日めくりもきつちりめくり病んでいる
元日に本家で飲んで酔いつぶれ
元旦に指切りをする花時計
彼と居るひととき朱いバラになる
祝膳すんで元旦寝るとする
元旦は女を褒めることにする
初詣すませた頃に日が昇る
もう後へ帰れない橋渡り切る
昼と夜こんなにならぬ彼が好き
日めくりの旧暦を見て種を播き
カレンダー去年の釘へ掛けて春
勘違い話がひとり歩きする
野良犬も勝手が違うお元日

わかあゆ川柳会

小砂

白汀報

芳水
秋風
克子
山久
曲ん手
妻子
夢成
元紀
外吉
浩一郎
素灯
甘平
真柳
金三郎
楓楽
凡九郎
柳伸
柳宏子
紀美女
千万子
東雲
笑痴
一二三
天笑
翠星
志保
三和
侑正
秀穂
ヒデ子

助手席で出かかる欠伸かみころし
つながれて欠伸しているブルドッグ
特等は我流で曲げた枝の先
我流だが朝な夕なのお経あげ
吸い込まれそうなかバの大欠伸
草に寝て誰はばからぬ大欠伸
胃袋も見えそう犬の大欠伸
欠伸して背筋伸ばしている独り
六十年我流通りした指の節
我流のストリーになる花の種
天皇の欠伸見ていた群雀
ポケットベルときが何だと思えども
川柳しんぐう
川上 溪水報
敗戦の歴史の傷は癒えぬまま
家系図を辿れば庄屋のなれの果て
歴史など繕きこころ遊ばせる
青空へ歴史を語る天主閣
権力にしばしば歴史曲げられる
タイエット人の視線がある限り
肥りたい身体へタイエットしてますか
タイエット無駄だと思つ人もやり
タイエット中を石焼きいも笛
タイエット三食昼寝が邪魔になり
駐車違反妻に言えない場所であり
駐車違反婦人警官鬼に見え
走った迂闊を狙つねずらえ
捕まつた事が不運という違反
ちよつとした違反で舌のび首ちぢみ
相手校の校歌へスイッチ切りに立つ
呆けかけた頭にスイッチ付けてみる
火葬場の点火スイッチ押す別れ

世似
かつ子
悦良
英子
笑子
鈴江
歳栄
清泉
惠美子
はるみ
白汀
利次
白光子
登紀夫
金太
富子
まさ子
平和
幸
白峰
えつこ
豊み
豊声
輝子
さかゑ
十郎
国彰
大輪

スイッチで一番こわい核ボタン
ロボットの弱味はスイッチ付いてあり
石見川柳会 中川 幸一報

口実の背中に痛い矢が刺さる
年毎に比重が軽くなる実家
人並な仕度で欲しい真婦の汗
一枚の名刺に素顔すんでいる
あの時の損が薬で家が建ち

地図にない小さき我が家を城に生き
硝煙が何処かで残る世界地図
小さき酒に舌で特級すばり出し
舌先で稼いだ金が身につかず
舌打ちをして子の何か不足らし

それとなく老母は浄土へ旅仕度
言い訳を聞けば聞くほど腹が立ち
出不精によい口実の雨となり
口実が雨に濡れてる曲り角
のびのびと眠る実家の古畳

どの子へも実家の軒で乾く柿
この齢で実家の恩を借りたまま
有名な人の実家や秋の里
今日も又素顔を捨てて灯に生きる
ネオン街素顔を捨てた人が生き

報われぬ歳暮とも思う品定め
お歳暮の子算をはじく妻の指
肩書を脱げば歳暮の数も減る
里の味生きた歳暮の芽が伸びる
損をした顔で儲けている五玉

損をして心で徳を掴む椅子
左遷地へ少しよこれた地図がある
絵のよ々な女の素顔こそ女

小六佳菜子 溪水 幸一報 佐吉 木耳 美磯 寿子 よし子 微笑 幸一 梅子 弁治郎 為一郎 房子 俊信 勝子 夢酔 純子 ちかし 裕 昭二 肇 三和 功 秋峰 巡歩

子が二人出来て実家の殻をぬぎ
七人の敵へ素顔を振り分ける
南大阪川柳会 中川 滋穂子
田秀子 智恵

妻と娘の内緒へ知らん顔をする
右の耳の内緒話を聞きたがる
内緒だと言えば噂にしてくれる
額落ちて内緒も一緒に落ちてくる
知らぬ間に独り歩きをした内緒

思い出が小石一つを重くする
好きな女の嘘は内緒にしておこう
バイトして失業保険の怖い窓
内緒なら口止料と手を広げ
気がばらも心憎さも茶の熱さ

憎まれる役が重たい靴すべり
憎い男のバズルが解けぬ昼下り
憎めない小さい嘘はきいてやる
もう一度憎いと言うてはしかった
憎いのはその気にさせた甘い口

憎しみか愛か未練の灯は消えず
憎まれても承知で金は残すもの
心まで盗む貴方を憎めない
爪を塗る女に嘘が見えはじめ
四天王寺朱塗り門の門がまた一つ

カラフルな作業衣着ているペンキ塗り
血塗られた古城に今は枯葉舞う
自画像を塗り潰して一人部屋
塗り替えて塀が無口になりました
権力者時には金で塗りつぶす

口紅をこっそり塗った日の少女
物指しを替えればみんな値打もつ
金でしか計れぬ値打ちに腹が立つ

雀踊子 智恵 凡子 庸佑 弘生 曲ん手 雅風 晴風 白兎 重人 信治 慶三 千梢 頂留子 春蘭 しんじ 山久 千里 善信 勝美 章久 公一 寿美 ハル子 柳伸 楓 隆二

勲章の値打も錆びた兵の墓
値打ちある物を三文で売る落ち目
私の値打は夫が出持っている
私孫の為に値打ち出る土地買って置く
曼珠沙華恋にのぼせた日の報い

のぼせてる二人に式が遠すぎる
有頂天になって足許すくわれる
のぼせてた女は今の妻でない
のぼせから醒めた手紙が置いてある
程々とまた言われているのぼせてる

菜の花句会 高杉 鬼遊報 優
手袋の握手に心冷えてる
嫁が袋でホツトな空気にしてくれる
風邪一つ引かぬ男で出世せず
絹手袋ロビーの嘘は華やかに

わんぱくに避難させてる植木鉢
寒いからする手袋ではなさそうなる
新薬といたちごっここの流行り風邪
ポーナスが出るとホツトな家になる
手袋の先はいらぬ父の職

風邪が早い一枚着込んで宮仕え
菊花展百鉢枯れて冬が来る
誘惑に負けぬ軍手が干してある
忘年会の誘いに風邪がとんで逃げ
鉢ひとつ割って木枯通りすぎ

鉢ひとつ割って木枯通りすぎ
風邪秘めて女は赤い花を買って
凍りつく言葉は魔女が小出しする
国境にホットタイムが欲しい兵
受話器の向うも風邪をひいている

約束をうつつして凍る水たまり
植木鉢となりの猫が憎くなる

滋 然坊 綾 珠 洋子 久子 柳宏子 文秋 節子 凡九郎 昭子 蕉露 頂留子 凡九郎 射月芳 みつる 冬葉 勝美 春蘭 郁栄 三男 健司 悦郎 柳伸 美幸 雀踊子 鬼遊

借りられぬ夜は靴音まで凍る

川柳塔唐津支部

久保

幸生

馬面の男馬面振返り

まだ計報来ない何処かで翔んでいる

例により罪はお酒が着てくれる

上役が無理矢理連れてく見合先

豆好きな鬼で我が家を離れない

信じてた愛が突然霧の中

無資源の国でお料理多すぎる

家中の灯りをつけて祝い歌

かくれんぼおながとおくであそんでる 六歳かおり

家系図はいらぬ先祖に俺がなる

川柳化粧檜

植村客遊子報

神棚に明治が残る故里の家

約束をもう忘れてる秋の風

栗貰いとなり女の国を知り

新天守選の重荷を背に感じ

明日の米磨く幸せに気が付かず

菊の香が薫る新居で酌む銘酒

忙しい職で若さを取り戻し

万歩計たしかめ風呂の湯があふれ

ひとり旅銚子二本をもてあます

秋茄子を上手に焚いた母しのぶ

かき舟が恋しくなった霜の朝

荒城の月思ひ出す城の跡

欲しいと言われなかつた母子家庭

風呂吹きは一切れてよいコップ酒

ボケットのベルが知らせるテートの場

串カツで事足る僕のコップ酒

義理固い菊短かくも時期に咲く

正敏

高明

あき

四郎

今子

虹江

朴竜

邦子

多駄子

実

正敏

岳詩

実男

大鷹

葉香

紅月

秋月

越山

礎石

悲子

みつこ

サワ子

とし

輝月

永楽

孝榮

竜子

瀝風

翔んでいる女で苦手な家事雑事

豊年の稲穂一粒噛みしめる

年金で好きな旅する幸思ッ

女坂ラストチャンスを燃え盛る

京都塔の会

松川

峰はもう雪です信濃の道祖神

峰の月人の心が見えてくる

あの峰を越えれば少し楽になる

謎秘めて峰は人間拒んでる

峰いくつ越えても日本平和です

六甲の峰はふぶいているらしい

ヤッホーの声はね返る峰仰ぐ

山の峰越すと風船気が弛み

峰の雲故郷の夢がふと胸に

一幅の南画のような峰の雲

柿の木とひと刻朝を鳥の声

亡父植えし柿も喪にふし空は青

干し柿のへたのくぼみに言訳が

不細工でもうまいぞ内で穫れた柿

後継ぎの居ない農家に柿実る

下積みで耐えた男の力こぶ

子を亡くし女の詩は石を積む

アンケート粗品どっさり積んである

柿みれば遠い田舎に父がいる

種なれば柿は不信を抱かぬ子

道端で買えば都会柿を添えてくれ

手土産の柿を都合へ持ち帰る

さんま焼く風の匂いに柿熟れる

繁栄の夢は語らず穴太衆積

回峰も籠山も比叡の僧の行

みね子

まさ子

和子

客遊子

杜的報

萬的

水客

芳子

白漢子

年代

明代

飛鳥

笛珠

孝江

園歩

美穂

眉栄

紫香

笑女

かすみ

メ女

巨詩

ささる

弘生

敏正

静江

杜的

逸子

精進料理ここの門跡の味で食べ

参籠の話に冬の鞭受ける

幸福列車に積残された人生譜

ピラミッド蟻が登って帰らない

桃太郎虎の禊積み残し

下積みの父へ茶の間の灯が温い

迷って来た小鳥へ青い菫を買

黒を着る友の長身見ている

湯豆腐をつつく嵯峨野は通り雨

ゆく秋と大事の労りじんたくる

数言あけて半分読んだ気にさせる

積みあけて半分読んだ気にさせる

川柳ささやま

脇田

親切なつもり哀しい嘘を言う

ライバルの親切まさかとは思

親切が過ぎると女考える

小さくとも今日の親切明日の花

文化祭器用に勝る努力賞

五線譜を器用な指で弾にする

傑作へ器用な二字が冷たすぎ

趣味いかし器用も手伝う老いの職

神前で離婚の予約して居らず

予約したように霜枯れ持病出る

子約席となりの女誰を待つ

命日の母にも届け豆ご飯

豆まきを恐れぬ鬼がいて困る

黒豆へ丹波富士から霧が晴れ

川柳たけはら

あねもうちからをあわせがんばるぞ五歳史

みやまのしかさんつのがみじかによ六歳昌

定子

はつ絵

鼓城

和友

花村

春子

花代子

葉子

武庫坊

求芽

春江

てる

米朝報

文平

ひか平

エキオ

一孟

富美

和子

テル

とみ子

千代子

越山

ゆう也

靖子

百合子

可住

青居報

美

はやくしろまいにちおこるお母ちゃん
 グリンピアテラにサツカーたのしいな
 場外に早く飛ばし先取点
 秋の風タやけこやけ身にしみる
 毎朝のマラソンだんだん寒くなる
 六年だ最後の最後で文化祭
 ファミコンの魔力に酔って叱られる
 欲しかった手下げはあちゃん買ってくれ
 入賞の絵が戻らないのは不満
 叔母さんが看護婦という頼もしき
 休憩時間あちこちにカッパル秋です
 赤トンボボーイ私もつれてつて
 セールスに徹して修羅の日がつづく
 六十路ともいよいよさらば除夜の鐘
 どこまで逃げてもし逃げても影法師
 耐えて勝つ男が少しずつわかる
 野仏も貰ってなざるさつまいも
 勿体ないなんの取柄のない私
 富士はうるわし乙女峠の名もうれし
 これしきの壁に結論急ぐまい
 肩書を知ってだんだん距離が出来
 作品へ生命を投入する印をおす
 ぶるんとコーヒゼリーにあるroman
 気まぐれな雨だよシートさんと干し
 子の齡にこだわりの自分の齡忘れ
 赤ちゃんかじつと見ている笑わねば
 使い分け出来る愛など持っていない
 意気消沈仰げば天の大ききよ
 天に通じる道がまつすく伸びている
 あせつたら負けよ夜明けを待ちましよう
 長かった一年見事に銀杏散る

小二晴美 小一裕次郎 小三由博 小四方昭 小五純平 小六美保 中二仁昭 中六亜貴子 中二恵子 高一紀 高二真弓 高三美 高四静水 高五敬子 高六蘭幸 高七淑子 高八房己 高九政己 高十清水 高十一純舟 高十二比呂子 高十三笑子 高十四貞子 高十五一路 高十六博子 高十七康子 高十八のぼら 高十九西合 高二十臣子

改まる賀状九十路の手がふるえ
 野の菊がなんとときれいなハイキング
 カラオケに青春の血が甦る
 一坪の庭には庭の冬仕度
 誰からも愛されてる丸い鼻
 自転車のペダル軽い日重たい日
 富柳会 藤田 泰子報
 御用心遊ばせ妻の投げキッス
 三角が四角の上で音頭取る
 やりくりが上手に出来て真珠買う
 目に見えぬ槍を女は投げてくる
 こだわりが三角形で残っている
 三角にみえる相手と酒を飲む
 重くとも投げて倒したボーリング
 贈られて包を変えて又贈り
 楽しみがあるから若いアルバイト
 社はみんな異性出勤日に楽し
 妻の目が三角だぞ花名刺
 やりくりの毛皮は嘘を聞いている
 楽しきの余韻コーヒードカませる
 灯を消してからが楽しい夢芝居
 悩みごと明日を占う下駄投げる
 出しゃばらぬ杭で楽しく剪の座
 三角の池の深さにある神話
 小悪魔の投げるボールは直球で
 三角の赤いお屋根はラブホテル
 歳月に洗われ楽しい走馬燈
 三角の屋根が恋しい風見鶏
 その昔三角だったハート形
 ペン血の会 小出 智子報
 ミンクのコートがタクシー値切ってる

シゲヨ 光子 栄恵 俊夫 由江 千年枝 文次 文次 莊次 花子 花子 ミツエ 富美子 文子 静枝 義雄 富久一 美代 花梢 森緒 森子 喜代 章久 岳人 曲ん手 柳太 優 今日子 泰子 勝子

風当りさけてコートに袴を立て
 ミンクのコート似合う女の重い過去
 段カット赤いコートを引き立てる
 ウィンドのミンクのコート見て帰り
 いいことの続きに髪を長くする
 新調のコートで歩く御堂筋
 嫌なことあってコートに重い日よ
 コート新調師走の風もこちよし
 亡父のコートが曲って行った十二月
 ニ崎いくしま川柳会 角野かず子報
 ほろ酔いの足で迷ってたくなる
 杖ついた男を慕う影法師
 思惟ひとつ不意に広がるタツチホン
 喪服着ると声も自然に低くなる
 虎の絵を描けば猫かと孫が言う
 分ける程ないから迷う遺書の筆
 能面の鼻の穴から秋を見る
 慕う子に連絡船がまた着かぬ
 送別会鍋の向こうで泣いている
 盗人にもむいっここにもなる豆紋り
 恋というゲームにつかれひとり酒
 色即是空迷う凡夫に成り下る
 ひたすらに生きて迷路に気がつかぬ
 さすらいの荷に包丁がさびてゆく
 左遷地の酒のうまさ吹聴し
 想い出を呼ぶ綿菓子にふれる
 手編みセーター寒い男にさせてやる
 好不調イビキでそっと散かる仲
 コスモスは囁くように吐く
 飾るだけ飾り人並み七五三
 貼り替えた障子影絵の母慕う

満津子 好子 ふみ 節子 いくの 藤子 智子 田鶴子 年代 伊三郎 伊二代 静夢 玉子 一郎 歌子 伊升 かず子 美代子 正一 礼子 牧郎 牧子 定人 郁栄 文夫 かね子 貞子 白虎

父一人ふだん着ている七五三
 ロボットに転勤辞令渡される
 落とし穴僕がはまると思えず
 明日のいくさの逃げ道ばかり考える
 熱の腫がやすらぐ母の玉子酒
 逆上りできた夕焼け美しい
 大蔵省とることばかり考える
 お世辞だと判る迷いの別れ道
 細のれん話が弾む初対面
 お大事にカステラばかり攻めてくる
 考えが違ふ茶の間の灯がゆるる

尼崎尾浜川柳会
 北枕ほんとは良いと宿女中
 北海の漁場男の勇む声
 退職後父のだんまり深くなる
 簡単な便りが届く風の街
 流行の風邪が電車に乗っている
 大物はむかし沈黙今多弁
 阿呆でいてもやはり気になる窓の席
 お守りを鈴なりにして人をはね
 二枚目の舌を使って金を借る
 甘言に釣られて落ちる落とし穴
 お隣は旦那がいつもゴミを出す
 いらぬ事つい口走り悔まれる
 虹の橋夢で渡りぬくじを買う
 あの人は足よりおつむが走っている
 人形失恋やつぱりネジが切れている
 すき焼の世話をしながらよく喋り

翠洋会
 三日坊主誓い新たに初日の出
 小春日やまだ続いている立話

幸子 佳秋 紫香 良征 はつ絵 はじ芽 保蔵 幸次郎 静江 晴子 春子
 いわお よしつぐ 歌子 札子 武庫坊 貞吉 良征 寅之助 夢之助 よしを 昌子 江美 すみ 十四郎 牧郎 紫香

かあさんの躰の鞭は温かい
 面倒は見ずに遺産をあてにする
 自分許して深い心から抜け出せぬ
 よこ道へそれる勇氣も持っている
 今年には今年の思い十二月
 ともしらが空気のよな水のよな
 よろこびの心託して菊贈る
 猫の耳雨がんむりの日がつづく
 三面記事熟睡出来た幸思う
 栄転も左遷も知らず畑を打つ
 紫が好きで桔梗を抱いている
 新年の暦へ歩く除夜の鐘

川柳大阪
 試歩の目に明日がハッキリ見えてくる
 五十歩も行けば森ある土地に住み
 便利さの中で忘れている歩き
 歩こうよ極楽までの遠い道
 日本晴れ空気がうまい試歩の朝
 山茶花がひっそり私の歩く道
 山茶花の旅も宴会だけとなり
 文学をかじって貧乏しています
 文学を語る少女の目がきれい
 文学に徹し偉人の無精髭
 文学の道に枯葉が敷いてある
 居酒屋にまだ借りがあつた文学書
 天平の文学しのお墨の色
 責任は幹部が取ると限らない
 暁の手入れ幹部の雲隠れ
 下戸という男に遠い幹部逃げ
 記憶にはございませんと幹部逃げ
 休日の幹部は父の顔となり

兼治郎 登志実 楓楽 宏子 光子 綾子 良江 春子 君子 みつ子 照子 鬼遊
 喜醉報 井上 凡九郎 眉水 比呂志 希久志 重人 与呂志 一步 金太 天平 我勝 司 本蔭棒 鉄心 敏 一介 醉舟 洛醉

やつかいな話幹部へみなまかせ
 栄転の幹部の陰で部下は枯れ
 三幸川柳教室 桜井 千秀報
 回覧板ついでに炬燵で話し込み
 隣席の酔いが廻っている祝辞
 お隣をかけこみ寺にしてみました
 垣根越しじやじや豆とどく夕餉時
 手を出せば取れる隣の柿が熟れ
 ストープも借りて行かれる通夜の席
 お茶の間の部屋のストープまた燃く
 受験児の部屋のストープだけが熱く
 冷めてきた愛へストープだけが燃く
 ストープを点ければ部屋が喋り出す
 修理したストープカタログについて来る
 ストープの温み伝わる打聴診
 単身赴任送るパンザイさみしくて
 階段を上りつめれば待つ別れ
 もう仮面被り出している別れ際
 子別れの儀式が悲しいキタキツネ
 別れるの別れてやると言うて老い
 雑貨崎ギリシャの街に似せて描く

川柳ひらい
 愚痴のかずだけ白髪ふえていき
 兵當で欠礼ピンタに耐えた過去
 一歩だけゆずる気持を買ってやり
 柿の実がいっぱい熟れて老い二人
 宿無しの犬だぬ私についてくる
 礼儀作法お見合い前の一夜漬け
 老妻を呼ぶ声も次第に柔となり
 久しぶり老いたる父に討たれよう
 徒歩の会孫のルックではずんでる

喜醉 静 靖子 かなめ 千香子 美子 三千子 みね 桂香 百合子 美代子 智水庵 和子 文子 周穂 重次 孝子 裕子 良一 寿子 胤親 方子 せつ子 栄翁 敏和 かずを

久しぶり昔気質も丸くなり
 一札はしたが敵意に目は燃える
 父ちゃんの覚げ毛を可愛い指でとり
 筆不精恥を覚悟の文ふるえ
 友の名が浮ばぬほどの久しぶり
 出直しの一歩に故郷の日がまぶし
 お札には酒がいいぞとあつけらん
 重箱の隅で主役になりそこね
 おおやけに出来ぬ礼です袖の下
 子ギリ絵に一足早い冬の彩
 久し振り我が家の灯り母の影
 水車小屋久しぶりだと音をたて
 駄目虎が眠りを覚ました甲子園
 カラオケで知った課長の別の顔
 髪染めて残り火燃やす老いの意気
 さよならと四文字で終る縁です
 ドクターを夢見て迷う少年の瞳
 断髪をしてから歳を割引かれ
 乱れ髪女は夜叉の面となる
 四面楚歌おんな黙って髪を梳く
 フライドを棄てて一歩の靴軽く
 ライバルとやあやあやの久し振り
 殴られる覚悟は一歩前に出る
豊中もくせい川柳会 田中 正坊報
 旅先で聞くことになる除夜の鐘
 旅に寝て夜中に財布のぞいてる
 時刻表たつぷり調べ旅行かす
 寒がりの父の墓標に雪が積む
 野仏に傘をさしたい雪しぐれ
 走るから雪も斜めに降ってくる

年子 トモ子 美代志 辰路 柏峯 幸江 美佐保 典子 孝子 愛子 千恵子 アヒル やすえ 博 ともえ 久子 博友 青銅 健一 草五郎 柳風 真備雄 照路

舞いおちる雪もフツシユであともなく
 出稼ぎの父へ吹雪のかな便り
 恋終るたびに大人の仲間入り
 終いまで聞きなさいよと良い話
 終章はだあれも知らぬ私小説
 終りまで知らずにうたう数え唄
 大いなる眠り待ちます不眠症
 方言で呼びかけられた赤字線
 放浪の画家が好んだ線路道
 一線の向うの人とあきらめる
 電線に何の合図か鳥鳴く
 拾われて一円玉のひとり言
 凡夫婦粗品のようにされて生き
 元旦もナースキャップに誇りあり
 一つだけあればこと足るかくし芸
 駅伝通過うしろに瘤だらけの冬木
聴障川柳 稲田 豊作報
 落書は漫画のルートツかも知れぬ
 耳しいは書かれた文字と話す
 信心の旅で書いている「おさめ札」
 始末書を書いたを自慢にするヤクザ
 書く趣味で今は投稿ムニアなり
 肩書がとれてくぐれる縄のれん
 肩書も見栄も要らない屋台の灯
 書く事が嫌いでお喋り好きな人
 新しい景色を描くダムの青
 言いにくい事は手紙に書いてくる
 天翔けて華と散りたる遺書哀し
 達筆と言われた父に似た子なし
 百言に勝る一筆この念書
サークル棟樑 田形 美緒報

明吉 山久 春坊 正坊 紫香 花村 富子 隆 美祢子 房子 よし子 福一 満女 登志実 作二郎 豊作 鉄火 三香 承平 文古 和江 珍顔 春一 鼓草 たみ 八恵子 みつる 行江

離婚成立十三日の金曜日
 何事が起ころうとも無神論
 口実に十三日の金曜日
 何のその十三日の金曜日
 晴朗なり十三日の金曜日
 炎えてます十三日の金曜日
 ポーナスが出た十三日の金曜日
 のん気者駅に自転車忘れて来
 のん気でもねじはちまきの入試前
 籤を買う十三日の金曜日
川柳藤井寺 赤木 和子報
 米なしで金が芽を出す休耕田
 豊作と言うのに米の値が上り
 奥さんの機嫌をもうにかぶる猫
 一匹は猫の分にとさんま買
 川底の一円秋の陽を弾く
 終電車そろそろ座席の酔いもさめ
 塔の空道ある如く鳥帰る
 豊作も不作もいやな米どころ
 共稼ぎお米とくのも勤務割
 アドリブを少し過剰に武器とする
 紅葉の哀れ辞世の化粧かも
 落ち葉踏む自分の音に酔っている
 一粒の米も一年かかっている
 貯めた金六文だけを持って逝き
 ロボットは米も食わずに仕事する
 米菓子のはぜる音する昼下り
 もう一番取れと親方駄目を出し
 美辞麗句並べているに色直し
 シヤム猫の目は冷たくて青くすみ
 裏庭に鶏卵一つ冬日射す

久子 雅子 三子 美緒 美代 美代 智恵子 登美子 薫風 作秀 与呂志 つや 須美 吸江 末一 治子 志洋 美代子 本蔭棒 伴子 秋園 哲正 たかし 美佐 祐二 義一 和美

木々の葉に鳴る風のあり遍路道
木の実ころころ故里訪うわが足に
十本の指それぞれに役目持ち
休業の詫にトラキチですきかい
おにぎりを作ったおこげなつかしい
飼主に似て出歩きの好きな猫
靖国は玉虫色に話し付け
ウイंकを気付かぬ苦だサングラス
歩き出さねば崩れてしましそうな影
川柳塔まつえ12月例会 恒松 町紅報
単線は鉄道唱歌のつづく車窓
タブレット投げて単線通過する
単線の駅にわびしい冬の月
単線を守って継ぐ過疎の夢
単線の気のむくままの旅続く
単線の委託の駅でそばが売れ
単線に乗って緑の風に向う
単線は二度乗りかえて母の駅
国鉄は次々単線切って捨て
単線に乗り週刊誌読み飽きる
単線の行き着く処過疎の村
無心にはなれぬ生身が犯す罪
無心する息子へ母は日銭追っ
埋れ火が無心にさせぬ夜半の風
久々の便り無心にふれて来る
アルペムは赤い鼻緒の児にもどす
無心でないから空くじばかり出る
砂遊び無心に築く高い塔
キリストの膝でエンゼルの昼寝
無心成就のため作戦練っておく
初雪が無心に舞って土が吸う

雅美 彩 繁 みのる 麻雄 正枝 清心 昭子 紅子 与根一 弁治郎 昭二 ちかし 美治 鳳人 正肇 正歩 巡歩 多賀子 みつこ 幸一 三男 雄々 さまえ 芳子 まさし ノブ 妻子 秀子 友子

平和足り炬燵にはまる毛糸針
編み物を教えています独身です
あやとりの橋へ女の念を編む
レース編む森の天女の白い服
手の込んだ模様編んだ竹細工
仕掛人見えない網を編んでいる
背負い箆竹の触れ合う音で編む
籐かごを編んで野菊を活けてみる
入学の孫へ手編みのブルゼント
老兵は死なぬ戦記を編みまては
編み棒が生きて躍って目が揃い
やつと寝た児へ大声の夫叱る
カラオケで大声出して気分はれ
電話口大声も出る年の暮れ
買い足した葱と豆腐へ暮れいそぐ
十二月引き算ばかりでたそがれる
燃え残る火種を抱いてたそがれる
倉吉川柳会 渡辺 雪句報

雪美 鶴丸 瑞枝 寿美子 愚童 貢範 代仕男 みえ 翠星 由郎 玄帥 舞吉 静江 壮樹 紫吻 孤呂二 叮紅 律子 寿満湖 寿朗 康子 喜美子 みゆき 亜弥 碧水 明 ゆり子 文子 次男 柳風

虎の威を借りた女が前を行く
四股踏んでこの一年を丙寅
正月には来てくれるふうてんの寅
抽出しの奥にかくした子の心
人情がまだ通いあう路地の奥
奥伝をもらってからの怠けぐせ
一言に奥を見越した温かさ
奥の間に通きそれ小便したくなり
あんみつのスアーンおさげの日が戻る
残菊やいまだ明かさぬ氏索性
口答えを悔い一つ庭の菊を截る
ロケットが造花の菊を植えている
人生の終焉飾る菊の花
枕辺の菊が許しをこっている
あん蜜を孫のおやつのお相伴
奥座敷古いしきたり生きつつけ
病む父の固い爪切る寒い音
雑談に入りみかんに爪を入れ
爪赤く塗って女が修羅を舞う
点滴で生きる命に爪が伸び
納得のゆかぬ爪先石をけり
白ばらをあかいマニキュア活けてゆく
爪を切る音にも冬は冬の音
生涯に二度もハレーに慕われて
負けいさ靴も背広も重くなる
つま楊子素知らぬ顔で横を向き
途中下車出来ぬ切符で草臥れる
雨だれのリズムと待っているコーヒー
奥の手があるので顔色動かない
深爪のいつまで続く悔い一つ

御前 独歩 苦句 貴代子 好江 園歩 美智子 幽香 春江 静子 武庫坊 上志子 房子 一年代 照子 よし津 芳子 柳影 かすみ 君子 杜的 伊三郎 正朝 米朝 いわゑ 隆子

妥協して積んだ小石がしやべり過ぎ
 訊かれたら答える名刺持っている
 着飾った夫婦へベツト小さく吠え
 本妻を人形にしているエゴイズム
 はつきりと物言う部下に委せ切り
 飴蜜を娘と食べている髯親父
 みみず腫れ猫にやられたことにする
 森を出る女が捨てた壺

笑女 郁栄 寿馬 光代 白漢子 紀雄 はつ絵 札子

川柳塔唐津支部

久保正敏

昭和五十七年九月いろいろの事情が重なって
 虹川柳クラブ全会員が故新聞回天子の許を
 離れ代表者に田口虹汀氏を推し川柳塔社常任
 理事会の承認を得て川柳塔唐津支部の名称の
 もとに出発して三年、六十年十月には塔社幹
 部諸先生の御來援を得て曲りなりにも結成三
 周年記念大会を終ることが出来ました。

發展途上の小さな支部の私達は毎月第一日
 曜日を例会日と決めて、塔誌の課題吟三題各
 五句及び雑詠四句(三句は愛染帖へ一句は各
 地柳壇)を毎月二十五日迄に事務所で集録コ
 ピーして全会員に配布し、会員の私宅をお借
 りし三題の課題吟の内一題を廻り持ちの選者
 選とし、残り二題と雑詠を互選の形で句会を

翅んで見度くて奥様葉をストツプす
 にじり口菊一輪へ湯がたぎる
 蟹爪を振り上げたまま茹でられる
 無人駅野菊が人を守って居る
 取る人もない柿母がひとり住み
 出直すときめた家裁に菊香る
 パスポート菊の御紋を眺めバリ
 大輪の菊を傲慢とも思ふ

千世子 明代 鼓城 江美 水声 春子 みつ子 婦美子

開催しております。各題最高得点者一名に三
 百円程度の品を賞品として贈ることにしてお
 りますが、僅かな物ですが入賞の印として私
 達の場合は作品の励みになっていると確信
 しております。小さな支部で指導者もおりま
 せんので披露後一時間前後を句評を主とした
 意見の交換をすることにしておりますが、と
 きには時間を忘れて論戦を展開することもあ
 り、会員の熱意に頭が下がる思いが致します。
 例会後各題から入選二句ずつを選んでローカ
 ル紙日刊唐津新聞に掲載して戴いております。
 次に毎週金曜日を川柳の日と定めて唐津新
 聞社の協力を得て金曜柳壇の名称で相当のス
 ペースを割いていただいております。

ハガキに三句書いて一般からも応募してお
 りますが、六十週目を迎えて漸く巷間に浸透
 して来たように見受けれます。
 その他銀行のロビー、スナック、料亭の壁
 等に作品を展示して鋭意普及に努めている昨
 今です。評判は悪くありません。

躍進を誓う小さな支部の新春 正敏

菊の紋このごろカーテン少し開く
 カゴメカゴメ今のこともは遊び下手
 本音までほとりと落ちる軽い咳
 発車へル野菊の白が深くなる
 葬儀屋に毎度と言われる不自然さ
 マニキュアを知らぬ手にある福袋
 未完成だから可愛い妻である
 念入りに掃除済ませた地獄耳
 病む者に爪が伸びるといふ希望
 野辺送り野菊乱れる道を縫い
 風の向き素早く見抜く風見どり
 白い蝶もつれて天に昇りけり
 ひとり居の父の部屋から枯れすすき
 爪を切って今日さ拭えぬ手の汚れ
 ハンカチの白さ拭えぬ手の汚れ
 水道の冷たさ朝が遅くなる
 丹精の誇り多弁な酒となる
 身勝手な恥じさせて妻病んでいる
 カラオケが好きな女の長い爪
 冗談の背中合わせにある疑惑
 爪まで切らせて男だらしない

墮駄 眉水 文平 歌子 春蘭 美津枝 曲ん手 百合子 靖子 右近 志津 枯造 良征 千秀 求芽 静江 弘生 山久 博香 紫香

Y・F・C川柳会 人見 翠記報 忍

一番星遊び疲れたすべり台
 グリーンシヤワー浴びて父子の夏休み
 日盛りに黒を着て出る小さい義理
 星廻り見合ことわる伯母がいる
 陸橋の二人に星が降ってくる
 流れ星願いをかけて運針す
 一番星見つけてはしやく塾帰る
 明日ゴルフ星空を見て入る夢路

よし津 たす子 節子 房子 紅葉 翠記 恭州

2 月 各 地 句 会 案 内

	日 / 時 及 び 題	会 場 と 投 句 先
川 柳 塔 ま つ え	8日(土) 午後1時半より 親子・貨車・笑う	慈雲寺 松江市和多見町 〒690 松江市雑賀町1686 恒松町紅 句会費 300円 投句料 300円(60円切手可)
川 柳 わかやま	9日(日) 午後1時より 筋道・空想・帆	和歌山県民文化会館4F 中集会室 〒640 和歌山市駕町15 野村太茂津 句会費 300円 投句料 60円切手3枚
菜 の 花	10日(月) 夕6時より 北・世間・船・乱れ	八尾西郷会館 近鉄大阪線八尾駅南西歩5分 〒581 八尾市山本町5-4-6 内海幸生
西宮北口	10日(月) 午後1時より 谷・代理・自由吟	西宮中央公民館 阪急神戸線西宮北口駅南出口歩5分 〒661 尼崎市武庫之荘5-25-17 春城年代 句会費 300円 投句料 60円切手4枚
川 柳 ねやがわ	16日(日) 午後1時より 温泉・頭・国鉄	寝屋川市立総合センター1階会議室 〒572 寝屋川市春日町9-9 高田博泉 句会費 500円 投句料 60円切手3枚
もくせい 川 柳 会	17日(月) 午後1時半より 油・怒る・時計・自由吟	豊中市立中央公民館 阪急宝塚線曾根下車南歩5分 〒560 豊中市旭丘8番87-2 田中正坊
堺川柳会	18日(火) 夕6時より 気がね・気分・清める・記録	堺青少年センター3F 阪線線綾之町西南 〒593 堺市堀上緑町2-9-2 河内天笑
南 大 阪 川 柳 会	19日(水) 夕6時より パン・ピンチ・プレハブ・ペンション	寺田町高松会館 国鉄環状線寺田町駅南100米 〒544 大阪市生野区生野西1-5-2 金井文秋 句会費 500円 投句料 180円(郵券可)
高槻川柳 サークル 卵 の 花	20日(木) 午後1時より 秘訣・向い風・自由吟	高槻市民会館301号室 阪急電車高槻下車5分 〒569 高槻市桜ヶ丘北町3-19 辻白浪子 句会費 500円 投句料 200円(60円切手3枚と20円切手1枚)
富 柳 会	20日(休) 午後1時より 傘・和服・怒り	富田林市中央公民館 〒584 富田林市寺池台3-22-18 藤田泰子
南海電鉄 川 柳 部	20日(木) 夕6時より 国鉄・大安・消しゴム	南海会館ビル内 南海電鉄本社地下食堂 〒542 大阪市南区難波5丁目1番60号 南海電気鉄道(株)不動産管理部管理課 広井季雄 句会費 無料 投句料 60円切手1枚
東 大 阪 川 柳 同 好 会	22日(土) 夕6時より 梅酒・洋酒・親交・世話好き	東大阪市社会教育センター2F 近鉄布施駅北へ5分 〒579 東大阪市新池島町1丁目4-14 齊藤三十四 句会費 500円 投句料 60円切手3枚
駒つなぎ 川 柳 会	24日(月) 夕6時より 熱血・息・響く・交換	寺田町高松会館 国鉄環状線寺田町駅南口下車 南へ1丁3筋目左へ駅より歩3分 〒572 寝屋川市成田町19-28 里小路

★特に記載なき場合 句会費 500円、投句料 300円(郵券可)、各題3句以内

原稿送り先(メ切・毎月20日 予め決定している場合は何ヵ月分でも結構です)

〒596 岸和田市荒木町1-29-1 宮園射月芳

本社2月句会

日時 二月七日(金) 午後六時

会場 メンズファッションセンター3階

東区内本町一丁目 電話06・941・1918
地下鉄谷町4丁目下車(2番出口)交差点西南角

おはなし

宮尾 あいき

兼題 「その他」

河内 月子 選

「腕」

内海 幸生 選

「認める」

神谷 凡九郎 選

「水」

野村 太茂津 選

席題 二題 当日発表 各題三句以内厳守

会費 五百円

★投句は柳箋(4cm×19cm)に一葉一句。
投句料 300円(60円切手5枚)同封のこと。

川 柳 塔 社

3月の兼題 「証選 扱ぶ」 「地 図」 「亀」

3月の本社句会は7日(金)

●募 集●

四月号発表 (2月15日締切)

川柳塔(10句)西尾 栞 選
水煙抄(10句)黒川 紫香 選
愛染帖(3句)橘高 薫風 選
課題吟(各題5句以内)
「読む」 有働 芳仙 選
「合 図」 野中 御前 選
「餌」 中村 優選

★川柳塔欄の投句は本社同人に限ります。
★水煙抄欄の投句は一般誌友の方です。

五月号発表 (3月15日締切)

川柳塔(10句)西尾 栞 選
水煙抄(10句)黒川 紫香 選
愛染帖(3句)橘高 薫風 選
課題吟(各題5句以内)
「頰張る」 藤田 軒太郎 選
「ムード」 大原 葉香 選
「損」 中原 諷人 選

★愛染帖・課題吟は同人・誌友を限らず。
★用紙は川柳塔社柳箋を、ご使用ください。

2月の常任理事会は1日(土)・場所は本社事務所

本社句会の日どり

4月句会……………4月7日(月)
5月句会……………5月7日(水)
6月句会……………6月7日(土)
7月句会……………7月7日(月)
8月句会……………8月7日(木)
9月句会……………9月8日(月)

定価 五百円(送料50円)
半年分 三千二百円(送料共)
一年分 六千三百円(送料共)
昭和六十一年一月二十五日印刷
昭和六十一年二月一日発行

編集兼 中島 蓬太郎
発行人 藤原 童心社
印刷所 藤原 童心社

〒545 大阪市阿倍野区三木町二一〇一六
ウエムラ第2ビル202号室

発行所 川柳塔社
電話(三六三)一六九一四番
振替口座大阪81三三三六八番

編集後記

宮元且、妻はお難煮を祝うと早々に、里の母と西九州四日間の旅に出かけた。私は、妻の赤いスリッパを借用して還暦気分をひたした。まことに他愛ない。

☆旧臘十六日近畿文字放送から初の川柳教室が放映された。番組には短歌も俳句もなく、川柳が文字放送の魁となった。牡丹雪降りしきる中、社のテレビを見に出かける。想像した以上に色彩が美しい。日本で最初に文字放送に乗った川柳は、西尾栗主幹の「新幹線隣は何をする人ぞ」である。私の解説が、芭蕉の俳句を踏まえて、現代人、隣人への無関心ぶりをとらえています。対照的な句に「鍾行の旅の対話はあたたかし栗」があり、幹線とローカル線の味の区別が明確ですと出る。ついで「万国旗思ひ思いに風に揺れ 神前明義」「ご近所のさながら歳暮預り所 傍島静馬」の句と解説が出て、スポットに

川柳番傘同人句集発刊を紹介。「一番傘川柳本社は創立七十七年を記念して同人句集を発刊。参加者九百七十名に及ぶ集大成で、川柳のよいところ、後輩へのひとこと、などのアンケートも掲載、番傘の句風の紹介にとどまらず、川柳の幅の広さと豊かさを知らせてくれる。」この時、水府、路郎の顔が浮んで消えた。以来風邪をひき、熱を押してカルチャーに出たので、こじらせて正月に持ち越した。

☆歳暮の時期が過ぎると句を替えて貰うように、福島郁三、小松原爽介両氏とわが西出風葉さんの句を送り、新年には、年賀状から「干支の虎孫に描かせて書く賀状 朝山千世子」の句を送った。近畿一円に行き渡り、昭和六十五年には、全国五百万台の普及を見込まれているニューメディアだ。ご支援をお願いする。☆同人白岩文衛氏の計報に接したの二日、無常迅速には言葉もない。句集「出会い」の出版、中国旅行、

栗主幹の会のうれしい顔が次々と思い出される。(冥福を祈りする。)(薫)週刊朝日の山藤草二氏ではないが、川柳塔をうしろから読ませる谷垣史好さんのお蔭で、拙文もついでに読んで貰えるのがこの欄である。それだけに気をつかう。うまく書こうと思えばどうしても背伸びをする。平易なことを難かしく表現する。文は人なりと謂われる通りに毎回恥をさらしている。軽薄短小の世の中よりしく、恥を恥と思わぬ鉄面皮にも成りおせず、一夜干しのするめのように何とも生臭い。中身がないのでやたらに飾りたてて一部流行の川柳のようでもある。

☆外山滋比古著「省略の文学」丸谷才一「文章読本」、ジャンニ・ロダリー(窪田富男訳)「フアンタジの文法」佐藤信夫「レトリック感覚」本間徹夫「高校生のための文章読本」桑原武夫の「文章作法」別冊宝島「文章・スタイルブック」と「レトリックの本」井上

ひさし「私家版日本語文法」佐藤信夫の「レトリック感覚」「レトリックを少々」と、読んだからといって文章がうまくなるものではない。金を儲けたくて「金の儲け方」の本を読むのと同じことで、これらの本は、著者の意見や道理で、参考になつてもほとんど役に立たない。要は本人が思う通りにやってみるほかないようだ。川柳の勉強に川柳を読むよりも、他のジャンルをものを読む方が大切なように「文章読本」をもう追いかけない。(き)

☆ここ二十年ほど日記帳は横書きを使っていたのだが、今年はタテ書きのを買った。横のものをタテにしな、というのは怠け者の形、容詞、せめてこんなことで気分一新が出来ぬものかと考えている。

いるのか、自分でも不思議に思うことがある。理屈を言えば、いろいろあるわけだ、結局は酒好きのナイトキヤップと同じで、一日の幕をおろすための儀式、そんな程度の意味しか今はないようだ。

☆ところで、昨年読んだ本の中で面白かったのは、神坂次郎著「元禄御堂奉行の日記」(中公新書)。尾張徳川家に仕える朝日文左衛門重章という、酒好き女好きバクチ好き、芝居に目がないという下級武士が、十八才の夏の夜から、四十五才の夏の夜から、四十五才で死ぬ、その前年まで延々と八十八百六十三日、無類の好奇心と根気で書き綴った日記(全三十七冊)をもとに、元禄の世相を軽妙に再現した一書である。

日刊

電波新聞

投稿欄案内

川柳 選者・橘高薫 風

(掲載日) 毎週水・土曜日

俳句 選者・小寺正三

(掲載日) 毎週火・金曜日

短歌 選者・佐々木信夫

(掲載日) 毎週月・木曜日

〈投稿規定〉

はがき一枚に三句(首)以内(川柳・俳句・短歌と明示すること)。投稿随時。

自由課題・秀句には掲載紙贈呈。

〈投稿先〉

〒五三〇・大阪市北区中之島三丁目二番 朝日新聞

ビル6F・電波新聞大阪本社「学芸部」あて。

ボリュームたっぷり スタミナ満点!!

豚饅・焼売・焼餃子



なんば戎橋筋本店
その他有名百貨店でどうぞ



TEL641-0551